盟約の花嫁

徒然

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
盟約の花嫁

【Ｎコード】
Ｎ６９６３Ｗ

【作者名】
徒然

【あらすじ】
お前たちが望む間だけ、お前たちを導くとしよう。その代償として、お前たちは私に人族の花嫁を与えよ。お前達が約束を違えぬ限り、盟約が破られることはない。・・・・かつての盟約に基づき、竜王の花嫁を選ぶ時が来た。辺境の小さな村に住むフィリスは、花嫁候補の娘の付き人として、竜王の住む城に行くことに・・・。

序章

かつてこの大陸は、無数の小国から成り立っていた。
種族として未だ幼い人類は己の縄張りを競って戦を繰り返し、多くの命が失われた。
何百年にも及ぶ戦乱に疲弊した人々は、竜族の長に願った。
竜族から我々の王となる者を与えて欲しいと。

万物の長である竜族は温厚で思慮深い。
全てを知り、全てを統べる存在。
人々の願いに、長は答えた。

異なる種族が王となるなど、自然の摂理にあるまじきこと。正しく種としての道を進みたければ、そのようなことを考えぬことだと。
それでも長に訴え続けたのは、まだ子もなさない若い娘だった。
戦争で家族を全て失った娘は、必死に長を説得した。
このままではいずれ人は最後の一人となるまで戦うだろう。愚かな人間の王達のせいで。
人間はあなた方に比べこんなにも幼いというのに、それに見合わぬ知恵と力を持ってしまった。
私たちには導きが必要なのだと。

頑なに拒む長に、娘は一歩も引かなかった。
やがて、長は娘に応えることに決めた。

それでは望み通り、我がお前たちの王となろう。
だが、やはり真の王となることはできない。

お前たちが望む間だけ、お前たちを導くとしよう。
その代償として、お前たちは私に人族の花嫁を与えよ。

これは盟約。
お前達が約束を違えぬ限り、盟約が破られることはない。

娘は長の花嫁となり、長は人々の王となった。
大陸の戦乱は収まり、約１００年の間に１つの国に統一された。
やがて王は国を７つに分割し、王の直轄の国を宗主国としてそれぞれに人族の王をたてた。

エストア帝国の建国から７００年。
竜王の庇護の元、人類は緩やかに繁栄していった。

第1章　花嫁候補

この日、村はかつてないほどの活気に満ちていた。
ここはエストア帝国の東の山間部にある、小さな村だ。
一番近い隣の村まで、半日も歩かなければならないほどの辺境の村。
その村の村長の一人娘オリヴィアが、現竜王の花嫁候補に選ばれたのだ。

竜王ジークベルトは、初代竜王の孫にあたる。
竜族はみな長命なため、７００年近い年月の間に代替わりをしたのはわずか2回であった。
盟約に基づき竜王は人間の花嫁を娶る必要がある。
しかし、竜という生き物相手に政略結婚など求められるはずもなく、気に入らぬ娘を勧めれば最悪王の座を捨てて出ていってしまうかも知れない。
大陸に住む者達は、王が去ってしまうことを何よりも恐れていた。
この大陸の平和と繁栄は、全て王によって支えられているのだから。
だからこそ、花嫁選びには万全を期さなくてはならない。

そこで、各領地から年頃の美しい娘達を選出し、城に住まわせることになった。
期間は一年。
その間に王が気に入る者がいれば花嫁とし、いなければまた異なる領地から娘達が送り出される。
差し出す領地は公正にクジで決められ、不満が出ないよう配慮されている。

「フィリス、ぼーっとしてないで！もうすぐ帝都からお迎えの方々がいらっしゃるのよ！宴の準備を手伝ってちょうだい！」
ぼんやりと風に揺れる草木を眺めていた私は、慌てて視線を声の方に向けた。
洗濯し終えたテーブルクロスやら何やらを両手に抱えた女が、嫌気のさした顔で私を見ていた。
「ほんとに、役に立たないったら・・・いいかい？使者の方々に失礼なことだけはしないでおくれよ？」
「はい、奥様。」
大人しく返事をすると、女はフンと鼻を鳴らして宴の会場へと向かって歩いていった。
彼女はオリヴィアの母、ライラだ。
幼い頃に両親を落盤事故で亡くした私を育ててくれたのは、年老いた祖母だった。
しかしその祖母も7年前に病で亡くなり、路頭に迷った私を助けてくれたのが、3つ年上のオリヴィアだった。
身寄りのない私に同情して、召使いとして雇うよう父である村長に頼んでくれた。
彼女のおかげで、私は衣食住に困らない生活をさせてもらっている。

炊き出しの準備をしている場所に行くと、女達がせわしなく立ち働いていた。
「あの、私も何かお手伝いを・・・。」
声をかけると、楽しそうに笑い合っていた女達は一瞬無表情になった。
「じゃあ、水を汲んできておくれ。不器用なあんたでも、それくら

いはできるだろ？」
その言葉にクスクスと忍び笑いが漏れるが、気にせず手近にあった桶を手にとった。

こんな調子で、オリヴィアが帝都に行ってしまったら、自分はどうなるのだろう？
この村の中でオリヴィア以外に、私を庇ってくれる人はいない。
思い切って街まで出てみたところで、たかが１４になったばかりの小娘が、どうやって一人で生きていけるというのか。
グルグルと暗い思考にはまったまま、村から半刻ほど行った先の川の岸に座り込んだ。
こんな所を見られたら、きっとまたきつく叱られる。
そうは思うが、足に根が生えたように動かなかった。
ふと水を汲んだ桶を覗き込むと、冴えない顔をした少女の顔が見えた。
蔦色の細い髪はだらしなく垂れ、痩せた顔に何かに怯えているような、緑色の目が際立って見えた。

緑色の目をしているのは、村の中でも私しかいない。
亡くなった祖母と母も同じ色の目をしていたが、他はみんな青や薄い金色だった。
みんなと違うということは、みんなに嫌われるということだ。
成長するにつれそれが分かってから、私は前髪を長く伸ばした。
村の外には、自分と同じ色の目を持つ人がいるだろうか？
帝都には大陸中の人が集まってくるという。
オリヴィアがもし花嫁に選ばれず帰ってきたら、そんな話も聞かせてもらえるだろうか？
そこまで考えて、苦笑した。
オリヴィアもみんなも花嫁候補に選ばれたことをあんなに喜んでいるのに、村に帰ってきて欲しいと思う自分はなんて恩知らずなの

だろう。
思わずため息をついて立ち上がる。桶を両手に抱えたところで、後ろでザザッという派手な音がした。

「ッ！？」
後ろの木の上から自分の背後に、何かとても大きな物が落ちてきた。それに驚いて、手に持っていた桶を落として振り返った。
とっさにその何かと距離を取ろうとして、足元の石につまずく。派手な水しぶきをあげて、気が付いたら川の中に尻もちをついていた。
「すまない、そんなに驚くと思わなかったんだ。」
目の前に差し出された手に驚いて見上げると、そこには軍服を着た青年が立っていた。
濃い茶色の髪に、同色の瞳をしていた。
整ってはいるがどこか凡庸な顔立で、軍服を着ていなければ村の男たちの中に紛れていても、きっと気付かなかっただろう。
私はドキドキする胸を抑えて、差し出された手を取った。
すぐに強い力で引き上げられて立つと、男の背の高さに驚いた。
近くに立つと、ほとんど真上を見上げるようにしないと顔が見えなかった。

「大丈夫か？怪我は？」
私が頭を振ると、男はほっとして、しかしすぐに顔をしかめた。
「・・・このままじゃ風邪を引いてしまうな。」
男がフィリスの頭上にスッと手をかざすと、何か暖かいものが体を覆った。
「これで大丈夫だ。」
体にまとわり付いていた濡れた服の感触がなくなり、驚いて全身をペタペタと確認した。
「えっ！？なんで？なんで？」

何時の間にか、服は完全に乾いていた。
説明を求めて男を見ると、男は楽しそうに私を見ていた。
「魔術だ。見るのは初めてか？」
魔術と聞いて、私は頬を紅潮させた。
魔術を使える人間は少ない。その大半は国の中枢にいて、田舎に住む者は生涯、魔術というものを言葉でしか知らずに過ごす者も多い。
それをまさか、自分が体験できるなんて！
「喜んでもらえたようでよかった。君は、ダーナの村の者か？」
頷くと、男は空になった桶を拾って水を汲んだ。慌ててそれを取ろうとすると、ひょいと片手で避けられた。
「驚かせてしまったお詫びだ。俺はジル。帝都から花嫁候補の娘を迎えに来たんだ。飲み水を探しに一人で森に入ったら、仲間とはぐれてしまってね。よかったら、村まで一緒に連れて行ってくれないか？仲間ももう着いてる頃だと思うから。」
温和な笑みを向けられて、素直に頷いた。
「こっち。」
先に立って歩き出すと、ゆったりとした靴音が後ろを着いて来た。
いよいよ、オリヴィアは帝都に行ってしまうのだ。そう考えると、興奮していた気持ちも冷めて行くようだった。
「ところで、名前を教えてもらっても？」
「・・・・・フィリス。」
「そうか。いい名前だね。」
「・・・ありがとう。」
社交辞令と分かっていても嬉しくなって、私は小さくお礼を言った。
「そういえば、どうして木の上に？」
驚きの連続で忘れていたが、彼は何故か木の上から降りて来たんだった。

私があそこに着いた時はもちろん誰もいなかったし、結構長い間座り込んでいたと思うのだけど。
「休憩するのに丁度いい枝だったから、登って休んでたんだ。そろそろ行かないとやばいと思ってた所に、たまたま君の姿を見つけてね。」
「そうなんだ？」
休憩するのにわざわざ木の上に登るとは、変わった人だ。
「まさか木の上に誰かいるなんて、誰も思わないだろ？だから、人目を気にせずゆっくりできるんだ。」
心の声が伝わったのか、ジルはそう話してくれた。
返事はしなかったが、私が話をちゃんと聞いているのは伝わったのだろう。
それからも、ジルは色々と話しかけてくれた。
特に私が返事をしなくても、ジルは気にすることなく気さくに話をしてくれる。
そのことに、今まで感じたことのない心地よさを覚えた。
けれど、楽しい時間も長くは続かない。

「フィリス！あんた水汲みにどんだけ時間かけるんだい！ほんとに役立たずだよあんたは！」
村の入り口に着いた途端浴びせられた怒声に、一瞬で顔が無表情になるのがわかった。
辛い顔をすれば余計に怒りが大きくなるし、実際たかが水汲みにこんなに時間がかかるはずがない。
自分が悪いのは分かっていたが、容赦のない言い方に素直に謝れないでいた。
私を怒鳴りつけた女は、ふと後ろにいるジルに気がつくと慌てて愛想笑いを浮かべた。
「あ、あら、帝都の方でしょうか？この娘が何か？」
「森で迷っていた所を助けてもらいました。すいません、この子が

遅くなったのは俺のせいなんです。」
「まあ、そうでしたか。他の皆さんはもう広場においでですよ。さあ、こちらです。」
聞いてる方が気持ち悪くなるような猫なで声で言う女から逃げるように、私は彼の手から桶を奪い取ると、振り返ることもなくその場から逃げ出した。
後ろでジルが私を呼んだ気もするが、今振り返って落ち込んだ情けない顔を見せたくなかった。

オリヴィアを迎えに来た使者は7名。そのうち2名は領主の臣下で、ほか5名は竜王の臣下だ。
一晩集会場に泊まり、明日の朝早く出立することになっている。
広場の正面には薄紫のワンピースを着たオリヴィアが座っていた。
艶やかな金茶色の髪、空の青を写し取ったかのような大粒の青い瞳。ふっくらとした唇はピンク色で、肌は雪の様に白い。
まるで妖精の様なその姿に見とれぬ男が、この世に何人いるだろうか。
見た目だけじゃない。オリヴィアは心も綺麗で、優しい。
男も女も、オリヴィアを慕う村人は多い。
今回彼女が竜王の花嫁候補に選ばれたことは、この村みんなの誇りだった。

ふと、葡萄酒を手に仲間と歓談していたジルが私の方を見て、挨拶するかのように手を上げた。
つられてジルの仲間もこちらの方を見たから、焦って身を木の影に隠した。
人目につかないよう隠れていたのに、なぜ分かったのだろう？
「フィリス、そんな所に引っ込んでないで、向こうで一緒に楽しまないか？」

ひょっこり現れたジルはそう言って身をかがめた。
使者の一人が私に話しかけたことに、村人達が訝しげな声を上げる。
あまり好意的ではないその声が聞こえてこないはずはないだろうに、ジルは何も聞こえてないように微笑んだまま私の返事を待っている。
「いい。私、ここにいる。ジルは主賓だから、みんなの所に戻って？」
声をかけてくれたのは嬉しいが、みんなはいい顔をしないから。
本当は宴の席にも顔を出さないよう言われていたが、どうしてもオリヴィアの晴れ姿を見たくて、こうして出て来てしまった。
きっと後でライラにこってりとしぼられるだろう。
「俺はフィリスと話がしたいんだ。少しだけでもいいから、ここにいてもいいかな？」
「・・・どうして？」
確かに私はジルを村まで案内したが、ただそれだけの事だ。
理由が分からず戸惑う私に、ジルは首を傾げてしばらく考え込んだ。
「改めてそう言われると、どう答えていいか・・・世間話をするのに、どうしてもなにもないだろ？」
それは、そうかも知れない。
どうして、なんて聞いてしまって、気を悪くしてしまっただろうか？
わざわざこんな広場のはずれまで話しに来てくれたのに。
「ごめんなさい。」
「別に謝ることじゃないさ。」
ジルはこんなに優しのに、それに対する自分の態度があまりにも酷いものに思えて、私は身を小さくした。
「村に入った時も、私、お水を運んでもらったのにお礼も言わないで・・・ほんとにごめんなさい。」

「いいさ。そういう雰囲気でもなかったし、気にしてない。あの川には、よく行くのか？」
「村の井戸は飲み水にしか使っちゃいけない事になってるから。洗濯をしたり体を洗う時は、あの川に行くの。」
「そうか。このあたりは水源が少ないようだからな。土地も痩せている。」
「土地も水も村長様がみんな管理して、村の人たちに貸してるの。そうでもしないと、みんなすぐ喧嘩になっちゃうから。」
それぞれの家が土地などを保有していた頃もあったらしいのだが、少ない資源をめぐっていさかいが絶えなかったという。
それで何代か前の村長が領主に相談して、今の制度を取り入れたのだ。
「なるほどね～。じゃあ、みんな小作人ってことだな。」
「そう、かな？でもみんながみんな土地を借りられるわけじゃなくて、外からきた人間は村の人と結婚しないと土地を持てないし、村の人間でも成人するまでは借りられないの。」
借りた本人が亡くなると、土地はすぐに村長に返される。
親をなくした子供は成人まで土地を借りられず、行きていけずに村を出て行く。
冷たいようではあるが、そうでもしないと使える土地があまりにも少ないのだ。
「私は身寄りはないけど、オリヴィアに助けてもらったから。だからね、オリヴィアが花嫁候補に選ばれたのは私もすごく嬉しい。でも、すごく心細くなって・・・。」
こんなことを話されてもきっと困るだろうと思うのについ話してしまうのは、もう二度と会うことはないだろう相手だからか、それともジルの穏やかな優しい雰囲気のせいなのか。
「それで、あんな所でこの世の終わりみたいな顔してたのか？」
その言葉に驚いて顔を上げると、ジルはいたずらっ子のような顔をして笑っていた。

木の上にいたのに、どうして私の表情まで見えたのだろうか？
ジルが続けて何かを言おうとした時、鈴の音のような透き通った声が私を呼んだ。

「フィリス、こちらにいらっしゃい。」
木の影から出ると、オリヴィアが天使のような微笑みを浮かべてこちらを見ていた。
オリヴィアに呼ばれては、行かないわけにはいかない。
おずおずと進み出ると、それでも人目を避けるように俯いたままオリヴィアに近づいた。
「あなたとも、しばらく会えないわね。あなたの事は父と母によく頼んで行くから、何も心配しなくていいのよ。」
白く細い指がスッと頬を撫でる。
一瞬触れた柔らかさに潤んできた目をぎゅっと閉じて涙を堪える。
「ありがとう、オリヴィア。私、不器用だけど・・・オリヴィアの分まで頑張るから、だから、オリヴィアも心配しないで？みんな、オリヴィアが竜王様の花嫁になるの、楽しみにしてるから。」
最後の方は声が震えてみっともなかったが、何とか花向けの言葉を送る事が出来た。
ここ数日オリヴィアには誰かしらがついていて、このまま別れの挨拶もまともにできないのかと悩んでいた。
もしかして、オリヴィアはそんな私の気持ちに気付いて、気を使ってくれたのだろうか？
今は自分のことだけでも手一杯だろうに、こんな時でさえ周りに気を配るオリヴィアを改めて尊敬した。
「ありがとう、フィリス。」
オリヴィアが、そっと私を抱き寄せる。
花のような甘い香りに包まれて、また泣きたくなる。
「オリヴィア、洋服が汚れるわよ。」
すぐそばでそんな声が聞こえてあわてて離れようとするが、オリ

ヴィアは手を放さなかった。

第2章　旅立ち

翌日の朝、私は怒鳴り声で目を覚ました。
「起きなさい！あんた、何時の間に使者の方に取り入ったんだいっ！？あの子の足を引っ張るんじゃないよ！」
何事かと目を開けるのと同時に、首元を掴まれる。
目の前には、めったに見ないほど怒っている、いや、逆上しているライラがいた。
「き、昨日はごめんなさい。オリヴィアの綺麗な姿を一目見たくて、つい・・・」
「誤魔化すんじゃない！オリヴィアの大事な将来がかかってるんだよ！それをあんたって子は！」
話が噛み合わない。何か分からないけど、誤解されている。
とにかく、手を離してもらって話し合わないと・・・。
「私が、何か失敗でもしたんでしょうか？」
昨日の仕事を思い返してみる。万が一の事があってはと、当たり障りのない仕事しかしていないはず。
オリヴィアに関係することと言えば、宴の席で会話をしたくらいだ。
けれどその件に関しては昨夜すでに注意されており、もう済んだ話のはず。
「しらを切ろうたってそうはいかないよ！あんた、使者の方に自分も帝都に連れて行ってくれって泣きついたんだろう！」
その言葉に、思わず目と口をバカみたいに開いて固まった。
一体何をどうしたらそんな話になるのか？昨日ジルと二人で話していたから？
いくらオリヴィアが出て行くのが不安だからって、そんなことを

頼むはずがない。
というか、そんな事は思い付きもしなかった。
「あ、あの、奥様、勘違いです。何かの間違いです。誓ってそんなことは考えてません！」
なんとか声を大きくして言葉にした必至の弁解は、火に油を注ぐだけだった。
「まだ言うか！」
首元を掴んだ手と反対側の手が振り上げられて、とっさに歯を食い縛って目を閉じた。

覚悟した痛みがいつまでもやってこなくて、私はぎゅっと閉じた目を恐る恐る開いた。
「女性の寝室だけど、非常識を承知で失礼するよ。フィリス、昨日に続いて君にまた謝らなければ・・・。」
振り上げられた手を掴んだのは、ジルだった。何時の間に部屋に入ってきたのか、全く分からなかった。
「放して！この娘は性根を叩き直してやらなきゃ、どうしようもないんですよ！」
「どうしようもないのはこの子ではないと思うが・・・こんな事をしている暇があるのかな？もうすぐ出立の時間だ。娘のそばにいてやらなくていいのか？」
オリヴィアの母は悔しそうに顔を歪めると、乱暴に扉を開けて足音荒く出て行った。
大きな音を立てて扉が跳ね返り、この間直したばかりの蝶番が外れた。
「・・・・何がどうしたの？」
ぼうぜんとその姿を見送った私に、ジルは苦笑を返した。
「ここまで酷い受け止め方をされるのであれば、違うやり方にした方が良かったな。今更だが・・・」

そう言ってジルはキョロキョロと部屋を見渡した。
「狭いな。」
「そう？寝るだけの部屋だから。」
私の部屋は、村長の家の納屋の2階にある。
ここに引っ越す時に持ってきた布団と、何枚かの服があるだけ。
けれど、それで困った事はなかった。
「フィリスの物は、この部屋にあるもので全部？」
「？そうだけど？」
ジルは満足そうに頷くと、私の頭にポンと手をのせた。
そんなことをされたのは祖母が亡くなって以来始めてのことで、どういう顔をしていいか分からない。
「着替えたら出ておいで。外で待ってる。」
ジルはそう言うと、返事も待たずに行ってしまった。
階段を降りる音を聞きながら、手近にあった服を引き寄せた。

納屋の外に出ると、待っていたジルに近付いた。
ジルは笑顔になると、私の前に片膝を付いた。
「ジル、服が！」
「旅装だ。気にするな。それより、さっきは悪かった。実は、俺が村長夫妻にあるお願いをしたんだ。」
私の長い前髪を耳にかけて、ジルは私の手を取った。
「若い娘が1人で知らない土地、それも生まれ育った環境とは全く違う場所に行くのは不安だろうし、自然な自分を出せないだろうから、付き人として君について来て欲しいって。」
私が、オリヴィアについて？
・・・それで、やっと分かった。だから、あんなに怒っていたのだ。
どんなに綺麗な花でも、それに虫が付いていれば人は近づこうとしないだろう。
つまり、私はオリヴィアという花にくっつこうとしている虫とい

うわけだ。
「それは、嬉しいけど・・・でも、ダメだよ。私じゃ、オリヴィアの邪魔になっちゃう。あのね、オリヴィアの幼馴染の女の子がいるから、その子に頼んだらどうかな？彼女なら明るくて気立てもいいし・・・。」
「俺は君だからこそ、来て欲しいと思ったんだ。フィリス、君が来てくれないのなら付き人は付けない。オリヴィアは寂しがるかもしれないけど。」
　真剣な表情に戸惑う。
「それは、どうして？」
　しかし、ジルはクスリと笑うと、
「それはね、俺しか知らない理由なんだ。」
　そう言って立ち上がった。
「だから、それはどういう理由なの？」
「今は秘密。城に着いたら教えるよ。」
　今は言えない理由とは、一体どのようなものなのだろう？
「というわけだから。もちろんこの話、受けてくれるだろ？」
　疑問はあるが、オリヴィアが寂しがると言われては断り辛い。
「なあフィリス、難しく考えるな。もし城の生活が辛ければ、ちゃんとすぐに送り返してやる。だから、今は一緒に来てくれないか？」
　真摯な声に、気がついたら頷いていた。
「・・・良かった。何か、ここから持って行きたいものはあるか？」
　その言葉には、フルフルと頭を振る。
　この村で、自分のものだと言えるものは布団くらいしかないが、さすがに持っていけないだろう。
　服ぐらいは必要だろうが、その服を詰め込む袋もない。
「心配ない。服や靴は途中の街でそろえられる。特に大切なものがないのであれば、このまま行こう。」
　・・・どうして考えてることが分かったのだろう？魔術師は人の心も読んでしまうのだろうか？

「あの部屋を見れば、大体の事情は分かるさ。さて、このまま行ったのではまた面倒になるかも知れないな。」
ジルは素早く指笛を吹いた。
少しの間をおいて、馬がかけてくる足音が聞こえてきた。
それに驚いてジルを見上げていると、ジルはおかしそうに笑った。
「見つかると面倒だ。行こう。お別れの挨拶をしたい人は？」
オリヴィア以外に仲のいい人は村にいないし、お世話になった村長夫妻には挨拶など逆効果だろう。
これまでの事を考えれば恩知らずもいいところだが、その分、オリヴィアに尽くせばいい。
そう思って頭を振ると、ジルは頷いて私の手を取った。

「馬に乗った事はあるか？」
「ない。」
「だよな。俺に掴まってたら大丈夫だから。」
ジルは身軽な動作で馬に飛び乗ると、馬上から器用に私の体を拾い上げた。
はじめて乗った馬は高くて、怖い。
思わずぎゅっとジルの服を握り締めると、安心させるようにお腹に回された腕に力が込められた。
「じゃ、行くよ？」
掛け声とともに、馬は軽い足取りで歩き出した。
村の中はシンとしていて、人影はない。みんな、オリヴィアを見送りに行ってるのだろう。
通り過ぎる村の風景に、不思議と何も感じることはなかった。
しばらくして馬に慣れて来ると、ようやくまともに話せるだけの余裕が出てきた。
「ねえ、オリヴィアはこの事知ってるの？」

知らないのであれば、なんだか押し掛けるようで申し訳ない。
「村長夫妻と一緒に話を聞いていた。よろしくお願いしますって言ってたから、了解したって事だろう。」
それを聞いて、ほっとした。
「城までは十日ほどかかる。今日は宿場町に泊まる予定だから、そこで色々必要なものを買おう。」
「・・・ジル、言いにくいんだけど・・・・・私、お金持ってないよ？」
街で買い物をするためにはお金がいる。それは知っている。
しかし村では物々交換がほとんどだし、お金というもの自体、実はまともに見た事もない。
「こっちの都合で来てもらったんだ。それくらい気にするな。」
「でも・・・・。」
「どうしても気になるなら、給金もらったら返してくれたらいいさ。」
「えっ、もらえるの？」
「そりゃそうだろ？別に遊んで暮らすわけじゃないからな。」
それは、確かにそうかも知れない。
私も召使いとして村長の家で働いていたけど、ちゃんと食べる物や衣服ももらっていた。

「フィリスは、村から出た事はないのか？」
それに頷くと、ジルは満面の笑みを見せた。
「じゃあ、楽しみにしてろよ。世界は広い。あの小さな村にいたら一生見れないもの、たくさん見せてやるよ。」
「例えば、何？」
「例えば今日泊まる宿場町はあの村の半分の大きさもないが、あの村の３倍は人間がいる。」
私は目を丸くしてジルを見つめた。
だとしたら、きっと街や建物は人で溢れかえっているのだろう。

狭くはないのだろうか？
「それに、竜王の住む城の敷地は村と同じくらいはあるな。」
「そんなに大きいの！？」
「ああ。何しろ、大陸の中心だからな。」
想像してみようと頑張ってみたが、全くイメージがわかなかった。
「色々なものを見て、色々な人に会うことだ。そうして外からあの村を見る事ができれば、今まで囚われていたものから解放されるだろう。」
ジルの言うことは、私には難しい。
何も答えられないでいる私に困った顔をするでもなく、ジルはただ笑みを浮かべていた。

それから、ジルは城の中の事を色々と教えてくれた。
城では召使いの服はみんな決まっていて、それは無料で支給される事。召使いの中でも役割があって、他の人の仕事は頼まれない限り勝手にやってはいけない事。
身分によって入れる場所と入れない場所があること。
召使いや衛兵以外の者、つまり身分の高い者には用がない限り話しかけないこと。
他にも色々あって、とにかく決まり事が多いらしい。
私が何か一つでも失敗すれば、オリヴィアの迷惑になる。
そう思って真剣に聞いていたが、だんだん頭が沸騰しそうになってきた。
「おいおい覚えて行けばいい。ちゃんとそういうことを教えて指導してくれる人がいるから、安心してくれ。」
そう言って、また頭を撫でられる。
「ほら、あそこが今日泊まる街だ。オリヴィア達は馬車でゆっくり来るから、まだ着いていないだろう。先に買い物を済ませよう。」
ジルが指し示した方向に、建物が建ち並んだ街が見えてきた。

第3章　はじめての街

その街には、空がうっすらとオレンジ色に染まりはじめた頃についた。
街に近づくと、ジルは馬を降りた。
馬から下ろしてもらって地面に立っても、まだ揺られているような感じがした。
「大丈夫か？」
片方の手で手綱を掴み、もう片方の手で私の手を引く。
もちろん迷子にならないようにだろうけれど、まるで幼子のようで恥ずかしい。

けれど、そんな気持ちは街の中に入った途端、どこかに消えてしまった。
どの建物も石造りの立派なもので、道には敷石が敷き詰められている。通りには人が溢れ、路上で物を売ったり客引きをしたりしていた。
お祭りでもやっているのかと思う程の賑わいに、私は思わず足を止めていた。
「驚いたか？さて、まずは・・・・・。」
ジルはあたりを見渡してから、また歩き出した。
なんだかまるで現実感がない。これは本当は夢なんじゃないだろうか？
そのうちハッと目が覚めて、いつもと同じ朝を迎えるんじゃないだろうか？
そんな事を考えていると、目的地についたのかジルの足が止まった。

カランカランと音がして上を見上げると、ジルが開けたドアに鐘が付けられていた。

中は大きな広い部屋で、片側の壁にはいくつもの鏡が貼り付けられていた。

一つ一つの鏡の前には椅子が並べられていて、そこには首にタオルを巻いた人達が座っていた。

その人達のまわりにはハサミやクシを持った人達がいて、座っている人達の髪を整えているようだった。

「いらっしゃい。」

中に入るとすぐに中年の女性がやってきた。

「この子の髪を切ってやってくれ。」

「はいよ。あらあら、これはまた・・・。さあ、こっちに座って。」

背中を押されて促され、慌ててジルを振り返る。

「俺は宿に馬を預けてくる。すぐに戻るよ。じゃあ、頼んだよ。」

「はいはい、任せて下さいな。」

頷いて背を向けるジルを見たら急に心細くなった。

「ジルっ！」

ジルは私の声に振り返ると目を見開いて、少し困った顔をした。

「大丈夫だ。急いで戻ってくるから。切り終わったら、服を買いに行こう。その格好は街の中では逆に目立つ。」

私を安心させるように乱暴に頭を撫で回して、ジルは今度こそ出て行った。

「大丈夫よ、ほら、座って！」

肩を押されて、半ば強引に座らされる。するとすぐに他の人達と同じ様に、首にタオルを巻かれた。

「ずいぶんガタガタねえ。細くて綺麗な髪だから、短くするのはもったいないわね。前髪は思い切って切ってしまいましょう。」

テキパキと髪をまとめられ、前髪を高く上げられる。鏡に自分の

顔がはっきりと写って、思わず目を背けた。
「どうかした？」
「あ、あの・・・・・前髪はこのままの方が・・・・。」
「どうして？」
「私の目、こんな色だから・・・・。」
できればこのまま隠しておきたい。少なくとも、他に緑色の目の人を見つけるまでは。
「まあ！そんなこと！そりゃあ、確かに珍しい色だけど、とても綺麗よ？全然おかしくなんかないじゃない。」
「本当？本当にそう思う？」
この色を綺麗だなんて言われたのは初めてだった。
「もちろんよ。本当に綺麗。優しくて暖かい、新緑の色ね。」
優しく言って、その女性は私の顔をそっと鏡に向けた。
「恥ずかしがる事なんかないの。自分の瞳の色が嫌だなんて、そんなのお父さんやお母さんが可哀想よ。」
そんなことは考えた事もなかった。記憶の中にある微かな母の記憶をたぐり寄せる。
顔もはっきりとは思い出せないが、思い出の中の母は私を見下ろして笑顔を浮かべていた。私と同じ、緑の目を優しく細めて・・・・。
「じゃあ、切るから動いちゃダメよ？じっとしていてね。」
ハサミをもった手が迷う事なく動き、髪を切って行く。鏡を通して見るそのなめらかな動きに見惚れていると、クスクス笑われた。
「あんた、田舎から出てきたみたいだけど、床屋は初めてかい？」
「床屋？」
聞き慣れない単語に首を傾げる。
「こんな風に髪を切ってもらう店さ。」
「私の村では、みんな家族や友達に髪を切ってもらうの。」
「そうかい。じゃあ、最後にあんたの髪を切った人はよっぽど不器用だったんだねえ。後ろの髪の長さがバラバラだよ。」
そう言われて、恥ずかしくなってうつむいてしまった。

「だ、だって、自分で後ろなんて見えないもの・・・。」
小さな声で言い訳をすると、今度は返事は返ってこなかった。一瞬動きが止まって、また動き出す。
「この街には、出稼ぎかなにかで来たのかい？」
「私の村から竜王様の花嫁候補が選ばれたの。それで、使者の人が付き人にならないかって・・・・・。」

そう口にした途端、店の中がざわめき出した。
「じゃあお嬢ちゃんは、あのダーナの村から来たのかい！？」
隣で髪を切っていたおじさんが、急に私の方を向いて話しかけて来た。
「ちょっと！急に動かないで！」
ハサミをもった女の人が、おじさんを叱りつけた。それでもおじさんはめげずに、私に話しかけて来た。
「並み居る貴族のご令嬢達を押し退けて候補になられた人だ、さぞ美しいんだろうなあ～。」
「そうそう、聞かせておくれよ！どんな人なんだい？」
急に店の中はハサミで髪を切る音だけになった。みんな、オリヴィアの話を聞きたいのだろう。
「えっと、すごく綺麗で、優しい人なの。おとぎ話に出てくる妖精みたいで・・・・・・。」
自分の声だけが響く状態におどおどしながらも、なんとか知る限りのことを話した。
「そりゃあ、期待大だな！竜王様も、きっと好きになってくれるに違いない。」
「竜王様も神々しいくらい整った容姿をしていらっしゃるらしいし、その人が隣に並んだらさぞ絵になるんだろうねえ。」
噂では、竜王様は黒い髪と瞳で、背が高くとても綺麗なお顔らしい。

「頑張れよお嬢ちゃん！しっかりその花嫁候補の娘さんをサポートしてくれよ！」
もう収まりがつかないほどに盛り上がってしまった店内に内心焦っていると、扉の鐘がなって誰かが入ってきた。

鏡ごしに見えたその姿に、自分でも驚くくらい安心した。
「楽しそうだな。」
ジルは私の後ろに立つと、鏡越しに私を覗き込んだ。
「なっ？早かっただろ？」
コクコクと頷くと、ジルはほっとしたように小さくため息をついた。
「今、花嫁候補の話を聞いていたのさ。」
「そのようだな。あんまり話を広めないでくれよ？どこに悪い奴がいるとも限らないからな。」
「あ・・・ごめんなさい、私・・・。」
注意されて、そんな事を全く考えていなかった自分を情けなく思った。こんなんじゃ、オリヴィアの母が言ったとおり足を引っ張ってしまう。
「いや、最初に言っておかなかった俺が悪い。これから気を付けてくれたらいい。」
ジルはそう言ってくれたが、沈んだ気持ちはなかなか浮上しなかった。
「オレ達も悪かったなぁ、お嬢ちゃん。根掘り葉掘り聞いたりして。元気だしてくれよ、ほら、これやるから。なっ？」
じっとしてろと怒鳴られながら、おじさんはガサガサとポケットから何かを取り出して私の手に握らせた。
開いて見ると、透明な包み紙に包まれたピンク色の固まりだった。
「・・・・・・？」
何か分からずに困っていると、ジルはそれを私の手から取って包みを開けた。

「口を開けてごらん？」
言われるままに口を開けると、そのピンク色の物体をヒョイと放り込まれる。
次の瞬間口の中に甘い味が広がって、やっとこれが食べられるものだと分かった。
「甘い！・・・でも、硬くて食べられないよ？」
「ははっ！そりゃああんた、飴は硬いもんさ！それはね、口の中に入れてると自然に溶けてなくなるんだよ。」
自然に溶ける！すごい食べ物だ・・・一体何でできているんだろう？甘くて溶けるのだから、きっと砂糖が入っているに違いない。
オリヴィアがよくお茶に入れてるやつだ。
一度内緒で舐めてみたら、村長にひどく殴られた。あれ以来口にした事はないけど、確かこれと似たような味だった気がする。

「ほら、できたよ！」
勢いよくタオルをはがされて我に返った。
「こんな感じでいいかい？」
「ああ。十分だ。」
鏡に写る自分がちゃんと女の子に見えて驚いた。
髪を切っただけで顔が変わったわけじゃないのに、まるで違うように見える。
昨日水の中に見た顔は、確かに貧相な子供でしかなかったのに。
「よし、次は服だな！」
ジルは代金を渡すと、私を椅子から立たせた。
そのまま店を出ようとするジルを止めて、私は髪を切ってくれた女性を振り返った。
「おばさん、髪を切ってくれてありがとう。それから、この目を綺麗って言ってくれた事も・・・。おじさんも、飴をくれてありがとう！すごくおいしかった。」
「あ、ああ、どう致しまして！道中気を付けて。」

おじさんは何故か頬を赤くして、動くとまた怒られるので前を向いたまま返事をくれた。
「飴くらい、今度会ったら瓶ごと買ってやるよ！元気でな、お嬢ちゃん！」
おばさんは店の外まで出て送ってくれて、私達が見えなくなるまで手を振ってくれた。

その後、ジルは私に服と靴を買ってくれた。
遠慮してなかなか選べないでいる私の代わりに見たててくれた服は、街の娘達がよく着ているようなシンプルな服だった。
上下が分かれていて、ズボンだけど足元に刺繍がしてあって可愛らしい。
「昼間はほとんど馬に乗りっぱなしになる。帝都についたらもう少しマシなやつを買ってやるから、今はこれで我慢な。」
ジルはそう言ったが、私はとんでもないと断った。
そもそも擦り切れたお古の服しか着た事のない私には、店で買った新しい服というだけですごい事だった。
下着も買おうと言われたが、さすがに一緒に店に入るのははばかられた。
けれどお金の使い方もまともに知らない私は結局一人で買うこともできず、ジルに入り口で後ろを向いて待っていてもらって、お金だけ払ってもらった。
あまりにも自分が何も知らない事にショックを受ける。
「私、本当に何にも知らなかったんだね。」
「知らないということを知ったんだ。これは大きな収穫だ。」
「・・・ジルのいう事は、時々難しいね。」
「今は分からなくても、そのうち分かるようになる。」
そのうちというのは、一体何時になるのだろう？
ジルの言葉が理解できるようになったら、ジルの考えも分かるよ

うになるだろうか？

オレンジ色の光が次第に色を失って行く。
夜は、もうすぐそこまで迫っていた。

第４章　戸惑い　（ＳＩＤＥジル）

俺に手を引かれた少女は、物珍しそうにキョロキョロとあたりを見回していた。
時折人にぶつかりそうになるのを、肩を抱いて避けさせる。
フィリスはその度に俺を見上げてお礼を言ったが、すぐにその視線は街路に立ち並ぶ露店へと向けられた。
それも無理はない。ダーナのような辺境の村で育った彼女にとっては、見るもの全てがはじめてと言っていい。
親のいる子供なら街に遊びに連れてきてくれることもあるだろうが、フィリスの親は彼女がまだ小さな頃に事故で亡くなったらしい。

それにしても、髪を整えて着る服を変えただけで、ずいぶんと見違えた。
前髪で顔の半分を隠していたせいもあるだろう。
さっきは見てはいけないようなものを見る目でチラチラとフィリスを見ていた街の住人は、露店を食い入るように見る少女にまるで愛玩動物でも見るかの様な暖かい視線を向けている。
フィリスは決して美人ではないが、その他大勢の同世代の女の子達と比べても愛らしい顔立ちをしていた。

この小さな少女と出会ったのはつい昨日の事だった。
木の上で時間を潰していた俺は、フィリスが川岸に座り込んでいるのをぼんやりと眺めていた。
それは言ってみれば山や川を眺めるのと同じもので、景色としてしか認識していなかった。
けれど、小さな桶の水面に映し出されたフィリスの顔を見た瞬間、

驚いた。
それも自分でも不可解なのだが、自分が何にそんなに驚いたのか、分からなかったのだ。
この広い大陸でも滅多に見る事のない緑色の目をしていたから？
いや、少ないだけで別にいないわけじゃない。
それとも、急に桶の中なんか覗き込んだから？
・・・そんな事でいちいち驚いていたら、うかうか外も出歩けない。

そんな事を考えている間に、フィリスはため息をついて立ち上がった。ここを立ち去るのだと思ったら、体が勝手に動いて気がついたら下に降りていた。
しかもフィリスはいきなり後ろに現れた俺に驚いて、川に落ちてしまった。
俺は、こんな華奢な幼い少女をうっかり川に落とすほど馬鹿だっただろうか？

自己嫌悪に陥りながらも手を差し出すと、フィリスは少しだけ警戒しながらも俺の手を取ってくれた。
魔術で服と体を乾かしてやると、頬を紅潮させて無邪気に笑顔を浮かべる。
その表情に嬉しくなった俺は、取り敢えず自分の妙な行動は後でゆっくり考える事にした。

フィリスは無口らしく、話しかけてもほとんど片言しか返してこない。返事が返ってくるのはまだいい方で、だいたいは小さく頷くくらいだ。
けれどフィリスが俺の方に興味を持って聞き耳を立てているのは明らかで、俺はいつもより饒舌になっていたと思う。

村の入り口に着くと、突然、近くにいた女がフィリスを見つけて叱りつけた。
確かに水汲みからなかなか帰らなかったのは事実だろう。それは間違いない。
俺は木の上からずっとフィリスを見ていたから、それは分かる。
けれど、理由も聞かず心配もせず、頭ごなしに怒鳴りつけるやり方に苛立ちを覚えた。
顔に貼り付けた笑顔でフィリスをかばうように弁護をするが、フィリスは無表情でさっと走り去ってしまった。

とっさに呼び止めたが聞こえなかったようで、俺は舌打ちした。
「すいませんねえ、あの子は親がいないから礼儀知らずなんですよ。」
こんな事は、田舎の方じゃざらにある。何もあの子だけがそういう扱いを受けているわけじゃない。
そう思うのに、こみ上げる怒りを抑えられなかった。
「そうですか。この村じゃ自分の子供以外は子供じゃないということですね。」
「えっ・・・？」
礼儀を教える親がいないのであれば、他の大人が教えればいい。
それを親がいないという一言で片付けるのは、大人としての役目を軽んじていることを自ら暴露しているようなものだ。
「仲間の所へ案内して頂けますか？」
これ以上話していたらまた余計な事を言いそうだ。そう思った俺は、早々に話しを切り上げることにした。

日が落ち始めると、村の広場で宴会が行なわれた。
おそらくこの日のために集めたのだろう大量の酒と、料理が振るまわれる。

村長夫妻も村の住人達もよほどオリヴィアが自慢のようで、俺たちはいい加減耳にタコができるくらい、彼女を誉めそやす言葉ばかりを聞かされた。

それにしても、フィリスはどこにいるのだろう？宴会にも出れず、裏方で働いているのだろうか？

チラチラとあたりを見回すが、やはり広場にはいない。

あたりの暗がりにも目を向けて・・・・やっと見つけた。

木の影からひょっこりと顔だけを出して、宴会の様子を眺めていた。

その様子がなんだか小リスのように愛らしくて、しばらく気付いていない振りをしてその姿を楽しんだ。

けれどやっぱり言葉を交わしたくなって、俺はフィリスに近付いた。

戸惑うフィリスに誤魔化すように世間話しだと納得させて、たわいのない話しをした。

辺りをはばかるような小声がどうしてか耳に心地よくて、もっと聞いていたいと思った。

そう思うのに、それはオリヴィアによって遮られてしまった。

この村に置いて行くフィリスの身を案じる姿は、使者達や村人達を感動させた。

フィリスの泣きながらの言葉もその感動を大きくした。

「・・・大した茶番だ。」

口から漏れた言葉を聞く者はいなかった。

本当にフィリスの身を案じるなら、それほど気を配る相手なら、何故あの子はあんな他の村の子が誰も着ていないようなボロを着ている？

何故、この広場に堂々と入ってこれない？
こんな大勢の前でなくとも、別れの挨拶なら明日でもできるはずだ。

この村に、彼女を残して行きたくない。ここは彼女の笑顔を奪う場所だ。
明日村を出る時に、一緒に彼女を連れて行こう。
成人するまでは孤児院で面倒を見てくれるはずだから、大きな街に着いたら信頼の出来る施設に連れて行けばいい。
こんな環境にいるより、よっぽどましだ。

けれど次の朝、俺が村長たちを前にして口から出たのは、その時考えてもいないものだった。
「フィリスを、オリヴィアさんの付き人に連れて行こうと思うのですが、いかがでしょう？貴族の娘であれば侍女を何人か連れてくるのが普通です。気心の知れた者がいなければ、慣れない帝都での暮らしは辛いでしょう。」
俺はそんな事を淀みなく言った自分に驚いた。
仲間もそんな俺を見てお互いに顔を見合せている。
「あの子はろくに仕事もできない子です。ついて行っては足でまといになるだけでしょう。」
村長は苦虫を潰したような顔でそう言った。
奥方は何故か顔を真っ赤にして、俯いている。
「あなたはいかがですか？」
本人の意思を確認しようとオリヴィアの方を見ると、こっちは無表情で「よろしくお願いします。」と頭を下げた。
内心ではどう思っているのか知らないが、昨日あんな茶番を演じた後でフィリスを連れて行くのは嫌だとは、とても言えないだろう。
本当は、街で働き口を紹介するとかなんとか適当な事を言って連

れ出すつもりだったのだ。
けれどフィリスを付き人にという案は、考えてみればなかなかいい。
自分の膝下であれば一番安全安心だし、頻繁に様子を見る事だってできるだろう。
「それじゃあ、問題ないですね。」
そう言った途端、奥方が急に鬼の形相で立ち上がって部屋を出て行った。
何が起こったのか誰も分からずに某然とする中、ふと嫌な予感がして俺は奥方の後を追った。

悪い予感は的中した。
大きく振りかぶった手を捕まえて、俺はフィリスに詫びた。
フィリスに会ってから、俺はおかしい。

自分で自分が何を考えているのか分からない。
人が聞いたら本当に馬鹿にするだろうが、本当に分からなかった。
足音荒く奥方が出て行くのを見送って、俺はフィリスの部屋を見回した。
本当に何もない部屋だった。孤児院の大部屋だって、もう少し自分の物を置いているだろうに。

オリヴィアと一緒に帝都に行くという提案に、フィリスは最初は反対した。
それでも俺は諦めるつもりはなかった。
あくまでもフィリスの意思を尊重するような言い回しで、必ずうんと頷くように言葉巧みに誘導した。

なあ、フィリス・・・。あの時、俺は俺しか知らない理由でフィリスしか付き人にはしないと伝えた。
それは確かに俺にしか分からない理由でなのだけれど・・・。
本当は俺もよく分からないんだと教えたら、さすがに怒ってしまうだろうか？

「フィリス、ここが今日の宿だ。」
宿の扉を開けると、賑やかな声が聞こえてきた。
一階の食堂では女将が忙しく立ち回り、帝都から一緒に来た仲間が俺に気づいて手を振った。
活気付いた店内に、またフィリスの目がリスのように丸くなる。
今日何度も見たその表情にこっそり笑いながら、俺はフィリスの背中をそっと押した。

第5章　崩壊の兆し

宿に入ってから、ジルは私に仲間を紹介してくれた。
彼等は突然押しかけた私に嫌な顔一つせず、笑顔で迎えてくれた。
「こちらこそ、ジルがいきなり無茶なお願いをして悪かったね。」
次々と自己紹介をされるが、緊張のせいもあってろくに耳に入ってこなかった。
「ジルが俺達に相談もせずに、いきなり村長の前で君を連れて行きたいなんて言うから正直焦ったよ。」
どう答えていいか分からずオロオロとするばかりの私の前に、旅装をした若い女性が立った。
「はじめまして。私はオリヴィア様付きの侍女、マーサよ。ここでオリヴィア様が来るのを待っていたの。」
とても品のある、綺麗な人だった。
「これからあなたとは一緒に働く事になるわ。よろしくね？」
差し出された手を握り返そうとして、その手があまりにも白くて綺麗な事に気付き、慌てて手を服にこすりつけてから握り返した。
「フィリスです。よろしくお願いします。」
「まあっ！フフッ、可愛いのね。オリヴィア様は2階の部屋で休んでいらっしゃるわ。階段を上がって右の一番奥の部屋よ。挨拶してくる？」
早くオリヴィアに会いたかった私は、コクコクと頷いてジルの方を見た。
「行っておいで。ここで待ってるから。」
「うん！」
ジルの笑顔に見送られて、私は階段を一気に駆け上がった。
教えられた部屋の扉をノックすると、確かにオリヴィアの声で返

事が聞こえた。
恐る恐るドアを開けると、オリヴィアは立ち上がってドアの方を向いていた。
「オリヴィア・・・。」
目を見開いて私を見るオリヴィアは無表情に近く、笑顔でよく来たねと言ってくれるはずだと信じていた私は、次の言葉を続けられずにただオリヴィアを見ていた。

「ねえ、どうして来たの？」
鈴の音のような声が紡いだ言葉の意味を、私はしばらく理解できなかった。
「あなたのような子には、お城で暮らすなんてとても無理なのに。」
手の先から体温が失われていく。
「どうして？ねえフィリス、何故あなた、帝都にそんなに行きたいの？」
目の前の少女は、本当にオリヴィアなのだろうか？
まるで悪い夢を見ているようだった。
「ち・・・がう・・・・・オリヴィア、私は・・・！」
胸が詰まって、声が掠れた。
オリヴィアは、ようやく微笑んだ。いつもと同じ、妖精のような儚く優しい笑みを。
「駄目よ、フィリス。そんな呼び方おかしいわ？だって、お城に行けば私の事をオリヴィアと呼び捨てにできるのは、竜王様だけなんですもの。どうしてもお城に行きたいなら、今から練習しなきゃ、ね？」
目の前が暗くなり、足元が崩れて落ちて行くようだった。
オリヴィアも母親と同じように、私が帝都に行きたいと頼み込んだと思っているのだろうか？
やっぱり、足でまといだと思っているのだろうか？

・・・・・・違う、きっとそうじゃない。心配してくれてるんだ。
不器用で礼儀作法も知らない私には、城の生活は合わないだろうって・・・・。
「ねえフィリス、マーサを呼んできて？それから、ここには私が呼ぶまで勝手にきては駄目よ？」
それは、どうして？
「私の言う事、ちゃんと聞けるわね？フィリスはとってもいい子だもの。」
綺麗で、優しくて、大好きなオリヴィア。私の恩人・・・。
私がちゃんと仕事ができるようになれば、迷惑がかからないようにすれば、いつものオリヴィアに戻ってくれる？

その後の事は、自分が自分じゃないみたいでよく覚えていない。
気がついたら食堂の席の一つに座っていて、目の前にはすっかり冷めたスープのようなものが置いてあった。
周りにはマーサやさっき紹介された使者の人達が私を取り囲むように座っていて、私の顔を心配そうに覗き込んでいた。
「フィリス、どうした？何かあったのか？」
その声をきっかけに、世界に音が返ってきた。
「フィリス？」
大きな暖かい手が、頬を包み込む。
心配そうなジルの顔が、次第に驚きの表情に変わる。
「・・・私達、席を外すわね。」
マーサの声に、ガタガタと席を立つ音が聞こえた。

「フィリス・・・・・。」
どうしてだろう？ジルの顔が歪んではっきり見えない。

まるで水中に潜った時のように、何もかもがボヤけて見える。
「分からないの・・・・・。」
ようやく出た言葉は囁くようで自分にもやっと聞こえる程度だった。
それなのに、ジルには聞こえたみたいだった。
ジルは手を放すと、机を回って私の横に立った。
「無理に言葉にしようとしなくていい。」
指先が目元を拭って、ようやく自分が泣いていたことに気が付いて慌てた。
人前で泣くなんて、何年ぶりだろう？

急に恥ずかしさがこみ上げてきて、私はまともにジルの顔を見れずに謝った。
「謝ることなんか何もない。・・・よかった。」
ため息と共に出た安堵の言葉に、私は首を傾げた。ジルはそれを誤魔化すようにように、席を移動していた彼等に手を振った。
すると彼等は一様にホッとした顔をして、マーサは椅子を蹴り倒すようにしてこっちに走ってきた。
「あなたまるで人形みたいになってしまって、どうしようかと思ったのよ？ああ、いいのよ。そのまま座ってて？暖かいスープをもらってくるから、ねっ！」
一体覚えていない間に私はどういう行動をとったのだろう？
マーサにオリヴィアが呼んでいると、なんとか伝えた所までは覚えているのだけど・・・。
「ほら、飲んで？」
目の前にさっきあったはずの冷めたスープは何時の間にかなくなっていて、マーサは同じ場所に湯気の立つ暖かいスープを置いてくれた。
もしかしてさっきのスープも、マーサが置いてくれたのだろうか？
それを一口も飲まずに黙り込んでいた私に文句を言おうともせず、

わざわざ新しいものをもらって来てくれたのだ。
そう考えると、今度は自分でもはっきり分かるほど涙が出て来た。
「あ、ありが、と・・・っ・・」
もう体は冷たくなかった。
胸が熱くなって、全然悲しくなんてなかった。
涙と一緒に飲んだスープの味は、きっと一生忘れない。

散々泣いた後、マーサは私に湯浴みを勧めてくれた。
「入って？気分が良くなるから。」
連れてこられたのは宿の奥にある個室で、箱型の陶器にたっぷりのお湯がはられていた。
「こ、こ、こんな所に！？あ、あの、近くに川があればそこで・・・」
「川！？あなた、川で体を洗うつもり！？」
つもりも何もその通りだ。生まれてからこれまでずっと川の水で体を洗ったことしかない。
冬は寒いから浸かりはしないが、とにかく不都合はない。
「駄目よ！年頃の娘がそんなんじゃ！いいから、さっさと入りなさい！」
「ちょ、待って、マーサ！」
慌てている間に、マーサは器用に私の服を脱がせた。
「ほら、どうぞ？」
こうなったら勇気を出して入るしかない。
恐る恐る手をつけて温度を確かめると、それほど熱くはないようだった。
足先からゆっくりと中に入って座ってみる。
「・・・すごい。お湯の中に入るのって、気持ちいいんだね！」

「フフッ、お風呂でこんなに大騒ぎする子も珍しいね。・・・・・ねえ、オリヴィア様と何があったの？もし話したくないならいいんだけど・・・。」
気遣わしげに言われて、私は目を伏せた。
「何もないの。ただ・・・・。」
「ただ？」
「私が勝手に色んな事を期待して、それが期待通りじゃなかっただけなの。」

私が一緒に行くことになれば、オリヴィアは心強いと思ってくれる。
オリヴィアは私の事をいつも気にかけてくれていたから、きっと喜んでくれる。
私はオリヴィアにとって、少しくらいは特別なのだと・・・・・。

なんて自分よがりだったんだろう。
オリヴィアは、ただ孤児になった私に同情してくれただけだったのに。

「・・・フィリス、もし何か私にできる事があれば、何でも言って？出来るだけのことはするから。」
「マーサは、優しいんだね。」
「そうかしら？私はそうは思わないけど。なんだか可愛い妹ができたみたいで、かまいたくなるの。」
可愛いかどうかは別にして、妹と言われて悪い気はしない。

その後いい気分になった私は湯あたりをして、タオルを巻いただけの姿でジルに部屋に連れて行ってもらうという、恐ろしく恥ずかしい事態に陥った・・・。

第6章　来訪者　（ＳＩＤＥジル）

「それで、何の用だ？わざわざこんな所まで。」
オリヴィアの元に向かうフィリスを見送った後、俺はフードを目深に被った怪しげな男に宿から連れ出された。
仲間達は心配そうにしていたが、心当たりのあった俺はすぐ戻るからと告げて男についていった。
「何の用！？何の用ですと！？逆にお聞かせ願いたい！あなたこそ何故このようなところにいらっしゃるのです？」
男はフードを荒っぽくはぎ取った。街頭の灯りにぼんやりと照らし出されたのは、髭面の中年男だった。
「何故って、見ての通りさ。竜王の花嫁候補をお迎えに来たんだよ。・・・なんだ、苛々するなよガント。まさか俺に文句を言うためだけに追いかけて来たわけじゃあるまい？」
「そのまさかですとも！！」
「お、おい、声が大きいぞ！ちょっと来い。」
近くの路地にガントを引っ張りこんで、魔術で防音の結界を張り巡らせる。
それを待っていたように、ガントは口から泡を飛ばしてまくし立てた。
「どこへ行くとも言わずに居なくなられて、我々がどれほど肝を冷やしたことか！一体どうやって使者の一団に紛れ込んだのです！」
「言ったら行かせてくれないだろう？それに、黙って居なくなった訳じゃない。手紙を置いてきただろう？仕事だってちゃんと先の分まで片付けてる。」
文句を言われる意味が全く分からない、とばかりに肩を竦めると、ガントはますます青筋を立てた。
「手紙には『少し散歩をしてくる』としか書かれておりませんでしたが？」

「その通り、こうして散歩に出てきたんじゃないか。」
「散歩というのはぶらぶらとその辺を歩くことです！少なくとも、散歩ならその日のうちに帰ってくると思うでしょうが！」
そう言われて、流石に少し反省した。それでは散歩ではなく、旅行に行くとでも書いておけばよかったか。
「とにかく、早々にお戻りを。これ以上あなたの不在を隠し通すのは限界です。」
「・・・・・悪いがすぐには無理だ。何とか後１０日ほど待てないか？」

俺が城を抜けることは定期的にある。
そしてそんな俺を探し出して連れ戻すのは、大抵ガントの役目だった。
「・・・何か、不都合でも？」
ガントは不思議そうに聞いた。
今までいくら城を飛び出しても、見つかって戻れと言われればすぐに帰っていた。
別に家出をしたい訳じゃない。ただ気分転換がしたいだけだ。

けれど、今回に限っては事情が違う。
今すぐ俺が城に戻る事になったとして、フィリスはどうする？
他の仲間に預けていくのか？
・・・・・それは不安だ。フィリスだって不安だろう。オリヴィアもいるが、彼女は助けにはならない。
マーサは有能だがあくまでもオリヴィアの侍女だ。

じゃあ、一緒に先に城に戻るのか？
それも出来ない。
本来の姿になれば城までは一晩もあれば着くだろうが、フィリスにそれを見せるわけには行かないだろう。

思案していると、ふとフィリスの事が気になった。
俺の姿が見えなくて、また泣きそうになっていないだろうか？
「・・・この話は後でゆっくりしよう。悪いが中で酒でも飲んでてくれるか？」
もう夜も遅い。フィリスは疲れているだろうから、きっとすぐに寝るだろう。
面倒な話は、それからでもかまわない。
「はっ？酒っ？」
変な顔になったガントを置いて、俺は早足で宿に戻った。
ガントが慌てたようにフードを被り直して追いかけてくる。

食堂に入ると、奥の席でマーサ達がフィリスを取り囲む様に集まっていた。
「ねえ、フィリス？何でもいいから話して？何かして欲しいことはない？」
聞こえてくる声は泣きそうで、ただならない雰囲気だった。
他の客も、無関心を装いながら聞き耳を立てている。

「どうした？」
駆け寄ってフィリスを見た瞬間・・・・心臓が潰れるんじゃないかと思うほど痛くなった。

顔は青白く、緑の目は何も写してはいなかった。
話しかけているマーサにも反応せず、心配して集まっている男達にも気が付かないようだった。
まるで、心が壊れてしまったみたいに・・・・。

冷たい汗が背を流れた。

心臓がドクリと大きな音を立てる。
「フィリス・・・」
自分の喉から出た声は、情けなく震えていた。
「フィリス・・・・・」
今度は、もっとはっきり呼んでみる。

ゆっくりと、緑の目に光が戻ってくる。
「フィリス、どうした？何かあったのか？」
意識を引き寄せるように、手を頬に伸ばす。
「フィリス？」

マーサは気を効かせて、他の仲間を促して離れた席に移った。

自分でも、どうかしてると思う。
この子は苦しんでいるのに・・・。
全てを拒絶して心を閉ざしてしまうほど、辛い事があったはずなのに・・・。
それを哀れだと思う気持は確かなのに、嬉しいと思ってしまった。
他の誰でもない、俺の声に、この子は戻ってきてくれた。

そして、ようやく涙を流す事ができたのだ。

「分からないの・・・・・。」
囁くような声に傷の深さが垣間見えて、俺はこの子をここまで傷つけた何かに、今まで感じたことのない強い怒りを感じた。
「無理に言葉にしようとしなくていい。」
何があったかは、マーサ達に聞けば少しは分かるだろう。
それに、今は辛い気持を自分の中で受け止めるのに精一杯なはずだ。

涙を拭ってやると、フィリスは恥ずかしそうに謝った。
その表情がいつものフィリスで、俺はようやく安心した。
そして、理解する。

俺は、怖かったんだ。
あのままフィリスが戻ってこなかったら、もう二度と微笑む事もなくなってしまったら・・・・・。
フィリスを失う事が、怖かった。

心配そうにこっちの様子を伺っていたマーサに手を降ると、マーサは勢いよく席を立って駆け込んできた。
男達ももう大丈夫だと分かったのか、ホッとした顔で酒を飲み直した。
マーサはスープを新しいものに取り替えると、フィリスに勧めた。
すると、今度は子供のように泣きながら礼を言ってスープを飲み干した。

「さあ！今度はこっちよ！身も心もスッキリしましょう！」
マーサはフィリスの返事も聞かず、奥の方に引っ張っていった。
湯浴みにでも行くのだろう。

「何があったか知らんが、落ち着いたようで良かった。」
「しかしあの子はすっかりジルに懐いてるじゃないか、まるで仔犬と飼い主みたいだな！」
酒を持って席に戻ってきた仲間に背中をバンバンと叩かれる。
仔犬とはまたひどい言い方だが、言われてみれば似ていなくもない。
「お前たちも何も知らないのか？」
「ああ。オリヴィアさんの所に行って、帰ってきたらあんな感じだ

った。」
だとしたら、そこで何かあったのだろう。
「年頃の娘さんだ、喧嘩くらいするだろう。まあ、そのうち仲直りするさ。」
昨日、オリヴィアとフィリスの感動の別れの挨拶を見ている彼等は、楽観的に考えているようだった。
騒ぐ仲間に苦笑を返して、ふとガントの事を思い出す。
すっかり放置してしまった。怒っているだろうか？
「悪い、知り合いを待たせてるんだ。」
「知り合い？」
「ああ、ちょっとな。じゃ、みんな飲み過ぎるなよ？」
酒が入っているせいもあるのか、誰も追求してはこなかった。

ガントはまたフードを被って奥に座っていた。
「連中は任務中だという事を忘れてるようですな。」
「そう言うなよ。ちょっと緩んでるくらいがちょうどいいのさ。まだ先は長い。」
俺はガントの前に座り、麦酒を頼んだ。
「さっきいた子、俺が村から連れてきたんだ。途中で放り出しては行けない。さっきの話なんだが・・・。」
ガントは口元を緩ませて、フッと笑った。
「では、先に戻ってその旨は伝えておきましょう。」
あまりにもあっさりと引き下がられて、拍子抜けしてしまう。
いつものこいつは、剣を抜いてでも俺を連れて帰ろうとするのに。
「ここ数年の深刻な悩みが解消されそうでしてな。今非常に気分が良いのですよ。」
「お前、ついさっきまでカンカンに怒ってたじゃないか？それに、お前の悩みなんて俺は聞いてないぞ？」
「聞いていない！？では聞いていても耳を素通りしていたのでしょう！」

また剣呑な顔にもどるガントに、何だっただろうかと思い出してみるがさっぱり分からない。
だいたい、こいつは小言を言いすぎなのだ。
「それにしても、緑の目とは珍しい。肌も白くなかなか愛らしい娘ですなあ。」
いきなり何を言い出すのか。強引な話題転換は、実直なガントらしくなかった。
「大人になればさぞかし美人になるでしょうな。家の息子の嫁に頂いてもよろしいか？」
「駄目だ。」
考える前に、即答していた。想像するだけでも嫌な気分だ。
「何故？よいではないですか。反対されるのなら、それなりの理由をお聞かせ頂かないと。」
「・・・・・・・。」
ガントの言ってる事は分る。なのに、それに対する答えが見つからない。
こんなことははじめてだった。
「ははは っ、あなたは少し頭で考えすぎなのです。そういう事は、心で感じるものです。」
「そういう事ってどういう事だ？お前が心で感じるとか言うと気味が悪いぞ。」
「・・・・・。それでは、一刻も早いお戻りをお待ちしております。」
ガントはまた不機嫌な顔に戻って、机にいくらかの銀貨を置いて出て行った。
「なんなんだ、あいつは・・・。」
連れ戻しに来たと思えばあっさり帰ってしまった。暇な身分でもないだろうに。

悩みがどうとか言っていたが、まさか息子の結婚相手でも悩んでいたのだろうか？

だから、フィリスを見てちょうどいいと思ったのか・・・。

俺はモヤモヤした気持を消そうと、ぬるくなった麦酒を一気に飲み干した。

第7章　花祭り

村を出てから一週間が過ぎた。
オリヴィアとマーサを乗せた馬車と荷馬車が一台。その周りを騎乗した使者が守るように前後左右になりながら進んだ。
宿につくと気を抜いて馬鹿騒ぎをすることもある彼等だが、日中移動している時は一瞬も気を抜かない。
比較的安全なルートを選んではいるが、どこに無法者がいるとも限らなかった。

「街の中や宿の警備は、領主の責任だからな。実質俺たちが受け持つのは、街から街の間だ。この国の治安はいいが、どこにでも例外はある。」
一週間が経って、私は馬に乗る事にだいぶ慣れて来た。
最初はマーサが一緒に馬車に乗るよう勧めてくれたのだが、ジルが、道々教えたい事がたくさんあるからと断った。
おそらく、私とオリヴィアの間がうまく行っていない事に気づいて気を使ってくれたのだろう。

ジルは、オリヴィアと私の間に何があったのか、気になっているだろうに何も聞いてこない。
それが私には有難かった。
話せばきっと悪口のようになってしまうし、話した所でどうにかなるものでもない。
あれからオリヴィアは自分から私を呼ぶ事はないが、休憩の時には馬車を出て私と普通に話してくれる。
まるで、あの時の事は悪い夢だったかのように。

「そうだフィリス、今日泊まる街で祭りをやってるはずだ。一緒に見に行かないか？」
「お祭り？」
「ああ。明日の夕方には帝都に入る。城に戻ったら、今のようにずっと一緒にはいられないからな。」

体をひねってジルの顔を見上げると、ジルは苦笑して私を見た。
ジルはずっと自分の馬に私を乗せてくれていた。馬が疲れるだろうとみんな代わってくれようとしたが、何故かジルは毎回断っていた。
私も馬が心配になってジルに聞いてみたけど、私くらいの重さではたいした負担にならないと言われた。

「ジル、お城に行ってもジルと会える？」
この何日かの間に、ジルは私にとってとても大きな存在になっていた。
そばにいないと不安になるし、笑顔を見ると嬉しくなる。
困った事があると、すぐにジルに頼ってしまう。
もしお城に行って会えなくなったら、きっとすごく心細いだろう。
「もちろんさ。俺も仕事があるから頻繁には会えないけど、出来るだけ会いにいくよ。」
その言葉に安心したわけじゃないけど、ジルを困らせたくなくて、私はただ頷いた。

街に入ると、頭に花飾りを飾った子供達が走り回っていた。
道のあちこちで花が売られ、笑い声であふれている。
「私、先に休んでいますね。」
宿に入ると、オリヴィアはすぐに部屋に入ってしまった。
「私はちょっと買い物に行ってくるね。ジル、すぐ戻るから、私が

もどるまでフィリスを連れ出さないでよ？」
マーサはジルにそう言うと、急ぎ足で外に出て行った。
私はジルと顔を合わせて首を傾げた。
「それじゃあ、交代で遊びに行くか！ああ、ジルはいいぞ。かまわないから、フィリスを見ててやれよ。」
そう言ったのは、使者団のリーダー、オルグだった。
「ありがとう、そうさせてもらうよ。」
どうやらみんなには私はまるで迷子の子供のように見えるらしく、まるで親兄弟のように細々と気を配ってくれた。
それが情けないと思いながらも、家族のいない私は嬉しくて仕方なかった。

しばらく談笑していると、マーサが急ぎ足で戻ってきた。
両手に大きな紙袋を下げている。
「ちょっと借りるね！」
「マーサっ？」
マーサは私の腕を取ると、返事も待たずに部屋へ入った。
バタンとドアを閉めると、マーサは紙袋から出したものをベッドに広げた。
「ジャジャ～ン！どう？」
「・・・・・可愛い服ね。」
それは、柔らかな素材の真っ白なワンピースに、蔦色のサンダルだった。
「さあ、着替えて！」
一瞬、言われた意味が分からなかった。
「祭りに行くのにズボンはないでしょ！今日くらい女の子らしい格好をしなきゃ。」
「えっ、私！？」
「他に誰がいるの？ほらほら早く！時間は待ってはくれないのよ？」

勢いに押されるように着替えると、今度はベッドのふちに座らされた。
髪をくしでとかれて、気持ちよさに目を細める。
「あなた、ジルのこと好きなんでしょ？」
唐突に言われた言葉に、心臓が大きな音を立てて鳴った。
「・・・う、ん。そうだね。」
「そうじゃなくて、1人の男としてってことよ？」
「えっ？えっ、えっと、それは・・・。」
みっともなく声が裏返ってしまった。

胸がドキドキして、顔が熱くなる。
考えてみたこともなかった。この気持は、そうなのだろうか？
ジルのことを、男性として好きということなのだろうか？
「ふふっ、聞くまでもないかしら？見てれば分るものね。」
私自身にさえはっきりと確信を持てない気持なのに、どうしてマーサには分るのだろう？
「ジルは魔術師だから、城に戻れば忙しくなってきっとなかなか会えなくなる。だから、今のうちにしっかり仲良くなっておきなさい！」
背中をバシンと叩かれて立たされる。
「マーサ・・・・・あの、ありがとう。」
「どう致しまして！私も後からお祭り見にいくから。」
マーサと一緒に部屋を出て、一階に降りる。

「おっ、見違えたな！」
「女の子らしくなったじゃないか。」
みんなは私を見て一瞬驚いたように固まったけど、すぐに笑顔でそう言ってくれた。
「いい趣味だな、マーサ。フィリス、その服よく似合ってる。」
さっきの話を思い出すと、なんだか恥ずかしくてジルの顔をまと

もに見れない。
「仕上げはジルがしてあげてね？フィリス、行ってらっしゃい！」
「仕上げ？」
なんの話だろう？
「もちろんだ。じゃあ、行ってくるよ。」
ジルには意味が分かってるのか、頷くと私の手を取って宿を出た。

通りに出ると相変わらずキョロキョロとする私を引っ張って、ジルは花を売っている売り子の所へ近づいた。
「これを一つ。」
「はい、ありがとうよ！」
ジルが買ったのは、黄色い花がたくさん編み込まれた花冠だった。
それをそっと私の頭にのせる。
「これでいい。行こう。」
嬉しそうにそう言うと、ジルは今度はゆっくりと歩いた。

それからジルといろんなものを見て回った。
輪投げやダーツのゲームをしたり、露店でお菓子を買って二人で分けて食べた。
こんなに楽しいと思うのは記憶にある限りはじめてで、私はいっそ今死んでも後悔しないだろうなんて馬鹿なことを考えたりした。

賑やかな音楽が聞こえてきて、私は足をとめた。
「行ってみよう。」
音を辿るようにして歩いて行くと、大きな広場で大勢の人たちが踊っていた。
老若男女が俗世を忘れたかのように踊り、その周りで見物人たちが手拍子をしていた。
「フィリス、一緒に踊らないか？」
「えっ？いいよ、見てるだけで十分楽しいし。」

「大丈夫！簡単なステップだからすぐに覚えられるよ。」
ジルは私の意見も聞かず、手を引いて広場に出た。

最初は戸惑ってまったく動けなかったけど、ジルが丁寧に教えてくれたおかげで何とか動きについていけるようになった。
踊りなんてはじめてだけど、だんだん楽しくなって夢中で体を動かした。
しばらく踊り続けて息が上がってくると、ジルは踊るのをやめて近くで飲み物を買ってくれた。

「上手かったじゃないか。フィリスは筋がいいよ。」
「ジルが教えるの上手いからだよ。」

2人で手をつないで、広場の端に腰を下ろす。
まるで恋人同士のようだと思って顔が熱くなった。
マーサは、私がジルの事を好きだと言った。それはきっと間違っていない。
そうでなければ、こんなに一緒にいて嬉しいと思うはずがない。

けれど、ジルは私をどう思っているのだろう？

嫌われてはいない。それは分る。きっと好かれているのも間違いない。
けれどそれはきっと、犬猫を可愛がる様な好きのような気がする。
ジルのような人が、私のような冴えない子供を1人の女性として見てくれるとはとても思えない。

「どうかしたか？」
顔をじっと見ていると、それに気づいたジルが不思議そうに問いかける。

「・・・・・何でもない。ジル、今日はありがとう。すごく楽しかった！私、一生忘れない。」
「大げさだな。楽しかったなら、また一緒に来よう。」
その言葉に、私はただ頷いた。

第8章　入城

帝都に入ると、私は言葉を失った。
整然と建ち並ぶ建物は高いものが多く、広い街路には人があふれかえっている。
ここに来るまでいくつも街を通ったけれど、帝都は比較にならないほど大きな街だった。
馬車の中でめったに窓を開けることのなかったオリヴィアも、窓から乗り出すようにして外を眺めていた。
「すごいだろう？ここには人も物も、大陸中から集まってくる。城の生活に落ち着いたら、一緒に色々見て回ろう。」
ジルはそう行って、私の頭を撫でてくれた。
やっぱり犬や猫と同一視されているような気がするが、それでも嬉しくて私はジルに微笑み返した。
もしジルと帝都を見て回れるなら、その時はお給金をもらった後がいい。
何でもいいから、ジルにお礼がしたかった。
「ほら、あれが城だよ。」
ジルが指差した先を見て、私は息を呑んだ。
「あれが・・・・・・。」
それ以上は言葉も出なかった。

竜王の住むその城は山裾に広がる様に建っていた。
遠くからでもその大きさがはっきりと分る。
「ちょっと遅くなるけど、ここまで来たら城に入ってしまった方がいい」
オルグの言葉に、皆は頷いて馬足を早めた。

城の前についたのは、いつもならとっくに寝ているであろう時間

だった。
疲れてはいるが、興奮でまったく眠くならない。
見上げるほど大きな門の左右には衛兵が何人か立っていて、オルグが話をするとすぐに門を開けてくれた。
城門の中にはいると、さらに道が続いていた。
「東側に花嫁候補達のために用意された離宮があるんだ。オリヴィアのための部屋も用意されている。侍女が寝泊まりする部屋はまた別にある。フィリスはマーサの隣の部屋がいいだろう？明日には用意してもらうから、今夜はマーサの部屋で一緒に休むといい。」
「マーサの部屋で？でも、迷惑じゃないかな？」
それじゃあ、マーサがゆっくり休めないのではないだろうか？
「そういう心配はするな。フィリス、もし自分にベッドがあって、マーサの分がなかったらどうする？」
「えっと、ベッドを渡して床で寝る、かな？」
「・・・・・ちょっと思っていた答えと違うな。まあいい。とにかく、自分が休めないから嫌だとか思わないだろ？」
それに頷くと、ジルは満足そうに笑った。
「じゃあ、マーサがどう思うかも分るだろう？」
「・・・・・うん。」

着いた場所は、様々な種類の花が植えられた庭園だった。
その奥に大きな建物がいくつか建っている。
馬車からマーサが先に降りて、オリヴィアの手を取った。
ジルも私を馬から降ろしてくれた。
「ここからは許可された者以外、男は入れないことになってる。」
ジルは私の背中を押して、マーサの方へ行くよう促した。
「じゃあ、頑張れよ！また様子を見に来るから。」
「うん。」
「フィリスの事は任せて、ジル。さあ、行きましょう。」
促されて、慌ててジルを振り返った。

「ジルっ！ありがとう！」
暗くてはっきりとは分からなかったが、ジルは笑顔で手を振ってくれた。

それから部屋にたどり着くまで、誰も言葉を発しなかった。
きっと、みんな疲れているのだろう。
「こちらがオリヴィア様のお部屋になります。ベッドの上に夜着を置いていますので、今日の所はそれをお使いください。オリヴィア様のお荷物は、明日お運び致しますね。」
「ありがとう、マーサ。」
「では、明日の朝起こしにまいりますので、それまでごゆっくりお休み下さい。飲み物など必要な物は部屋に用意されていますが、もし何かあればベッドの横にあるベルを鳴らして下さい。宿直の者が伺いますので。」
部屋の灯りに照らし出されたオリヴィアの顔は、流石に疲れきっているようだった。
「お休みなさい、マーサ、フィリス。」
「お休みなさいませ、オリヴィア様。」
マーサはチラリと私を見ると、私の頭を押して自分と一緒に礼をさせた。
「では、失礼いたします。」
オリヴィアが頷くのを確認して、マーサは扉を閉めた。
「私達の部屋はこっちよ。」
マーサは私の手を引いて、建物を出た。
裏手にある2回建ての建物に入ると、階段を上がっていくつもあるドアの一つを開いた。
「ここが私の部屋！適当にその辺に座って？」
そこは、ベッドと机、それにクローゼットが一つ備え付けられて

いる簡素な部屋だった。
床の上には可愛らしいピンクの絨毯がひいてあって、柔らかそうなクッションがいくつか無造作に置かれていた。
「待っててね、今お茶を入れるから。」
そう言って、マーサは奥にあった扉を開けて中に入っていった。
取り合えずその場に座って待っていると、両手にコップを持ったマーサが戻ってきた。
もしかして、あの奥に炊事場があるのだろうか？
「まあフィリス！そんな入り口に座ってないで、ちゃんとクッションの上に座りなさい！」
床に直に座ってはいけなかったのだろうか？
私は恐る恐る近くのクッションに腰掛けた。体が沈んで、すごく変な感じだ。
「はい、飲んでね。」
「ありがとう、マーサ。」
入れてもらったお茶は、ほんのりと柑橘系の香りがした。飲むと体が温まって、疲れが取れて行くようだった。
「おいしい・・・。」
「でしょ？疲れた時はこれが一番よ！フィリスは、好きなお茶とかあるの？」
聞かれて、首を傾げる。
「えっと、家ではいつもどんなお茶を飲むの？」
「お茶はなかなか手に入りにくいから、みんな普段は水を飲むの。」
村長夫妻やオリヴィアはよくお茶を飲んでいたが、私や他の村人はほとんど飲まない。
特別な日には飲んだりすることもあるが、私は村を出てはじめて飲んだ。
実はすごくいい香りがするから、どんな味なのだろうかとひそかに気になっていたのだ。
「よく分からないけど、マーサが入れてくれたこのお茶が今まで飲

んだ中で一番おいしい。」
はじめて飲んだお茶は予想を裏切って渋みがあって、実はちょっとがっかりしていたから。
マーサがくれたこれは、甘味もあっておいしかった。
「・・・気に入ってくれたのなら、またいつでも入れてあげる。」
そう言って、マーサは嬉しそうに笑った。

「さあ、落ち着いた所でちょっと特訓するわよ！ほんとは今日くらいゆっくり休ませてあげたいけど、仕事はもう明日から始まるから。いい？今から最低限の礼儀作法を教えるから、しっかり覚えるのよ？」
一瞬、オリヴィアの顔が頭をよぎった。
しっかりしなければ。オリヴィアの顔を潰さないように、迷惑をかけずに済むように。そして、少しでもオリヴィアの役に立てる様にならなくては。
そうでなければ、オリヴィアは私を認めてくれないだろうし、自分自身も納得できない。
「よし！いい目をしているわね。しっかり付いて来なさいよ！まずは、目上の人に会った時の作法から。フィリスから見るとみんな目上にあたるから、誰かとすれ違う時は必ず礼をするのよ。」
マーサは立ち上がって見本を見せてくれた。
「手に何か持ってる時は頭だけ下げればいいの。大体はこれでいいから。ただし、竜王様がお通りになる時だけは気をつけてね。何をしていても必ず道の端に寄って頭を下げなさい。通り過ぎるまで絶対に顔を上げちゃだめよ？」
「わかった。」
「それから、部屋に入る時は必ずノックをして返事があってから入ること、中に入ったら背中を見せず後ろ手にドアを閉めるの。出て行く時も同じ、部屋の主に背中を見せない様にドアをそっと閉めること！」

それから礼の仕方を練習して、奥のドアで入退室の訓練もした。
ちなみに奥にはやっぱり炊事場があって、お手洗いや洗面台などもあった。

しばらく繰り返してなんとか形になった所で、マーサは私に自分の夜着を貸してくれた。
「これだけできれば後はおいおい覚えれば大丈夫よ。さすがにもう寝なきゃ、体が持たないよ。」
「色々ありがとう、マーサ。」
「どう致しまして！私も入りたての頃は、先輩に色々教えてもらったの。・・・そうだ！」
マーサは机の引き出しから一冊のノートを出すと、私に渡した。
「これ、あげる。仕事の事、色々書いてあるから読んで勉強して？私にはもう必要ないから。」
ページをめくってみると、びっしりと書かれた文字。
それにマーサの人柄が見えて、私はますますマーサが好きになった。

「マーサ・・・・本当にありがとう。これ、なんて書いてあるの？」
私は、字が読めなかった。
「・・・・・そうきたか。とにかく、持っておきなさい。字はまた暇を見て教えてあげるから。さ、寝ましょう。」
「ごめんねマーサ。」
「謝りっこなしよ。・・・・・コラ、どこに寝るつもり？」
絨毯の上に寝転がると、すぐに引っ張り起こされた。
「一緒に寝ましょう？」
ポンポンとベットを叩かれて、赤面した。
誰かと同じ布団で寝るなんて、祖母が亡くなって以来で恥ずかしい。
「そういう反応しないの！女の子同士なんだから。ほら、さっさと

来なさい！」
「う、うん。」
私があんまりモジモジするから、マーサは大爆笑した。
どうしてマーサは恥ずかしくないんだろう？
「ふふっ、笑い過ぎちゃったわ。ほんとに可愛いんだから！お休み、フィリス。」
「お休みなさい・・・・。」

笑われてさらに恥ずかしかったけど、マーサが楽しそうなのは嬉しい。
なかなか眠れないだろうと思ったのに、近くにある体温がすごく心地よくて、私は目を閉じるとすぐに眠りに落ちていった。

第9章　青い花

この離宮では、現在7人の花嫁候補が生活していた。
最大で10人分の部屋が用意されていて、残りの部屋も近日中に埋まる予定らしい。
城に着いた翌日、オリヴィアは竜王様と謁見した。
短い時間だったけれど、部屋に戻ってきたオリヴィアはボーっとして何度もため息をついていた。
きっと、オリヴィアは竜王様の事が好きになったのだろう。
「竜王様には、次はいつお会いできるかしら？」
それから日に何度もそう言っては、白い頬を鮮やかに染めている。

オリヴィアの気持ちはよく分かった。
私も、毎日同じ様な事を考えていたから・・・。
すぐにまた会えると思っていたジルとは、城に入ったあの日以来会っていない。
慣れない仕事を覚えるのに必死で、毎日気がついたら夜になっている。
それでも疲れた体をベッドに横たえると、眠りにつく前に頭に思い浮かぶのは、決まっていつもジルの顔だった。

ジルが言っていた通り、城についた翌日にはマーサの隣の部屋が私に与えられた。
部屋に入るとベッドにはフカフカの布団が用意されていて、カーテンは淡い黄色。
柔らかな真っ白な絨毯が敷かれ、炊事場の棚には最低限の食器も入っていた。
「こんなものまで支給されるの？」
目を丸くする私に、マーサも不思議そうに首をかしげた。

「さあ・・・？布団とカーテンは、最初から備え付けられているものだけど・・・でも、業者からまとめて買ってるものとは違うみたい。前の人がみんな置いていったのかしら？」
故郷から花嫁候補たちに着いてきた侍女達は、一年経つと花嫁候補と一緒に故郷に戻る。
その時に持ってきたものや自分たちで買ったものは持ち帰るのだが、たまに面倒で置いていく人もいるらしい。
「いいんじゃない？かなり質も良さそうだし、遠慮なく使わせてもらったら？」
なんとなくその一言で話が落ち着いて、部屋にあるものは取り合えず使わせてもらうことにした。

そして城についてから半月が経ち、離宮には１０名の花嫁候補たちがそろった。
「やっぱり、会う時間が長い方が印象に残りやすくなっちゃうでしょう？だからその年の花嫁候補が全員あつまるまでは、竜王さまは離宮にはいらっしゃらないことになってるの。」
この日マーサはいつにもまして元気が良かった。
「そりゃあそうよ！私たちの仕事は、これからが本番なんだから！いい？今日のお茶会はとっても大切なのよ？今後竜王様がオリヴィア様の所に通ってくださるかどうかは、今日にかかってるんだからね！」
今日は、午後から庭園でお茶会が開かれることになっていた。
１０名の花嫁候補達と竜王様が親睦を深めるために、定期的に行われるらしい。

「マーサ、ちょっといいかしら？お茶会の服なんだけど・・・。あら、フィリス。ちょうど良かった。あなたに頼みたい事があったのよ。」
朝食の片づけをしていると、オリヴィアが顔を出した。

オリヴィアの部屋にも炊事場はついているけれど、食事は城の厨房まで取りに行けば用意されている。ただ、食器を返却するときはちゃんと洗っておかなければいけなかった。
「なんでしょうか、オリヴィア様。」
慣れない敬語と呼び方にも、ようやく慣れてきた。
城に来てからのオリヴィアとの関係は、おおむね良好だった。
相変わらずほとんどの用をマーサに頼むけれど、それはマーサの方がプロなのだから当然のことだと思う。
あの日は、きっと情緒不安定だったのだろう。
「庭園に咲いている、青いバラの花をもらってきて欲しいの。めったにない色だから、1本だけでもいいのよ。お茶会のテーブルに飾りたいの。いいかしら？」
「もちろんです。食器を片付けたら、帰りに探してきますね。」
青いバラなんてあっただろうか？これまで何度も城と離宮の間を行き来してきたけれど、覚えていない。
けれど、別に庭園の花をすべて調べて回ったわけでもない。探せばきっとどこかにあるだろう。
「オリヴィア様、青いバラなんて私は見たことがないのですが・・・それに、もうこの季節ではバラ自体咲いていないかも知れません。」
マーサが戸惑うように言葉を挟んだ。
それにオリヴィアは微笑んで、
「昨日窓の外で誰かが話していたのよ。だから、大丈夫。場所までは話してなかったから、少し探してもらわないといけないけど・・・。」
少しだけ申し訳なさそうな顔をした。
「かまいません。今日は大切な日ですから。」
「そう？ありがとう。お茶会が始まるまでに探してもらえたらいいから、急がないでいいのよ。」
「はい、オリヴィア様。」
マーサが心配そうに私を見たが、私は大丈夫だと笑ってみせた。

本当は庭師の人に聞くのが一番早いのだけれど、彼らは朝早く作業をして朝食を食べる頃には帰っていってしまう。
私は厨房に食器を戻した後、ゆっくりと歩いてバラを探した。
誰かに聞きたいけれど、今日はお茶会の準備で忙しいのか誰も外には出ていないようだった。

しばらく歩き回ってみたが、バラの花自体見当たらなかった。
オリヴィアは昨日聞いたと言っていたが、その人たちがもうみんな持っていってしまったのだろうか？
私は少し考えて、庭園の端から順番に探していくことにした。

日が高くなるにつれ、だんだん足が速くなる。早くしなければ、お茶会に間に合わなくなってしまう。
せっかく、オリヴィアが私にくれた仕事なのに・・・。

「探し物は何かな？」

突然声をかけられて、私は驚いて顔を上げた。
前の方に男の人が立っていた。
背の高い、黒髪黒目のとても整った顔立ちの人だった。
軍服によく似た真っ黒な服を着ている。
「さっきから、ずっとこの辺を歩いていただろう？」
その人は近くにくると、少しだけ腰をまげて私を覗き込んだ。間近に見ると、本当に綺麗な人だった。
どんな両親から生まれてきたら、こんなにも完成された美しい顔になるのだろうか？
「話してごらん？力になれるかも知れないよ？」
・・・この人は、本当に人間だろうか？

けれど、せっかくこう言ってくれているのだから聞くだけ聞いてみてもいいだろう。
「あの、青いバラの花をどこかで見ませんでしたか？」
そう言うと、その人は軽く眉を上げて首をかしげた。あごに手をあてて考えこむ姿がジルによく似ていて、私は胸が苦しくなった。
「もうバラの時期でもないからな。しかも青いバラとは・・・それは、君の主の希望かな？」
頷くと、その人は納得したように頷き返した。
「バラはもう咲いていないだろう。代わりに違う花では駄目か？」
その言葉に、私はうなだれた。
仕方のないことかも知れないが、オリヴィアに頼まれた仕事を満足にできないことが辛かった。
「・・・では、これではどうかな。」
その人は私の様子を見て、近くにあった花を一本手折った。名前は知らないが、白い可愛らしい花だ。
「青い花というのは、もともと少ないんだよ。この花も、種類は多いが青い色はない。」
そう言いながら、その人は手折った花の上に手をかざした。
すると、見る間に白い花が青い色に染まっていった。
あまりの事に驚いて何も言えないでいる私に、その人はクスリと笑うと青く染まったその花を差し出した。
「持って行くといい。これなら、バラでなくとも君の主ががっかりすることはないだろう。」
「・・・ありがとうございます。」
この人も、ジルと同じ魔術師なのだろうか？
「気をつけてもどりなさい。それから、ここで私と会ったことは絶対に誰にも話してはいけない。いいね？」
「・・・？分かりました。本当にありがとうございました！」
私は頭を下げると、駆け足でオリヴィアの部屋に戻った。

部屋に戻って花を見せると、オリヴィアとマーサは目を丸くした。
「こんな色の花、庭園にあったかしら？」
マーサは本気で不思議がって、オリヴィアは笑顔の中に複雑そうな表情を見せた。
「ありがとうフィリス。とっても綺麗ね。疲れたでしょう？昼食の時間まで、部屋で休んでいていいのよ。」
「・・・はい。」
別に休まなくてもぜんぜん良かったけど、そう言うとまたオリヴィアが困った顔をするような気がして、私は素直に返事をした。

第１０章　青い花（ＳＩＤＥジル）

城の最上階にある自室で、俺は朝から何度目かのため息をついた。外はいい天気で、窓から入る風は春らしい暖かな空気を運んでくる。

それなのに、俺の気分は少しも軽くならなかった。

「今年の花嫁候補たちもようやくそろったというのに、その顔はなんとかなりませんか？娘達が怖がります。」

そう言ったのは、エストアの宰相、コンラートだ。

金髪碧眼で王子様のような甘い顔立をしている。ただし、甘いのは顔だけということは、彼と話せばすぐに分かる。

初対面で彼に惹かれた女性は、３０分に満たない会話でみんな逃げ出してしまう。

「怒ってるわけじゃあるまいし、何を怖がる必要がある？」

そう言うと、今度はコンラートがため息をついた。

「相変わらず自覚のない方ですね。あなたのそのお顔だと、無表情なだけで十分怖いんですよ。年頃の娘というものは特に傷つきやすいのですから、配慮していただかなくては困ります。」

「酷い言い様だな。心配しなくても、人前では気をつけてるだろう？」

自分の顔が、人から見てとても綺麗なものなのだということは分かっている。

ほんの少し微笑んだだけで大抵の女性は頬を染めて俯いてしまうし、少し目を細めてやるだけで大の大人でも怯んでしまう。

「それは存じ上げておりますが、最近隠しきれていないようですので・・・。」

その言葉に俺はふてくされて窓の外を見た。

大体、誰のせいだと思っているのか。
城に戻った途端日ごろの恨みでも晴らすかのように仕事を押し付けてきて、フィリスと会う時間どころか言葉通りに寝る間もない。

あれから、もう半月近く経つ。
仕事にはもう慣れただろうか？マーサがついているから心配はないと思うが、オリヴィアにまた何か言われたりしていないだろうか？
様子を見に行くと約束したのに全く連絡もしてこない俺のことを、どう思っているのだろう？
そんな事を考えては仕事の手を早めるが、嫌味のように増えていく仕事は無くなる事を知らなかった。

「今日は、花嫁たちとはじめての親睦会ですよ？嘘でももう少しうれしそうな顔はできませんか？」
「もうそんな時期か、そういえば、この前会った娘が最後だと言っていたな・・・。」
すっかり忘れていた。ここ数年ですっかり恒例となった行事だが、今まで会った花嫁候補はすでに数十人にのぼる。
正直、もう新鮮さもなにもない。
「どうですか？今年の娘たちは。少しでも気になる者はいませんか？」
「そうだな・・・・・」
正直、はっきりと顔を覚えている娘など一人もいない。
しばらく一緒に旅をしたオリヴィアでさえ、うろ覚えでしかなかった。
気になる娘といえば、今はフィリスしかいない。
あの子の顔だけは、はっきりと思い出せる。

花祭りの時のフィリスは、本当に妖精のようだった。
フィリスはオリヴィアの事をよく妖精のようだと例えるが、俺に

とってはフィリスの方がよほど妖精のように見える。
純粋で、フワフワしていて、気がつくとどこかに消えていってしまいそうだ。
「・・・コンラート、お前、顔が変になってる。」
コンラートの方を見ると、こいつにしては珍しい顔をしていた。
鳩が豆鉄砲をくらったような・・・というのだろうか？
「も、もしかして誰かお気に召す者がいましたか？」
「花嫁の話か？いや、残念だがいないな。そもそも一度会っただけで気に入るもなにもあるまい。そう急くな。別に花嫁がいなくともすぐに王がいなくなるわけじゃない。仮に盟約が終わっても、お前たちには準備をする時間が十分に与えられる。」
そう言うと、コンラートは目に見えて落ち込んだ顔をした。

竜族の総意としては、別に盟約を継続させる必要はないと考えている。
大陸は統一され、人間によって分割されきちんと統治されている。
戦争は終わり平和が続き、竜の王によってもたらされた知識と知恵は十分に広まったと考えていいだろう。
まして花嫁が与えられなくとも、俺は竜王に代わる人間の王が王座につくまで、役目を放棄するつもりはない。
何も無理に人間の娘を差し出す必要などないのだ。
「あなた以上にこの大陸をまとめられる者などいないでしょう。あなただからこそ、大陸の国々は恭順を示すのです。」
「それを心配していては、いつまでたっても人間は竜族に頼りっぱなしだ。お前たちは、人間の国を人間だけで動かしたいとは思わないのか？」
「・・・それほどのカリスマを持つ者がいないのです、陛下。宗主国の王座をめぐり、人間はまた争いを始めるでしょう。人間とは、そういう強欲なものなのです。」
苦虫を噛み潰したようなコンラートに、俺は肩をすくめた。

この議論はきっと大陸のあちこちで何度も行われてきたことだろう。
色んな意見があるだろうが、多くの人間の意見がコンラートと同じなのも知っている。

微妙な空気になった時、部屋の扉をノックする音がした。
「陛下、いらっしゃいますか？」
「ああ。入れ。」
入ってきたのは、ガントだった。
「失礼致します、陛下・・・。」
ガントは、コンラートを見ると微妙な顔をした。
「どうしたガント、何かあったか？」
「は、はあ・・・・。宰相殿もおいででしたか。」
「私がいると、何か不都合でも？」
「い、いやあ、そんな事はありませんが。・・・陛下、東の庭園で見慣れぬ侍女が困っておる様子でしたぞ。」
ガントは最初迷っていたようだが、すぐに気を取り直してそう告げた。
コンラートは何の話だと言いたげに眉を潜めたが、俺は次の瞬間、座っていた椅子をけり倒すようにして立ち上がった。
「少し外す。茶会の前には必ず戻るから、悪いがあとを頼む。」
扉に向かって歩く数歩の間に、竜王の姿から人間の姿へと姿を変える。
クローゼットから軍服を取り出して着替えようとすると、ガントに止められた。
「いけません！東の庭園に入れるのは王だけです！他の男は王と共にでなければ入る事を許可されません！」
「この姿でないと、フィリスは俺が分からないだろう？」
何を言ってるんだ、という目で見ると、ガントも同じような目で俺を見た。

「ルールはルールです！王のお姿であっても、できることはありましょう。」
そう言われて、俺はしぶしぶ元の姿に戻った。
そもそも、俺は生まれつき3つの姿を持っている。
竜の姿、竜なら誰でも持っている竜人の姿。そして、人である母から受け継いだ、人の姿。
フィリスが知っているのは、人の姿だ。
どれもが真の姿であり、どれが本当の姿というのもない。
だが俺が人の姿を持っていることだけは、ごくわずかな人間にしか知らせていない。
息抜きをしたいときに、この姿はとても便利だったからだ。

「・・・とにかく行って来る。」
余計な事を考えてる暇はない。
俺は人通りの少ない道を選んで東の庭園に急いだ。

庭園につくと、フィリスはすぐに見つかった。
はじめてみる制服姿に顔がほころぶ。
紺色のワンピースに白いエプロンをつけ、三角巾で髪をまとめている。
フィリスは浮かない顔であたりを見回しては、困った顔でうなだれた。
俺はフィリスにそっと近づくと、思い切って声をかけた。
「探し物は何かな？」
フィリスは俺を見ると、驚いた顔で固まった。
ここまでは大抵の女と反応は変わらない。
「さっきから、ずっとこの辺を歩いていただろう？」
けれど、頬を染めない所は他の女とは違っていた。

人間の女受けがいいこの顔は、どうやらフィリスには効果がないらしい。
「話してごらん？力になれるかも知れないよ？」
警戒を解くようにやさしく言うと、フィリスは思い切ったように話した。
「あの、青いバラの花をどこかで見ませんでしたか？」
青いバラ？そんな品種は見た事も聞いた事もないが・・・。
「もうバラの時期でもないからな。しかも青いバラとは・・・それは、君の主の希望かな？」
もしかして、と思って聞くと、フィリスはそれに頷いた。
やはりそうか。おそらく、オリヴィアは何らかの理由でフィリスを自分の側から離したかったのだろう。もしくは明らかにフィリスの失態を望んでいるようにも思える。
彼女がフィリスをこうまでぞんざいに扱うのは、いったい何故だろうか？
オリヴィアがフィリスをどう思っているかはともかく、フィリスがオリヴィアを慕っているのは間違いない。
そしてその気持ちを踏みにじる事は、俺にはできなかった。
「バラはもう咲いていないだろう。代わり違う花では駄目か？」
そう言うと、フィリスは暗い表情になった。その事に焦って、適当にその辺の花を手折った。
「・・・では、これではどうかな。」
かろうじて平静を装ったが、フィリスが悲しそうにすると心臓が手で捕まれたように痛くなるのだ。
「青い花というのは、もともと少ないんだよ。この花も、種類は多いが青い色はない。」
手をかざして花びらの色を青色に変えると、フィリスは目を丸くしておどろいた。
まるで、初めて会ったあの日のように・・・。
「持って行くといい。これなら、バラでなくとも君の主ががっかり

することはないだろう。」
「・・・ありがとうございます。」
ようやく見れた笑顔にほっとする。
「気をつけてもどりなさい。それから、ここで私と会ったことは絶対に誰にも話してはいけない。いいね？」
余計な混乱を招くことは、本意ではないから。
「・・・？分かりました。本当にありがとうございました！」
駆けていくフィリスを見送って、俺はふと考えた。
俺が竜王だと分かったら、あの子はどう思うのだろうか？

午後に行われた茶会のテーブルには、青い花が一輪、飾られていた。
オリヴィアの後ろにはマーサが控えている。
フィリスの姿は見当たらなかった・・・・・。

第11章　再会

その日いつものように厨房に食器を返しに行くと、後ろからポンと肩を叩かれた。
驚いて振り返ると、ひと月ぶりに会うジルがすぐ後ろに立っていた。
「ここで待ってれば会えると思った。フィリス、元気にしてたか？」
「ジルっ！」
取り落としそうになった食器を、マーサが慌てて私の手から奪い取る。
それに申し訳ないと思いながらも、目はジルから放せなかった。
「なかなか会いに来れなくて悪かった。仕事が忙しくて。」
まさかこんな所で会えるとは思ってもいなかった私は、夢でないことを確かめようと頬を抓った。
・・・・・痛い。夢じゃない。
「何やってるんだ？」
「夢じゃないかと思って。だって、ずっと会いたいと思っていたのに会えなかったから・・・・。」
そう言うと、ジルの顔が赤くなった。
「ジル、大丈夫？」
「あ、ああ・・・。何でもない。」
気まずそうなジルに、マーサが肩をすくめる。
「フィリスはほんと直球よね。純粋というか素直すぎるというか・・・。こんな所で青春しないでよね。それよりジル、あなた会いに来るの遅すぎるわよ！城に来てからいったいどれだけ経ったと思ってるの？」
マーサの勢いに押されるように、ジルは後ろに一歩下がった。

「とにかく、積もる話もあるでしょうし二人で散歩でも行ってらっしゃい。オリヴィア様には私からうまく話しておくから。」
「でも・・・・。」
「いいのよたまには。息抜きしてらっしゃい。ジル、あなたと連絡が取れないと何かと困るのよね。オルグに聞いてもあなたのいる場所は誰も知らないっていうし・・・。魔術師の仕事内容を詮索する気はないけど、連絡経路を作ってもらえないかしら？」
真剣な顔になったマーサに、ジルは神妙に頷いた。
「わかった。何か考えるよ。じゃあ、フィリスを借りていく。遅くならないように返すよ。」
そう言って、ジルは私の腕をとった。
「ゆっくりどうぞ～。」
マーサはヒラヒラと手を振った。私もマーサに手を振り返して、ジルと一緒に厨房を出た。

ジルは私が通った事のない廊下をいくつか曲がると、人気のない中庭に私を誘った。
建物の壁際に座ると、私にも隣に座るよう勧める。
「その服、なかなか似合ってる。仕事にはもう慣れたか？」
久しぶりに聞く優しい声に、胸がドキドキする。私は何とか平静を装って答えた。
「うん。マーサが丁寧に教えてくれるから・・・。」
「そうか。何か困ってることはないか？」
「何もないよ。」
ここでは、珍しい緑の目も揶揄されることがない。仕事に失敗してもご飯を抜かれることもないし、理不尽に怒鳴りつけられたり、邪険に扱われることもない。
誰かに会うたびに何か言われるのではないかとビクビクする必要もない。

オリヴィアとも、距離さえ間違わなければうまくやっていく自信があるし、頼りにされなくてもオリヴィアのためにできる事はたくさんある。
これ以上望むことなど、何もなかった。
「ジル、ありがとう。」
そんな事を考えていたら、自然と言葉がこぼれた。
「うん？」
「私を村から連れてきてくれて・・・。世界は、こんなに温かかったんだね。」
ジルが見せてくれた村の外の世界は、とても明るい。
それに比べてダーナの村は、何故あんなにも暗く冷たく感じるのだろうか。
「・・・・・フィリス。」
名を呼ばれて顔を上げると、ジルが眩しそうな目で私を見ていた。
それっきり何も言わずに私を見つめるジルに居心地が悪くなって、私はつい俯いてしまった。

二人の間に沈黙が流れたが、それは不快なものではなかった。
ただ黙って座っているだけで、温かい何かが二人の間で通じ合っているような気がした。
「そうだ、そろそろフィリスも休暇がもらえるはずだ。そうしたら一緒に帝都を見に行かないか？」
沈黙を破ったのはジルの方だった。
「休暇？」
「ああ。一ヶ月につき4日もらえることになってる。仕事の都合にあわせて、休みはいつ使ってもいいんだ。」
そんなルールがあったとは知らなかった。
「病気じゃないのに、休んでもいいの？」
「病気？・・・ああ、フィリスの村には、そもそも休暇っていう考え方がないんだな。」

それからジルは、休暇の制度について簡単に教えてくれた。
「でも、マーサは一日も休んでないみたいだけど・・・。」
マーサはもうずっと長いあいだお城で働いているようだけど、なぜ休まないのだろう？
「花嫁候補に付く侍女は、主が城の生活に慣れるまで休みを取らないんだ。それも大体ひと月くらいが通例だから、マーサも適当に休みを取るんじゃないかな。」

ひとしきり話して、ジルはため息をついてから立ち上がった。
「そろそろ送ろう。あんまり長い間拘束すると、次から会わせてもらえなくなる。」
そう苦笑して、私の手を引っ張って立たせてくれた。

「ジル、また会える？」
東の庭園の入り口でそう聞くと、ジルはいつものように私の頭をポンポンと叩いた。
「もちろんだ。約束しただろ？今度はそう遠くないうちに会おう。さあ、行っておいで。」
私は頷いて、ジルに手を振った。

オリヴィアの部屋に戻ると、マーサの姿がなかった。
「マーサなら、あなたの代わりに外を掃いているわ。」
オリヴィアは飲んでいたお茶を置いて、椅子から立ち上がった。
「ねえ、急な仕事を頼まれたってマーサは言ってたけど、本当は何処で何をしていたのかしら？」
顔は微笑んでいるのに、口調には明らかに攻撃の色が見えた。
私は答えることができずに口ごもってしまう。

「自分の仕事を放棄して、遊んでいたの？・・・・・フィリス、やっぱりあなたは駄目ね。厳しくしないと、すぐにさぼろうとして。」
それ以上聞いていられなくて、とっさに私は口を開いた。
「ごめんなさいっ！あの、ジルに会って、それで少し話を・・・。」
「それで、マーサに自分の仕事をやらせて平気で遊んでいたの？悪い子ね。フィリス、反省しなくては駄目よ？」
オリヴィアの言うことは、決して間違いではなくて。
罪悪感が胸に突き刺さった。
「マーサの優しさに付け込むのはいい加減やめなさい。足を引っ張っているのが何故分からないの？」
言い返すこともできず、私は唇を噛むことしかできなかった。
「しばらく顔を見せなくていいわ。私が許可するまで、部屋に入ってきては駄目よ。」
「・・・・はい。オリヴィア様。」
なんとか返事をして、退室する。
泣きたくなるのをなんとか我慢して、外に出た。

「あら、フィリス。早かったのね！ジルとはゆっくり話せ・・・・フィリス、どうしたの？ジルに何か言われた！？」
マーサは持っていたほうきを放り出すと、私に駆け寄った。
「違うの。ごめんなさい、マーサ。私、自分のことばっかりで、マーサに甘えてた。」
「フィリス？何を言ってるの？これくらいのこと、仲間内じゃしょっちゅうあることよ？甘えるうちに入らないじゃない。」
私はそれに頭を振って、落ちたほうきを取り上げた。
「今日のことだけじゃない。私、マーサを頼りすぎてた。私ね、オリヴィア様に叱られちゃったの。しばらく部屋にも入れないから、外回りの仕事頑張るね。」
村を出て、みんなに優しくしてもらって、少しいい気になりすぎ

ていたのかも知れない。
私が仕事を覚えようと必死になればなるほど、それを教えるマーサの時間を拘束することになる。
オリヴィアに言われて、初めてそう考えられた。
それなのにジルに会って浮かれて、マーサの仕事を増やしてしまった。
マーサの言うとおり、こういったことは仲間内ではあることなのかも知れない。
でも今の私はマーサに助けてもらうことはあっても、マーサを助けることができない・・・。
「フィリス、オリヴィア様があなたに何を言ったのかは分からないけどね、私はあなたに頼られて嬉しいし、頼られて迷惑だなんて一度だって思ったことないのよ？だってそうでしょう？確かにフィリスは仕事のことも世の中のことも、何にも知らないわ。けど、私に追いつこうといつだって一生懸命なの、私ちゃんと分かってる！」
そう言われて、また涙腺が緩んでくる。
必死に涙を堪える私を、マーサはギュッと抱きしめてくれた。
「あなたはちょっと頑張りすぎ！むしろもっと周りの大人に甘えなさい。オリヴィア様には、私からとりなしてみるから。ね？」
声を出すと嗚咽になりそうで、私は何度も頷いた。

第１２章　休日

オリヴィアに入室を禁止されて途方にくれていた私も、何日かすると次第に現状にも慣れてきた。
あの後マーサはオリヴィアに話しに行ってくれたけれど、しばらくして部屋から出てきたマーサは私に申し訳なさそうに謝った。
「ごめんね、フィリス。説得したんだけど、どうしても分かってもらえなくて・・・。」
しかめた顔に怒りの色が見えて、私は慌てて頭をふった。
「ありがとう、マーサ。なんとか信用を取り戻せるように頑張ってみるから。しばらく中の仕事は手伝えないけど、外回りの仕事は任せてね！」
そもそも最初から私に信用なんてあっただろうか？
ちらりとそんなことが頭をよぎったが、深く考えると余計落ち込みそうなのでやめた。

部屋に入らずにできる仕事といえば、洗濯か外の掃除くらいしかない。
たいして汚れてもいない庭を掃き清める事が、私の一日の大半を占めた。
たまに雑草を抜いたりして時間をつぶすけれど、毎日やっていればそれも次第になくなる。
頑張ると言ったものの、次第に外でボーっと空を眺めている事が多くなった。

外にいる時間が長くなったせいか、あの日から頻繁にある人と会うようになった。

あの青い花をくれた人だ。

最初はびっくりしたが、彼はいつも私を見つけるとシッと指を口元に持っていく。

そして私のそばに来ると、いつも懐からゴソゴソと何かを取り出して私にくれる。

それはいつも小さな包みに入っていて、クッキーだったり、焼き菓子だったりする。

「あの、どうして私にこんなものをくれるんですか？」

はじめこそもののついでのように渡されてつい受け取ってしまったが、こう頻繁ではどうしていいのか困ってしまう。

まさかわざわざ私に渡すために持ち歩いているとも思えないそれは、本来は何の目的で常に携帯されているのだろう？

「・・・餌付け、かな。」

首を傾げた彼に私も同じように首を傾げるしかなく、困ってしまうとそれを助けてくれるのは大抵彼と一緒にいる男の人だ。

その人は軍服を着ていて、彼の倍くらいは年上に見える。けれど、話し方からするとその人は彼の部下のようだった。

「すまんな。悪気はないんだ、もらってやってくれないか？」

「でも、いつももらってばかりで・・・・・。」

お返しに何かと思うけど、私は何も持っていない。

朝食のパンなら食べずに残しておけるけど、それはこの身なりのいい綺麗な人にはきっと失礼だろう。

考え込んでいると、彼は私が一度受け取った包みを手にとって封を開けた。

中のクッキーをひとつだけつまんで、私の口元にもってくる。

そんなにまでして食べて欲しいのかと驚いたが、後ろに控えている男の人もびっくりした顔をしていた。

何度もクッキーと彼の顔を交互に見るが、彼は微笑むばかりで一向に引く気配がない。
仕方がないので、私は一歩引いて控えめにクッキーを受け取り、口の中に入れた。

甘い味が口の中に広がって、思わず頬がゆるむ。
それを見ていた彼は満足そうに笑みを深めて、封をしなおした包みをまた私の手に握らせた。
そして、ポンポンと頭を2回叩いて離宮のほうへと歩いていった。
後に続く男性も自然な笑みを私に向けると、軽く手を上げて挨拶して彼に続いた。

それにしても、この離宮は王が許可した男性しか入れないと聞いたのに・・・。
こんなに頻繁に入ってくるなんて、彼は何者なのだろう??

「フィリス、あなた明日休みだから。」
夜、自室で文字の勉強をしていると、マーサがノックもせずに入ってきていきなりそう言った。
「休み?」
「そう!ほらこれ、侍従長から私の分と一緒に預かってきたから。」
そう言って手渡されたのは、重みのある茶封筒だった。
中を見ると、何枚かの銀貨が入っていた。
「あなたのお給料よ。これでパーッと遊んでらっしゃい!あ、私も明後日休む予定だから、よけいな心配しないでいいんだからね!」
「・・・ありがとう、マーサ。」
初めてもらうお給料に、私は一気に気分が高揚した。
「今日はもう勉強せずに、さっさと寝ること!いいわね?」

頷くと、マーサはいきなり私に抱きついた。
「も～っ、可愛いわね！ほんと小動物みたい！」
「く、くるしいよマーサ。」
「あっ、ごめんね！じゃあフィリス、お休みなさい。」
マーサはそう言うと、入ってきた時と同じように慌しく出て行った。

次の日の朝、私は扉が開く音に起こされた。
「フィリス、朝よ！ほら起きて！」
布団を剥がされ、ぼんやりした頭で無理やり体を起こす。
いつもより起きる時間が早い気がするが、マーサはもう侍女の服を着ていた。
「今日はこれ着ていきなさい。あなた、他にまだちゃんとした服持っていないでしょう？」
そう言ってマーサがクローゼットから取り出したのは、以前マーサが買ってくれた白いワンピースだった。
勢いに押されて着替えると、今度は手を引っ張られて連れて行かれた。
「忘れ物はない？お金もちゃんと持った？」
「う、うん。大丈夫。」
「よし！案内役を頼んどいたから。」
「案内役？」
庭園を抜けた所で待っていたのは、軍服ではなく私服を着たジルだった。
「おはよう、フィリス。」
「・・・お、おはようジル。」
挨拶をしてマーサを見ると、マーサはニヤニヤとした顔で笑っていた。

「じゃあジル、あと頼んだわよ。」
ジルが頷くと、マーサは私に手を振って戻っていった。
「マーサと相談して、俺とフィリスの休みを合わせてもらったんだ。」
ジルは自然に私の手を取ると、ゆっくりと歩いた。
「フィリスに見せたいものが、たくさんあるんだ。今日一日じゃ足りないくらい。」
その言葉が嬉しくて、私は少しだけ繋がれた手に力を込めた。
「ねえジル、私にお金の使い方、教えてくれる？」
「ああ、もちろんだ。」

朝早かったせいもあるのか、城の門を出るまで特に誰にも会わなかった。
以前通ったときは夜も遅くてよく分からなかったが、帝都は今まで見たどの街よりもすごかった。
道は綺麗に舗装され、街路樹も植えてある。
建物がひしめき合う様に立ち並び、建物と建物の間は本当に僅かな隙間しかなかった。
「まずは腹ごしらえをしよう。」
そう言ってジルが最初に連れて行ってくれたのは、可愛らしい感じのする食堂だった。
中に入ると、ジルがメニューを見て注文してくれた。
「マーサに字を習ってるって聞いたけど、どれくらい読めるようになった？」
待っている間、ジルはそう言って私にメニューを見せた。
指で指された部分をたどたどしく読み上げると、ジルは満足そうに頷いた。

「短い時間で覚えたにしては、上出来だ。書くのはともかく、まずは読むことが大切だ。」
神妙に頷くと、ジルは料理が運ばれてくるまで飽きずに私に字を読ませた。

しばらくすると、甘い香りのするパンとお茶が運ばれてきた。
白いクリームがパンの上に乗っていて、とてもおいしそうな香りだった。
「食べてごらん、おいしいよ？」
そう言ってニコニコするジルが黒髪黒目の彼と重なって、私はかなり微妙な顔で頷いた。
「どうした？」
「うん・・・最近ね、私によくお菓子をくれる人がいて・・・・・。」
今の顔がその人にそっくりだったと言うと、ジルはびっくりしたように目を見開いた。
「黒い髪と黒い目をしていて、ジルと同じくらい背が高いの。その人も魔術師みたいなんだけど・・・そんな人の事知ってる？」
もしかして、同じ魔術師だったら知り合いなのかも知れない。
「うん？ああ、まあ・・・知っているといえば知っているかな。」
珍しく歯切れの悪いジルに首をかしげるが、ジルは苦笑してそれ以上は何も教えてくれなかった。
「ほら、温かいうちに食べた方がいい。」
「うん。いただきます。」
ジルが話さないという事は、私は知らない方がいい事なのだろう。
そう考えて、私はパンを口に運んだ。
「おいしい！」
そのパンは溶けるようにやわらかくて、甘くておいしかった。
「ジルは食べないの？」

ジルの方にはお茶が置かれているだけだった。
「俺は軽く食べてきたから。」
私はパンを小さくきると、フォークに乗せてジルの方に向けた。
「じゃあ、少しだけ。」
こんなに美味しいのだから、ジルにもやっぱり食べてもらいたかった。
固まるジルに、食べかけは嫌だっただろうかと不安になる。
「ありがとう、もらうよ。」
けれどジルはすぐに元の柔らかな笑顔に戻ると、少しだけ身を乗り出してパンを口に入れてくれた。

それから日が暮れるまで、ジルと二人で街を歩き回った。
ジルに値札の読み方やお金の数え方を教わって、一人で買い物をすることも出来た。
日ごろのお礼を込めて、マーサには小さな花の絵が描かれたカップを買った。
今度会えたら渡せるように、黒髪の彼用にいろんな種類の飴が入った小さな小瓶を買った。
あんなにお菓子ばかりくれるのだから、きっと彼もお菓子が好きなのだろう。
オリヴィアには・・・散々悩んで、いい香りのする便箋を買うことにした。実家に出す手紙の紙は城から支給されるが、真っ白なただの紙しかない。
残るものでもないし、最低嫌がられはしないだろう。

「結局自分のものは何も買ってないみたいだけど、いいのか？」
日も暮れ始めた頃、ジルと私は城に向かって戻り始めた。
「うん。自分のものって言っても、特に思いつかないし・・・。ジル、今日は付き合ってくれてありがとう。」

「どういたしまして！俺も、今日は楽しかったよ。」
後半は独り言のようにも聞こえたが、それだけに本当にそう思ってくれてるような気がして嬉しかった。

庭園の入り口まで来ると、ジルは私の手を離した。
それに急に寂しくなったけど、なんとか顔には出さずにすんだ。
「ジル、これ・・・もらってくれる？」
紙袋から小さな袋を取り出すと、ジルは驚いたようだった。
「・・・開けてもいいか？」
頷くと、ジルは丁寧に袋を開けた。
ジルのために選んだのは、シンプルな万年筆だった。色々悩んだけれど、これならあっても困らないだろう。
この程度のものでこれまでのお礼になるとは思えなかったけれど、少しでも気持ちが伝われればいいと思った。
「ありがとう、フィリス。大切に使うよ。」

ふいにジルが私の肩に手をのせた。
ゆっくりと顔が近づいてきたと思ったら、頬に何かやわらかいものが当たった。

「お休み、フィリス。」

それからどうやって自分の部屋に帰ってきたのか、全く覚えてなかった。
気が付いたら自分の部屋にいて、床に座り込んでいた。
自分の頬に触れたものを想像して、顔に熱が集まるのが分かった。
・・・・・ジルは、どうしてあんな事をしたのだろう？

頭を冷やそうと顔を洗ってみたが、さっきの光景が何度も頭の中に繰り返されてしまう。

今日は、なかなか眠れそうになかった。

第13章　自覚（SIDEジル）

『・・・世界は、こんなに温かかったんだね。』

そう言って微笑んだフィリスを見て、俺はやっと自分の気持ちに気が付いた。

答えはいつもそこにあったのに、何故分からなかったのだろう？

フィリスと出会ってから、いつもモヤモヤしたものが心に引っかかっているようだった。

何故、こんなにも一人の少女のことが気にかかるのか。

不遇な子供など、世の中には無数に存在するのに。

何故、城に一緒に連れ帰ったのか。

孤児院であれば、教育だって最低限のものは受けられるし、将来仕事の紹介もしてくれるのに。

俺はきっとあの時、あの瞬間に恋に落ちたんだ。

水鏡に見えた、貧相な緑の目をした子供に・・・・・。

その顔に浮かぶ笑顔が見たかった。

怯えて小さな声しか出せないフィリスに、もっと自由な世界をあげたいと思った。

そしてその世界に、俺の居場所を作って欲しかった。

そうでなければ、俺の世界は酷く霞んでしまうだろう。

俺はフィリスへの気持ちに気が付かないまま、本能で動いていた

んだ。
「陛下、難しい顔をされていますが何か問題でも？」
コンラートの言葉に、自分の考えに沈み込んでいた俺は我に返った。
手につかまれた書類が、力を入れすぎてシワシワになっている。
「悪い。他の事を考えてた。この案件は進めて大丈夫だ。」
印を押してコンラートに渡す。
コンラートは、何か言いたげな顔で俺を見ていた。
「どうした？」
「いえ・・・何かお悩みのようですが、我々ではお手伝いできない事でしょうか？」
真剣なコンラートに、そんなに難しい顔をしていたのだろうかと反省する。
けれど、せっかくそう言ってくれてるのだから少しくらいは相談にのってもらってもいいだろう。
「離宮の侍女と連絡を取り合いたいんだ。どこかに窓口になってもらいたいんだが・・・毎日厨房の前で張ってる訳にもいかないからな。」
「侍女と？もしかして、この前陛下が会いに行かれた？」
「いや、違う。」
連絡を取るということは誰かしらに伝言や手紙を預けるということで、そういう人に頼むという行為はフィリスにはまだ難しいだろう。
「それは、どなたとなのかお聞きしても？」
もちろん、教えなければ協力などしてもらえるはずもない。それに、誰彼かまわず伝言を持ってきてもらっても困る。
「マーサという侍女だ。彼女は何かと頼りになる。」
離宮にいては、何かあっても俺には分からない。マーサが俺と連絡を取りたいと言ってくれたのは、ありがたかった。

「・・・・・わかりました。では、信頼のおける者をこちらで用意します。」
「ありがとう、助かるよ。」
心からそう言うと、コンラートは苦笑した。
「王がこのような些細な事で礼を言われるなど、あなたくらいでしょうね。」
「私事だからな。それに、王様だからって偉そうにするというのは間違ってる。態度を偉く見せただけでは、見せかけの尊敬しか受けられない。」
コンラートは神妙に頷いた。

フィリスは俺の事を、どう思っているのだろうか？
いつものあの子の言動から、好かれているのだろう事はわかる。
けれどそれはすり込みのようなもので、生まれ育った村から出て俺しか頼れない状況だったから、それで懐いてくれているだけのような気もする。
とにかく好意は持ってくれているのだから、これから一人の男として見てもらえる様にすればいい。
ただそれで上手くいったとして、フィリスが知っているのは魔術師のジルだ。
俺が竜王だと分かれば、あの子の性格では引いてしまうだろう。
何より、俺は竜だ。人間じゃない。
異種族間で恋愛感情を持つ事は、とても難しい。
それは分かっているが、悲観することはない。
実際に俺の父も祖父も人間の女性を妻にしているし、夫婦仲が不仲なところは見たことがない。
竜でも構わないと思ってくれる女性は確かにいる。
フィリスがそう思ってくれるかどうかは分からないが・・・・・。
「コンラート、半日ほど出てくるから、書類はそのまま机に置いと

いてくれ。戻ったら片付ける。」
「またですか？仕方ないですね。なるべく早く戻ってきて下さいよ？」
「分かってるよ。」
人間の姿でヒラヒラと手を振ると、不満顔のコンラートをおいて部屋を出る。
難しく考えていても仕方がない。
行動を起こさなければ、今の関係が変わることはないのだから。

突然、花嫁候補に会いに行くと言った時、ガントとコンラートは二人してバカみたいに口を開けた。
「酷い間抜けな顔になってるぞ？そのまま廊下に出るなよ。」
二人とも高い地位にいるのだから、そんな顔を見られるのはまずいだろう。
「そ、それで、どなたの所に通われるのでしょうか？先触れを出しておかなければいけませんので。」
「陛下が自分から離宮に行かれるのは始めてです。相当な期待を持たせる事になるでしょうが・・・。」
そう言ったのは、近衛隊長のガントだった。
「心配ない。コンラート、一番最初に到着した娘は誰だったかな？」
「確か、アリシア様だったかと・・・。」
「じゃあその人の所に行こう。コンラート、今日中でいいから花嫁候補を到着順に並べたリストを作っておいてくれ。ガント、すまないが一緒に来てくれないか？」
「はあ、それはもちろん構いませんが・・・。」
俺はガントを連れて、離宮に向かった。

庭園の中に入ると、俺はフィリスを探した。

マーサがくれた手紙には、あの日俺が会いに行った事が原因で、フィリスが不当な扱いを受けていることが書かれていた。
部屋に入れず、外の仕事ばかりやらされているのだという。
オリヴィアの行動には腹が立つが、不当な扱いそのものに対してはそれほど心配はしていなかった。
あの村での仕事を思えば、城の仕事などどれもあの子にとって苦ではないだろう。
庭園の中ほどまで来て、やっと見つけた。
フィリスはしゃがみこんで、足元の雑草を丁寧に抜いていた。
顔に泥をつけて一生懸命に作業をしているフィリスに、ガントの方が先に声をあげた。
「娘よ、何をしている？そのような仕事は庭師に任せなさい、腰を痛めてはいかん！」
強面の顔だが意外と優しいガントは、そう言ってフィリスを立たせた。
何が起こったのか分からずキョトンとする姿が愛らしい。
俺はフィリスに近づくと、汚れた頬を手で拭ってやった。
「あなたは、あの時の・・・。」
どうやら顔くらいは覚えていてくれたらしい。
俺はこっそり持ってきた包みを取り出すと、フィリスに差し出した。
中にはこの前街で買ったお菓子が入っている。
フィリスは差し出された包みを前に、どうしていいのか分からないようだった。
「疲れた時に食べるといい。」
そう言って、フィリスの手に強引に握らせた。
いきなりあれこれ話しかけても、人見知りの強いフィリスは困惑するだけだろう。
名残惜しさにフィリスの頭を撫でてから、ガントを連れてフィリスの側を離れた。

「あなたが離宮に通うなど、おかしいと思いましたが・・・そういう事ですか。」
ふむふむと独り言のように呟くガントに、少々居心地が悪くなる。
「お前、最初から気付いていたな？何故だ？俺自身分かっていなかったのに。」
「陛下がどのように私のことを考えているのかは知りませんが、これでも妻とは大恋愛の末結婚しましてな。そのあたりのことは、人並みに分かるのです。」
「経験者ということか。」
「そんな所です。」
どうやら俺は、恋愛に関しては自分の半分も生きていないこの人間よりも未熟らしい。
「花嫁候補の部屋には一緒に入ってくれ。お茶を一杯飲み終わったら退室できるように声をかけて欲しい。」
「わかりました。」

彼女達には利用するようで申し訳ないが、フィリスにだけ会って帰ったのでは、余計な噂になってしまう。
自分の気持ちが分かった以上、俺が彼女達を選ぶ事はない。
早急に家に帰してやりたいと思うが、事情を話さずに穏便に帰すにはどうしたらいいだろうか・・・。
問題は山積していたが、フィリスの顔を思い出すだけで体が軽くなるような気がした。

第１４章　虚構

その日は、マーサが休暇を取って朝から外出していた。
オリヴィアの部屋に入れない私はマーサの代わりをすることもできず、侍従長から臨時の侍女が派遣されていた。
その侍女が私を探して庭園に出てきたのは、昼を少し過ぎた頃だった。
「あなたがフィリス？」
頷くと、彼女はほっとした顔になった。
「よかった、すぐに見つかって。オリヴィア様があなたを呼んでいて欲しいって。すぐに行ってもらえるかしら？」
「オリヴィアが私を？」
驚く私に彼女は不思議そうだった。本来なら別に驚く様な事ではないけれど、私とオリヴィアの関係ではめったにない事だった。
彼女にお礼を言って、私は早足でオリヴィアの部屋に向かった。

ノックをして中に入ると、オリヴィアは私の方を振り返りもせずじっと窓の外を眺めていた。
磨き上げられたガラスに映る顔がどこか思い詰めたようで、声をかけるのをためらってしまう。
「フィリス、よく恥ずかし気もなく私の前に顔を出せるわね。」
その声は今まで聞いたことがないほど低く、怒りを含んでいた。
何かやってしまったのだろうか？
理由が思い付かず言葉を返せないでいる私に、オリヴィアは振り返って目を細めた。
綺麗な人が怒った顔をすると、他の人よりも怖く見えるらしい。
そんなどうでもいい事が頭の中をよぎって行った。
「侍女の分際で陛下に話しかけるなんて・・・しかも、貢ぎ物まで

贈るなんて、何を考えているの？」
　言われた内容に心当たりがなくて、私はただ頭を振った。
「私について来たのは、これが目的？大人しそうな顔をして、陛下にまで取り入るつもりなの？」
「オリヴィア、何の事？私はそんな事してないっ！」
　慌てた私は敬語を使う事も忘れて訴えた。
　取り入るなど、陛下の顔もまだ見た事もないのに。それはオリヴィアもよく分かっているはず。
　私は陛下との茶会の時は、いつもオリヴィアの部屋の掃除を言いつけられていたのだから。もちろんせっかくここまで来たのだから、本音を言えば一目だけでも竜王様の姿を見てみたい。
　けれどそれはオリヴィアの意思に反してまで叶えたい事ではなかった。
「まさかあなたがこんな姑息な事をするとは思わなかった。しおらしく見せて今まで裏で何を考えていたのかしら。誤魔化しても無駄よ？私はこの目で見たんだから。」
　私自身身に覚えのない事を、オリヴィアはいつどこで見たというのだろう。
　絶対に違うと思いながらもここ数日の自分の行動を思い返していると、オリヴィアは文机の引き出しから便箋を取り出した。
「こんな安っぽいもので、私の機嫌を取ろうとしたの？こんなもので、私が喜ぶとでも思った？」
　オリヴィアは私が贈った便箋を握りつぶすと、叩きつけるようにゴミ箱に捨てた。
　呆然とそれを見ていた私に妖艶な笑みを浮かべると、オリヴィアは私のすぐ側に歩いて来た。
「いい事を教えてあげましょうか？」
　オリヴィアの瞳に、私の怯える顔が映っているのが見えた。
「どうして、あなたがあんなにみんなに嫌われていたのか。」

心臓が、ドクドクと大きな音をたてた。これ以上聞きたくないのに、体が動いてくれない。
ただオリヴィアの口元が動くのを、じっと見ていた。
「私がお父さんとお母さんに言ったのよ。『緑色の目なんて気持ち悪い、化け物みたいだ』って。そうしたらみんな、面白いくらいあなたに冷たく当たり出した。当然よね？村長が嫌う者に優しくすれば、自分が村で生活しにくくなるもの。人間って単純よね？しばらくしたら、嫌っている振りが本当に嫌いになるんだから。」

私は浅い呼吸を繰り返した。
今聞いた話を嘘だと思いたいのに、オリヴィアに掴まれた肩がギシギシと痛んで、私にこれが現実なのだと教えていた。
オリヴィアは、村でずっと私を助けてくれていた。唯一優しくしてくれた人だった。
それなのに何故？
「ほんと、正解だったわね。小さい頃のフィリスは私の目から見ても可愛いかったし、村のみんなもあなたを可愛がっていた。でもね？」
掴まれた肩のあまりの痛みに顔が歪む。離れようとするが、オリヴィアの手は肩に食い込んで離れなかった。
「みんなに愛されるお姫様は、一人で十分。・・・そうでしょう？嫌われ者のあなたを庇う私は、優しく綺麗な天使になれたわ。そういう意味では、むしろお礼を言った方がいいのかしら？」
「・・・そ、んな、理由で？」
「私には大事な事よ。」

今まで与えられてきた優しさは、すべて嘘だった。
まるで、世界が暗闇に閉ざされたような錯覚を覚える。
立っているのがやっとな私に、オリヴィアはさらに追い討ちをかけた。

「ねえ、あなたの両親が死んだのは、事故だって知ってるでしょう？」
頷きも返さない私を気にする事もなく、オリヴィアは続けた。
「ギギリー鉱山で落盤事故に合ったって。どうしてそんな所に行ったか、知りたくはない？」
私も何度かその疑問を祖母に聞いた事がある。ただ祖母はそれには答えてくれず、いつも悲しそうな顔で私を抱きしめた。
子供心に祖母の辛そうな顔を見たくなくて、いつしか両親の話をしなくなっていったように思う。
何年かたってから知ったことだけど、ギギリー鉱山はダーナの北にある山で、もう五十年以上前に廃鉱になっていた。
そんな所に、一体何の用があったのだろう。
村の住人に聞いて回った事もあったが、それを知る人は誰もいなかった。
「私ね、宝石が欲しかったの。本物のお姫様みたいに、本物の宝石の飾りが欲しかった。子供って、バカな事を本気で考えるのよね。」
そう言って、オリヴィアはクスクスと笑った。
「だからお願いしたの。私の誕生日までに宝石を採って来てって。鉱山に行けばまだ一つくらい残ってるかも知れないじゃない？行かなきゃお父さんに言って家を取り上げてもらうからって言ったら、あなたの両親は血相を変えて鉱山に行ってくれたわ。」
心臓が痛いくらいに大きな音を立てていた。
あまりの事に口から意味をなさない声が時折漏れ出る。
「お父さんが私を溺愛しているのは、みんなが知っていた。娘の言う事ならなんでも聞くって。でも、結局死んじゃって家は取り上げられちゃったけどね。」
クスクスと笑うオリヴィアに、私は目の前が真っ赤に染まった。

生まれて初めて感じる強い感情に突き動かされるように、手を大きく振り上げる。
パシンッという大きな音がなって、私は自分がオリヴィアを叩いた事を知った。

オリヴィアは真っ赤になった頬を抑えて笑うと、大きな声で悲鳴をあげた。
「さようなら、フィリス。もう二度と会いたくないわね。」

すぐに部屋に入ってきた侍女は、オリヴィアを見て顔を青ざめさせた。
「オリヴィア様！？大変！誰か、誰か来てちょうだいっ！」
侍女は廊下に向かって大声で呼ばわると、急いでオリヴィアに駆け寄った。
そして、立ち尽くす私から庇うようにオリヴィアを椅子に座らせる。
カチャカチャと金属同士がこすれ合う音がして、帯剣した警備の女性が入ってきた。
「その子を捕まえて！」
二人は部屋の中の状況を見て、さっと私の両側に立った。
両手を掴まれて、後ろ手に太い縄で拘束される。

「まって！乱暴はしないで！」
オリヴィアは目に涙を浮かべながら、警備の二人に訴えた。
「私も悪かったの。私の注意の仕方が悪かったから、だから・・・。」
「オリヴィア様・・・しかし、王の花嫁候補であるあなたに手を上げれば、立派な反逆罪になります。」
侍女の言葉に、オリヴィアはブンブンと頭を振った。

「お願い！あぁ、私が大袈裟に悲鳴なんてあげてしまったから・・・どうかお願いです、見逃して下さい。この子にはもう二度と城には入らせませんから！」
だから逃がしてあげてと繰り返すオリヴィアを、私は冷めた目で見ていた。

制服を着替えさせられた私は、両手を拘束されたまま城の通用門から出された。
勢いよく体を押されて地面に倒れ込む。
「自分のした事を、よく考えるのね。」
「オリヴィア様の優しさに感謝なさい。」
二人は吐き捨てるようにそう言うと門を閉めた。

オリヴィアに言われた言葉が、何度も頭の中で繰り返される。

これが夢だったらどれだけいいだろう・・・。

フワフワする体をなんとか起こして、私は歩きだした。
今はただ、何もかもから逃げ出したかった。

第15章　暖かい家1

いつの間にかあたりは夕焼け色に染まっていた。
城から追い出されて、私はあてもなく歩き続けた。
これから、どうすればいいのだろう？
村には帰りたくない。あの村に戻るくらいなら、このまま死ぬまで歩き続ける方が何倍もましだ。
オリヴィアだけじゃない。閉鎖的なあの村そのものが、私から両親を奪った。
それこそオリヴィアの言葉ではないが、あの村の住人とは二度と会いたくなかった。
どこかで仕事をもらえれば1番いいけど、身一つでうろうろしている怪しい子供など、誰も雇ってくれないだろう。
まして事情を聞かれても答えることもできない。
竜王様の花嫁候補を傷付けた事が分かれば、白い目で見られるばかりか石を投げつけられたって文句は言えなかった。

振り返ってみると、ずいぶん遠くまで歩いた気がするのに城はまだ大きく見えていた。
城に戻ったマーサは、私のことをもう聞いただろうか？
マーサならきっと、オリヴィアがどう説明しようと私を心配してくれるだろう。
そしてジルも・・・。
ジルには、迷惑をかけてしまったかも知れない。
自分が連れて来た娘が反逆罪になるようなことをしでかして、周りから冷たく当たられないだろうか？

ジルの顔を思い出すと、自然に涙がこぼれ落ちた。
こんな風にもう会えなくなってしまうなんて、考えた事もなかっ

た。
もっとたくさん話をしたかった。
側にいて、ただ微笑みを向けてくれるだけでよかった。
時々しか会えなくても、次に会うまでの時間すら私には宝物に思えた。
こんな事になるのなら、思い切って告白しておけば良かった。断られるにしても、気持ちだけでも伝えておけばよかった。

「大丈夫？」
その声に振り返ると、荷物を抱えた恰幅のいい女性が心配そうに私を見ていた。
「可愛い顔が台無しよ？」
そう言ってその女性は荷物を持っていない方の手でハンカチを取り出し、ためらいもなく涙を拭いてくれた。
「どうしたの？お家の人と喧嘩でもした？」
すっかり涙が引っ込んだ私はフルフルと頭を振った。
「もう日が暮れるわ。あなたみたいな女の子が一人で街を歩いていたら、悪い人に連れて行かれてしまうわよ？家はどこ？」
「家は、ないです・・・。」
女性は困った顔になって首を傾げた。
「じゃあ、お母さんやお父さんは？」
その質問にも、私は頭を振るしかなかった。
しばらく女性は困った顔で私をみていたが、やがて仕方ないという風に笑って私の手を取った。
「家にいらっしゃいな。夕食を一緒に食べましょう？」
「あ、あの、でも！」
「いいのよ。すぐ近くだから。落ち着いたら、主人に送ってもらうといいわ。とにかく、夜に一人で出歩いちゃだめよ。私にも娘がいるから、ほっとけないのよ。」
「・・・・・ありがとう。」

小さな声で伝えると、にっこりと微笑まれた。
「私はハンナ。あなたは？」
「フィリス。」
「フィリス、うちは小さい子が多くてちょっとうるさいかも知れないけど、我慢してね。」

ハンナの家は、２階建てのレンガの家だった。
ドアを開ける前から子供達がはしゃぐ賑やかな声が聞こえてくる。
「ただいま！今日は可愛らしいお客様を連れて来たわよ！」
ハンナが扉を開けると、すぐに部屋から子供が飛び出して来た。
「お母さん、お帰りなさい！」
７歳くらいの可愛い女の子だった。その後ろから追いかけるように、一回り小さな男の子が出てくる。
二人が出てきた部屋からは、ぐずるような赤ん坊の泣き声が聞こえた。
「ハンナ、なんとかしてくれ！ミリーが泣き止まないんだ・・・どちら様かな？」
赤ん坊を抱っこして最後に部屋から出て来たのは、眼鏡をかけた男性だった。
この人がハンナの旦那さんなのだろう。
「エリー、ロン、荷物を台所に運んでちょうだい。」
抱えていた袋を子供達に差し出すと、二人は先を争うように荷物を持って行った。
ハンナは両手が空くと、赤ん坊を受け取って身体を揺らした。
すると、まるで魔法のように泣き止んだ。
「ほら、やっぱり俺が買い物に行った方が良かったじゃないか。」
「あんたが行くと余計なものまで買ってくるでしょう？」
ハンナは家の中に入ると、私を振り返った。
「入って、中で休んでてちょうだい。すぐに夕飯を作るからね。」
「・・・お邪魔します。」

頭を下げて中に入ると、大きな手が差し出された。
「こんにちは。俺はグラッドだ。よろしく。」
「フィリスです。こんな時間にお邪魔してごめんなさい。」
「・・・・・ハンナが君を連れて帰った気持ちが、何となく分かる気がするよ。さあ、こっちで一緒に待ってよう。赤ん坊の世話でクタクタだよ。」
どういう意味か聞き返す前に背中を向けられて、タイミングを逃してしまった。

通された部屋はリビングで、ソファーの周りには子供のオモチャが足の踏み場もないほど置かれていた。
「こんな所ですまないね、適当に空いてる場所に座ってくれ。」
座る場所を探していると、後ろから二人の子供が飛び込んで来た。
「ねえおねえちゃんっ！一緒に遊ぼ！」
「お、おねえちゃん！？」
はじめて呼ばれるその呼び方が何だかこそばゆくて、私は自然に頬をゆるめた。
「たたかいごっこしよ！」
弟の方、確か名前はロンだっただろうか？
ロンがジャンプしながらそう言うと、すかさず姉のエリーが反論した。
「おねえちゃんは女の子なんだから、お人形で一緒に遊ぶの！」
「そんなのずるい！ぜったいたたかいごっこがいい！」
喧嘩に発展しそうな気配に、グラッドが慌てて止めに入った。
「お前たち！おねえちゃんは別にお前達と遊ぶために来たんじゃないんだぞ？」
「じゃあ、何のために来たの？」
素直なエリーの質問に、グラッドは答えられずに言葉に詰まった。
「素敵なオモチャがたくさんあるね。良かったら、遊び方を教えてくれる？」

身をかがめて二人にそう言うと、二人は嬉しそうに頷いた。
「いいのかい？」
頷くと、グラッドは明らかにホッとしたようだった。

エリーとロンは、競うようにして色々なオモチャを見せてくれた。
「これは何？」
渡された筒のようなものを回したり振ったりしてみる。降るとシャカシャカと音がするようだ。
楽器にしては音が小さいように思う。
「おねえちゃん、本当に知らないんだ？ここに穴があるでしょ？のぞいてみて？」
言われたとおりに中を覗くと、中にはいろんな色の模様が見えた。
「じっと見ててね！」
エリーが棒をクルクル回すと、その模様も様々な形に姿を変えた。
「すごい！どうなってるの？」
驚いて目を離すと、得意そうなエリーの顔があった。
「まんげきょうって言うのよ。」
「ねえおねえちゃん、これは？」
次にロンが出してきたのは、丸い卵のような形の変な人形だった。
これなら村でも見たことがある。
「これだったら知ってる！こうするんでしょ？・・・あれ？」
床において傾けると起き上がる・・・はずがそのまま倒れてしまった。
「ざんねんでした！じゃ～ん！」
ロンが人形の上半分を捻ってあけると、全く同じ形の一回り小さいものが中に入っていた。
「あけてみて？」
中の人形も同じようにあけてみると、また中から同じものが出てくる。
気になってまた開けると、また出てくる。

結局中には5つも人形が入っていた。
一つずつ中に戻していくと、それらはまたぴったりと収まった。
「ね、おもしろいでしょ？」
頷くと、ロンは嬉しそうに次のオモチャを選びはじめた。

「夕食の用意ができたよ。」
ハンナがみんなを呼びにきて、子供達は1番に部屋から飛び出して行った。
けれどエリーだけはすぐに戻ってきて、私の手を取った。
「おねえちゃん、おねえちゃんはエリーの隣に座って？」
返事をする間もなく食卓まで引っ張っていかれた。
ミリーはもう赤ちゃん用の椅子に座っていて、その隣にロンが座っていた。
ロンはお腹が空いているのか、食い入る様に料理を見ている。幼い子供が真剣な表情をしているのは、とても可愛らしかった。
エリーはロンの反対側に座ると、私に隣の席を進めた。
食卓には湯気の出る温かな料理が並べられ、急にお腹がすいたような気がした。

少し遅れてハンナとグラッドが席につくと、みんなで一斉にいただきますと言って食べた。
「フィリス、遠慮しないで沢山食べてちょうだいね。」
「これ食べてみて！お母さんが焼いたパン、すっごく美味しいんだから！」
エリーはそう言って私の取り皿にパンをのせてくれた。
一口食べるとほんのりと甘くて、柔らかかった。
「うん、すごく美味しい！」
そう言うと、エリーは自分がほめられたように喜んだ。

第16章　暖かい家2

「ちょっとおねえちゃんとお話しがあるから、二人で遊んでなさい。」
楽しい食事の後、ハンナはそう言ってエリーとロンをダイニングから出した。
二人は不満そうだったが、母親の言うことに素直に従った。
「おねえちゃん、お話し終わったら遊ぼうね！」
名残惜しそうに言うエリーに手を振ると、エリーはロンの手を引いてリビングに戻っていった。
お腹いっぱいになって気持ちがいいのか、ミリーはハンナの腕の中で気持ち良さそうに眠っている。
グラッドは手早く食器を流しに片付けると、慣れた動作でお茶をいれてくれた。
「エリーは一番上の子だから、ずっとお姉ちゃんを欲しがっていてね。君が遊んでくれて嬉しいんだよ。」
どちらかと言えば、むしろ遊んでもらったのは自分の方だと思う。
もうどうなっても構わないと思っていた暗い気持ちが、ずいぶんと軽くなった気がする。
「すっかり遅い時間になってしまったけど、帰る場所はあるの？家はないって言ってたけど、保護者の方は？」
ハンナの言葉に、私は俯いてしまった。けれど、ここまで良くしてもらって黙り込んでいるわけにもいかない。
「・・・私、仕えていた主人に追い出されてしまって・・・あの、それは私が悪いんですけど、それで、行く所がなくて・・・。」
オリヴィアは許せないけれど、城を追い出された理由としては、私が悪いことに違いはない。
「そうなの・・・。それで、ご両親は・・・・・いないのね？」
「はい。私が小さい頃に二人とも事故で・・・。」

オリヴィアの話を思い出してしまって、私はギュッと両手を握りしめて感情の波が治まるのを待った。
「実は私もね、子供の頃に両親を亡くしたの。流行り病でね。親戚もいなかったから孤児院に入れられて・・・。道を歩いて家族連れを見かけるたびに、辛い思いをしたわ。どうして私だけって・・・。」
ハンナを見ると、ハンナは懐かしそうな目で私を見ていた。
それは、私も幾度となく繰り返してきた事だった。
みんなにはちゃんと両親がいて、守られているのに。どうして私だけ一人なんだろうって。
「泣きながら立ち尽くすあなたを見て、昔の自分とよく似ていると思ったわ。寂しくて、悲しくて、どこにも行けなくて・・・。それでね、つい声を掛けてしまったの。行くところがないなら、しばらくここにいてもいいのよ？この通り赤ん坊もいるし、のんびりとはしてもらえないかも知れないけど。」
「ハンナさん・・・・。ありがとうございます。でも、そこまでご迷惑は掛けられません。・・・・・今晩だけ泊めてもらえたら、明日孤児院に行ってみます。場所を教えてもらえますか？」
気持ちはすごく嬉しいけれど、そこまで甘えることはできない。しばらくと言ったって、そのしばらくがいつまでになるのか、全くめどが立たないのだから。
孤児院に行けば、私はまだ未成年だし、仕事を見つけるまでの間くらいは面倒を見てもらえるかも知れない。
「・・・私たちはフィリスにいてもらっても、全然かまわないのよ？」
「そうだよ、子供たちも君に懐いているしね。それに、まだまだ手のかかる子供二人に赤ん坊の世話で、ハンナも大変なんだ。君がいて手伝ってくれると、ありがたいんだけどなあ。」
グラッドがそう言うと、ハンナは目を輝かせて何度も頷いた。
「そうよ！この先どうするかはもちろんあなた次第だけど、せめて

あと2、3日くらい泊まって行きなさい、ね？」
「・・・じゃあ、お願いします。」
申し訳なく思いながらも、もう少し心を落ち着ける時間が与えられた事にほっとして、私は遠慮がちに答えた。
ハンナとグラッドはお互いに顔を見合わせて、ほっと息をついた。
「よし！決まりだな。えっと、どこで休んでもらったらいいかな？」
グラッドがそう言った途端、閉まっていた扉が勢いよく開いた。
「おねえちゃん！エリーのお布団、一緒に使っていいよ！」
エリーが走って来て、嬉しそうに私に飛びついた。
「エリー！立ち聞きなんてお行儀の悪い！」
ハンナが怒ると、エリーはぶんぶんと頭を振った。
「ちがうもん！おそいからおねえちゃんのこと迎えにきたらまだお話中だったから、外で待ってたの！」
「しょうがない子ね。フィリス、かまわないかしら？」
「もちろん！ありがとう、エリー。」
笑いかけると、エリーはまた嬉しそうに笑った。
「少し大きいけど、私の寝間着を貸すわね。エリー、あなたも着替えていらっしゃい。」
エリーは元気よく返事をすると、部屋を出て行った。

エリーの寝室には、布団が一つしかなかった。
不思議に思って聞くと、ロンはまだお母さんと一緒にしか眠れないらしく、ハンナとミリーが寝ている部屋で一緒に寝ているということだった。
一緒に布団に入ると、エリーはクスクスと小さく笑った。
「エリーね、ずっとお姉ちゃんが欲しかったの！だってロンは男の子だから、一緒に遊んでもつまらないでしょう？」
エリーと布団は、ポカポカした太陽の匂いがした。
「だからね、行く所がなかったら、ずーっとエリーたちと一緒にい

ていいんだからね！」
「うん・・・。」
答えた声は、情けなく震えていた。
どうしてだろう・・・どうして、こんなに胸が熱くなるんだろう。
「悲しいときは泣いていいよ、おねえちゃん。お父さんがいつもそう言ってるもの。」
私を気遣ってか小さな声でそう言って、エリーは何度も頭を撫でてくれた。
ままごとのようなそれにまた胸が熱くなって、私はエリーをギュッと抱きしめた。

目が覚めると、エリーが目をこすりながら座って私を見下ろしていた。
「・・・おはよ、おねえちゃん。」
あちこちはねた髪がなんとも可愛らしい。
「おはよう、エリー。」
心地いい体温のおかげで、昨日はいつの間にか眠っていたようだった。
今何時くらいだろうか？
私はエリーと手を繋いで、リビングに行ってみた。
ちょうどお茶を飲んでいたグラッドが、私を見るなり激しくむせた。
「フィ、フィリスっ！年頃の女の子が寝間着で男の前に出てきちゃだめじゃないか、着替えて来なさい！」
焦ったようにそう言って、グラッドはハンナを呼びに行った。
「大げさよグラッド、仕方ないでしょう？昨日の服はもう洗ってしまったし・・・。それより、そろそろ行かなくていいの？」
「あ、ああ、そうだな。」
廊下からそんな話し声が聞こえて、ハンナがロンとミリーを連れ

て台所から出てきた。
「ちょっと待っててね、今服を探してくるから。」
「すいません。」
ハンナはミリーを私に渡すと、奥の部屋に入っていった。
「じゃあエリー、ロン、仕事に行ってくるよ。フィリス、悪いが子供たちとハンナを頼むよ。」
微妙に視線を外しながらそう言って、グラッドは手を振って玄関から出て行った。
「「いってらっしゃい！」」
子供たちは条件反射のように大声であいさつをしたが、グラッドからの返事は聞こえなかった。

朝食を食べてから、私は昨日と同じように子供たちと遊んでいた。
何か手伝いたかったのだが、ハンナに子供たちと遊んでもらうのが一番嬉しいと言われた。
しばらくしてから、みんなで散歩に行こうという話になった。
「ついでにフィリスの服も探しましょう？私の服ばっかりじゃ、ちょっとねえ。」
「そんな！十分です！」
「けど、サイズが合わないでしょう？」
玄関の外でそんな話をしていると、バタバタとグラッドが走ってきた。
「おいっ、みんな家の中に入りなさい！」
息を切らせたグラッドに、ハンナは目を丸くした。
「どうしたの、そんなに急いで。仕事は？」
「あ、ああ。と、とにかく中に入りなさい。話は後で・・・。」
私たちを家の中に押し戻そうとしていたグラッドの後ろで、誰かが声を上げた。

「おい、あの子じゃないか？」
「見つけたぞ！」
声と一緒に、ガチャガチャと金属が揺れるような音がした。
玄関の中に戻ると、グラッドは少しだけドアを開けて外の様子をうかがった。
けれどすぐにわれに返ったように慌ててドアを閉めると、急いで内側の鍵を掛けた。
「いったいどうしたの？」
ハンナの不安そうな声に、グラッドは困惑した表情で私に視線を移した。
「君の主は、一体誰だ？」
突然の問いかけに、どう答えていいか戸惑う。
するとグラッドは、言いにくそうにこう言った。
「兵士が、君を探してる。緑色の目をした、１４、５歳の女の子を知らないかと街で聞いて回ってる。ただの行方不明者なら警吏が動くはずだ。兵隊まで出てくるなんて、普通じゃない。君は一体、何をしたんだ？」
「・・・グラッド、とにかく中に入りましょう。」
ハンナの言葉に、グラッドはすっかりおとなしくなった子供たちに気が付いた。
「あ、ああ、そうだな。すまない、驚かせてしまって・・・。」

妙に重い空気が3人の間を流れていた。
エリーとロンはリビングに居るように言われて、今は二人で遊んでいる。
ミリーはベビーサークルに入れられていた。
「・・・それで、話してもらえるかな？」
申し訳なさそうに言うグラッドを、ハンナが睨んだ。

「グラッド、そんな言い方！」
「あの、いいんです。ちゃんと話しますから・・・。」
もし昨日のことが原因だというのなら、ちゃんと説明しなければいけない。そしてもしそうだとしたら、私はすぐにでもここを出て行った方がいい。
「どこから話せばいいのか・・・。」
迷ったけれど、必要な部分だけを話すことにした。
私が竜王の花嫁候補と一緒に帝都に来たこと。事情があって、つい彼女の頬を叩いてしまったこと。
兵士が私を探しているのは、おそらくその事が原因だろうということ。
「本当にごめんなさい、こんな迷惑を掛けてしまって。私、すぐに出て行きます。」
最後にそう言うと、二人は慌てて椅子から立ち上がった。
「待ちなさい、そういう事情なら、どんな扱いを受けるか分からん！」
「そうよ！何かよっぽどの事情があったんでしょう？出て行くことないわよ、ここにいなさい！」
「でも、もう私がここにいるのは見られているし・・・。」
兵士が探しているというのなら、私を庇えば何か罪に問われたりしないだろうか？
私は、それが怖かった。
「な、何か方法を考えよう、うん、それがいい！ちょっと落ち着け！」
「グラッド、まずあなたが落ち着きなさい！」
二人の大声に、ミリーが泣き出してしまった。それを慌てて抱き上げて、ハンナは立ち上がりかけた私の肩を押して椅子に戻した。
「兵士たちがあなたを見つけてどうするつもりなのか、まずそれが問題よね。」
「そうだな。正直、反逆罪に問われる事もあるだろうが、わざわざ

兵士まで動かして探してるっていうのはちょっと大げさすぎる気がするな。」
「そうよねえ。花嫁候補って言ったってまだ正式には花嫁じゃないわけだし、それくらいで兵士まで出すかしら？」

それから延々と解決をみない話し合いが行われ、私がやっぱり出て行くと言うと止められるという繰り返しだった。
「・・・そろそろお昼ね。」
その場に不似合いな一言が出たのは、エリーとロンがどこからか持ってきたパンを手に私たちのところに来たからだった。
ハンナが椅子から立った時、玄関の扉がノックされた。
「ど、ど、どうする！？どうする！？」
「落ち着いてグラッド！」
そういうハンナも、声が裏返っていた。
「あの、私が出ます。」
「まちなさい、フィリス！」
バタバタとお互い無意味に歩き回っていると、玄関から声が聞こえた。

「フィリス！ここにいるのか！？」

その声が聞こえた瞬間、私は駆け出した。

第17章　捜索（SIDEジル）

薄暗くなった廊下の奥から、何人かの人間が急ぎ足で歩いてくる。
謁見の間から執務室に戻る途中のことだった。
ただならない様子にコンラートは俺を守るように一歩前に出ようとしたが、それを手で制した。
「大丈夫だ。」
先頭を歩いているのはガントだった。その後ろに、なぜか私服姿のマーサと、二人の女の警備兵が続いている。
おそらく花嫁候補達の離宮を守っている者達だろう。
ガント達は俺を見つけると、小走りになって俺の前に立った。。
「急を要します。」
その一言に頷くと、俺は無言で執務室に向かった。
一瞬だけ見たマーサの不安と焦りが交じり合った表情が、嫌な予感をかきたてた。
「今から誰も通すな。」
最後に執務室に入ったコンラートが、心得たように外に立つ警備兵にそう告げた。
扉が閉まると、ガントは警備兵二人とマーサを俺の前に立たせた。
三人は膝を折ると、頭をたれた。
「マーサ、お前から話をしなさい。」
ガントは表情こそ硬かったが、怖くならないよう声音に注意しているのがわかる声でマーサに声をかけた。
マーサは戸惑った顔で、それでも俺の顔を見上げて話した。
「私は花嫁候補様のお世話を任されております、マーサと申します、陛下。直接お話し申し上げる無礼をお許しください。」
「許可する。何があった？」
俺が真剣な表情なのを確認して、マーサは気持ちを落ち着けるた

めか大きく深呼吸をした。
「実は、オリヴィア様が連れてこられた侍女のフィリスという少女の行方が、分からないのです。私は今日休暇を頂いておりました。戻ってきたら彼女がいなくて、それでオリヴィア様にお伺いしたら城の外に出したと・・・。」
行方が分からない？城の外に出した？
「メリッサ、事情の説明を。」
ガントの言葉に、今度は真ん中にいた女が顔を上げた。
「はい。昼過ぎにオリヴィア様の部屋から悲鳴が聞こえて、その後すぐに侍女が誰か来てくれと大声を出しました。私たちが部屋に駆けつけたところ、オリヴィア様は頬を真っ赤にして倒れこんでいました。そのフィリスという侍女がオリヴィア様を叩いたのは状況から見て明白でしたので、我々はオリヴィア様の身の安全を確保するため、その侍女を拘束致しました。しかしオリヴィア様は、城から娘を出すから見逃して欲しいとおっしゃられて・・・。」
心臓が、ドクドクと嫌な音を立てる。
手の先が冷たくなって、逆に頭に血が上っていくのを感じた。
「それで、城から追い出したというのか？原因はなんだ？」
ガントが苛立ったように問いただした。
おそらく詳しい話はガント自身もまだ聞いていなかったのだろう。
わずかな時間も惜しんで、関係者を直接連れてきたのだ。
メリッサは、何故ガントがそんな顔をしているのか分からず不思議そうだった。
「後からお聞きした話では、言葉の使い方を注意したら、逆上したとの事で・・・そのような危険な人物は、城に置いておくべきではありません。」
「いいえっ！あの子はそんな子ではありません！陛下、きっと何かの間違いです！」
マーサが泣きそうな声で訴えた。その様子を、メリッサともう一人の女が面倒そうに見ている。

「それで、フィリスという侍女の方からは事情を聞いたのか？」
ガントの言葉に、メリッサは首をかしげた。その態度に、ガントが爆発した。
「愚か者が！！両方の話を聞かずに勝手に決め付けたのか！！」
ビリビリと窓ガラスすら振るわせそうな声に、３人は身を竦めた。
「軽率だったな。右も左も分からない田舎の若い娘を一人で街に放り出して、拘束して部屋に閉じ込めるよりよほどひどい事になるとは考えなかったのか？」
コンラートの感情のこもらない声に、メリッサ達はうなだれた。

誰も言葉を発しないまま、沈黙が部屋を支配した。
色んな感情が混ざり合って、気持ちが悪くなる。
怒り、不安、後悔、焦燥・・・。今まで生きてきた中で、こんなにも複雑に絡み合った負の感情を感じるのは初めてだった。
一体、何があった？
あの子は村人たちに罵られ、面と向かって怒鳴られてもただじっと耐えていた。
よほどの事でもない限り、怒ったりしないはずだ。
まして誰かに手を上げるなど、とても考えられない。
あるとすればそれは・・・・。それだけ考えられないような事が、あの子に起こったのだ。
自分でも制御できないほどの強い怒り。
あの子は、どれ程心を傷つけられたのだろう。
オリヴィアがフィリスを良く思っていない事は、分かっていたのに。
何故守れなかった？
いつか何か悪いことが起こる気はしていた。
けれどそれは、フィリス自身が乗り越えていかなければいけないことだとも思っていた。
その時にほんの少し手助けができれば、それでいいと・・・。

「俺はバカかっ・・・？」
起こりうる危険の度合いを予測することをしなかった自分の愚かさに、吐き気がする。
抑えきれない苛立ちを逃がそうと、思い切りこぶしを振り上げて机を叩きつける。
バァンという盛大な音がして、机は上にのっていた書類を撒き散らせて半壊した。
視線を3人に戻すと、驚いた顔で完全に固まっていた。
大きく深呼吸を繰り返して、感情をなんとか押し殺す。
外はもう随分暗い。あの辺境の村で生きてきたフィリスが、夜の街の恐ろしさなど知るはずがない。
身を守るすべを何一つ持たないフィリスが暗い街を一人歩く姿を想像して、俺は身を震わせた。
「ガント、頼む。」
「お任せを。」
ガントは短く返事をして、部下でもある二人の警備兵を連れて出て行った。
それを見届けて、俺はまだ固まっているマーサに声を掛けた。
「マーサ、オルグ達と一緒に心当たりを探してくれないか？彼らならフィリスの顔を覚えているはずだ。」
マーサは怪訝な顔で俺を見上げた。
「陛下、よろしいのですか？」
「かまわない。それよりコンラート。」
「調査の方は私の方で行います。留守はお任せください。」
こういう時、多くを語らなくても分かってくれる腹心というのは身にしみてありがたかった。
「マーサ、俺だ。分からないか？」
分からなくて当然だろうと思いながら、人間の姿に変化させた。
「・・・・ジルっ！？」
開いた口がふさがらないマーサの肩をゆすって、話を続けた。

「事情はまた改めて話す。それより今はフィリスだ。俺も街に出て心当たりを探してみる。そう遠くには行ってないはずだ。もし見つけたら合図してくれ、やり方はオルグたちが知っている。いいな？」
呆然とした表情で、それでもなんとか頷いてくれたマーサを置いて、俺は隣室のドアを開けた。
心は急くが、このままの姿で街には出られない。
急いで目立たない服に着替えると、窓を開けて下を見る。
誰も居ないのを確認して、俺は窓から外に飛び出した。

ガントが率いる近衛隊は優秀だった。
まず街の警備隊に協力要請をかけ、捜索に協力してもらうと共に道の要所に検問をおいてもらった。
彼ら自身もその足で街を歩き回り、仲間を見つけるとこまめに情報交換を繰り返した。
おかげでかなり短い時間で、城を出てからの大体の足取りを掴む事ができた。
フィリスの珍しい緑の目は、意外なところで役に立った。
彼女を見かけたというほとんどの人が、珍しい緑色の目をしていたので印象に残っていたというのだ。
しかし、それも明るいうちの話で、暗くなりはじめてから彼女を見かけたという話は全く聞けなくなった。
それは夜になって目の色が見えなくなったせいで、誰も彼女に目を留めなくなったせいなのか。
それとも、何か事件に巻き込まれたのか・・・。
後者の可能性は考えたくなかった。例えそれが十分にあり得る話だとしても。
俺は不安に駆られて、一晩中街の中を歩き回った。
動いていないと、探していないと不安に押しつぶされそうだった。
一緒に歩いたことのある道を通るたび、また一緒にこの道を歩け

る日がくるのかと弱気になる。
フィリスの笑う顔を思い出しては、失う恐怖に大声を出したくなった。
フィリス、どうか無事でいてくれ・・・。
強くそう祈りながら、俺は足を動かし続けた。

結局フィリスは見つからないまま、夜が明けた。
日が昇り、人々が起き出してきても、俺は歩き続けた。
変わらない毎日。変わらない人々の生活。
いつもは微笑ましく見えるそんな日常の風景すら、今の俺には辛かった。
フィリスが俺のそばに居ても居なくても、何も変わらない。
それが、理不尽にも忌々しく思えた。
空を見上げると、憎らしいくらいの青空が広がっている。フィリスもどこかで、この空を見ているのだろうか・・・。
そんな情けない事をぼんやりと考えていたら、突然パンッという破裂音がして空に赤い煙が飛び散った。
通行人の誰もが足を止めたが、それほど大きな音でもなかったためすぐにみんな気にしなくなった。
俺は押しつぶされそうな不安を押さえ込んで、煙が見えている方向へと走った。

同じように合図があった場所に集まりだした近衛兵達に詳しい場所を聞きながら、住宅街の一角に入り込む。
「どうやら、この家の中にいるみたいです。」
走ってきた俺を関係者だと思ったのか、その場にいた兵士の一人が教えてくれた。
「ここに・・・・？」
あまりに意外な場所に、俺は首をかしげた。
そこはどう見ても一般家庭のごく普通の家で、中からは赤ん坊の

声らしきものも聞こえてくる。
こんな所に、本当にフィリスがいるのだろうか？
俺はわらにもすがる思いで、ドアに近づいた。

「フィリス！ここにいるのか！？」
大声で呼ぶと、中からバタバタと足音が聞こえた。
目の前で勢い良くドアが開く。
「ジルッ！」
「フィリスっ！！」
フィリスの姿を見た瞬間、体が勝手に動いて彼女を抱きしめていた。
「よかった、本当に・・・。」
俺の声が震えていることに、フィリスは気が付いただろうか？
フィリスは何も言わずに、しばらくの間じっと俺を抱きしめ返してくれた。
腕の中の体温に、心臓の音がようやくいつもの速さを取り戻す。
「ジル・・・もう会えないと思ってた。どうしてここに？」
「それはこっちの台詞だ。どれだけ心配したと思ってる？」
もう会えないなどと、冗談でも考えたくない。

「あの～、失礼ですがどちら様でしょうか？」
この場に不似合いな声に顔を上げると、おそらくこの家の住人であろう人たちがポカンとした顔で自分達を見ていた。

第１８章　再会

お互いに自己紹介をすませた後、ジルは外にいる兵士達に話があるからと外に出て行った。
小声で内容までは聞こえなかったけれど、兵士達は頷きながらジルの話を聞いて、それからあっさりと家の前から去っていった。

「つまり、あの兵士達は彼女を捕まえるために探していたわけじゃないんですね？」
エリーとロンのお腹の虫が暴走寸前だったので、話は昼食を取りながらということになった。
「もちろんです。彼らは善意でこの子を探すのを手伝ってくれただけですから。」
グラッドの質問に、ジルは苦笑してそう答えた。
「しかし・・・・・。」
納得しがたい顔のグラッドのコップに、ハンナが水をつぎ足した。
「いいじゃない、悪いことにならなかったんだから！それに、色々事情があるんでしょうし、あまりしつこく聞いては失礼よ？」
「あ、ああ。そうだな。」
エリーとロンはジルに興味があるようだが、よほどお腹が空いていたのか、チラチラとジルの方を盗み見ながらも、口に料理を運ぶ手は止めなかった。
もしかしたら、おねえちゃんに続いて今度は遊んでくれるお兄ちゃんが現れたと思っているのかもしれない。
「本当に、ありがとうございました。あなたがたがこの子を保護してくれてなかったら、今頃無事でいられたかどうか分かりません。」
改めてジルが礼を言うと、ハンナは照れたように笑った。
「困ったときは、お互い様ですもの。こっちこそ、フィリスには子供達と本当によく遊んでもらって・・・・。」

自分達の話題が出たことに気づいたエリーが、口の中のものを一生懸命飲み込んで会話に加わった。
「エリー、昨日はおねえちゃんと一緒のお布団で寝たんだよ！おねえちゃん、今日もまだ一緒に遊べる？もう帰っちゃうの？」
「ううん、まだここにいるよ？今日も一緒にお布団使ってもいい？」
そう言うと、エリーは嬉しそうに大きく頷いた。
ジルは心配して私を探してくれたけれど、一緒に城に戻ることはできない。あそこにはもう私の居場所はないし、戻りたいとも思わなかった。
ただ、マーサに直接会ってお別れを言えないことだけが気掛かりだった。
「そういえばグラッド、あなた仕事は？」
「あ・・・忘れてた。」
水の入ったコップを持ち上げたまま固まったグラッドに、私は謝った。
「ごめんなさい、私のせいで・・・。」
もしかしなくても、私のせいで仕事を放り出して家に戻って来なければいけなかったのだ。そう思うと申し訳なくて、いたたまれなかった。
「いや、平気さ。午後から出るよ。仕事に行く途中で腹が痛くなったって言っとくから。」
「気にしなくていいのよフィリス、これがこの人のいい所なんだから。」
ハンナがそう言うと、グラッドは顔を赤くして照れ笑いをした。
「フィリス、少し話がしたいんだ。外に出ないか？」
食事が終わり、グラッドが仕事に出かけるのを見届けると、ジルは私にそう言った。
「かまわないから、行ってらっしゃいな。ジル君、夕飯も一緒に食べられるかしら？」

私が答える前に、ハンナはそう言って不満そうにしているエリーの頭を撫でた。
「ご迷惑でなければ、喜んで。」
ジルはそう返事を返すと、私の手をとって家の外に出た。

こうしてまたジルと二人で歩いているのが、まるで夢の中の出来事のようで不思議な感じがした。
昨日はもう二度と会えないと思って、思い切って告白しておけばよかったと後悔したけれど・・・。
いざ本人を目の前にすると、とてもそんな勇気は出てこなかった。
「このあたりでいいか。」
気が付くと、少しさびれた感じのする小さな公園に来ていた。
子供達が何人かボール遊びに夢中になっているだけで、他に人影はない。
ジルは手近なベンチに私を座らせると、自分も隣に座った。
「本当に心配したよ。寿命が縮んだ気がする。マーサもフィリスを心配してたよ。」
「・・・ごめんなさい。」
ジルは、一晩中街を歩いて探してくれたという。その間私はのんきにエリーたちと遊んで、ぐっすり眠り込んでいたのだ。
そう思うとひどく情けない気持ちがした。
「あやまる必要はないさ。どうしようもない事だった。・・・・フィリス、聞いてもいいか？」
ためらいがちにかけられた言葉に、私は思わず体を硬くして身構えた。
「いったい、何があった？」
単刀直入な質問に、私はどう答えていいか迷ってしまった。
さけて通れない質問だと思っていたし、ジルがこの話を聞くために私を外に連れ出したのだということも、予想していた。
けれど、話す覚悟はできていなかった。

「・・・ジルは、何も聞いていないの？」
「フィリスが彼女の頬を叩いたってことは、聞いてるよ。」
その口調は責めるようなものではなく、私は隣のジルの顔を見上げた。
ジルは心配そうな顔で私を見下ろしていた。
「俺は、ちゃんとフィリス自身から話を聞きたいんだ。」
私は何度か口を開いて、その度に言いよどんで言葉を飲み込んだ。何度かそれを繰り返した後、結局言えたのは一言だけだった。
「・・・・・ごめんなさい。」
それだけを答えると、ジルは悲しそうな顔で体を私のほうに向けた。
「俺は、信用できないか？」
その言葉に慌てて頭を振る。
「もし話しにくいのなら、話せることだけでもいいんだ。」
ジルはそれ以上何も言わず、じっと私が話し出すのを待った。
包み込まれるような優しさを感じて、麻痺していた心のどこかが、痛みを伴いながら感覚を取り戻していく。

「私、オリヴィアの事信じてた。」
そう声に出すと、一緒に涙も頬を伝っていったのが分かった。
「私を庇ってくれるのは、私に優しくしてくれるのは・・・。」
そう、信じていた。オリヴィアだけが、私を救ってくれた。
私の中で、彼女は唯一の光だった。
「世界中で、オリヴィアしかいないって。」
それなのに、どうしてこうなってしまったのだろう？
昨日の出来事すべてが、悪い夢なら良かったのに。
「もう分からないの。何が本当で、何が嘘なのか・・・・・。」
今までのオリヴィアは全て嘘だった。私が今まで信じていたものは、ただの幻だった。

私の世界は、私が今まで全てだと信じてきた世界は、たった一日で姿を変えてしまった。
「フィリス・・・。」
ジルの長い指が、涙をぬぐってくれる。
その手に自分の手を重ねると、少しだけ気分が落ち着いたような気がした。
「無理に聞いてすまなかった。もう何も言わなくていい・・・。」
大きな手が私の頭の後ろにまわり、そっと肩に顔を押し付けられた。

それからどれくらい時間がたったのか。
ジルは、私が落ち着くまでただじっと肩を貸してくれた。
ようやく顔を上げられた時には服が涙でグチャグチャになっていて、言葉も出ないくらい焦った。
「すぐに乾くさ。」
ジルはそう言うと、私の頬に残っていた涙を拭ってくれた。
「これから、どうしたい？」
「えっと、取りあえず孤児院に行って、そこで仕事を紹介してもらおうかなって考えてるけど・・・。」
そう答えると、ジルはなにかを考えるように黙り込んだ。
「ジル、ごめんね？」
謝罪の意味を図りかねて、ジルが首を傾げる。
「せっかくオリヴィアの付き人にしてもらったのに、私、結局何も役に立てなかった。」
私だから、とまで言ってもらったのに。役に立つどころか、迷惑しかかけていない。
「ねえジル、ジルはどうして私をオリヴィアの付き人にしてくれたの？」
村を出るときにも聞いたけれど、あの時もはっきりとした理由を教えてはくれなかった。

ジルは苦笑して、私の頭を撫でた。
「・・・あの村を出た方がいいと思ったからだ。あの閉鎖的な村から、解放してやりたかった。ただそんな事は村長たちに言えないし、フィリスも納得しなかっただろう？」
今のフィリスになら、分かるはずだ。
そう続けられて、私は頷いた。確かに、あの時そんな風に言われても、何を言ってるのだとしか思わなかったかも知れない。
「じゃあ、私のために？」
ジルは少し照れくさそうに笑った。
「半分くらいは、そうだ。」
「・・・？じゃあ、あとの半分は？」
「それは、また今度な。フィリス、さっきの話だが、孤児院に行くのはもう少し待てないか？」
「どうして？」
ハンナの家にいつまでもいるわけにはいかないし、他に行くあてもない。
孤児院に行くのが、一番いい選択肢だと思う。
「これはただの俺のわがままなんだが、聞いてくれないか？フィリスさえよければ、その間どこか宿をとってもいい。とにかく、しばらく待っていて欲しいんだ。」
「それって、どれくらい？」
ジルがそこまで言うのなら、きっと何か理由があるのだろう。
言う通りにしてもいいけれど、あまり長い間では宿代もそうとうなものになるだろうし、気が引けてしまう。
「そうだな・・・よし、そのあたりの事は明日また話し合おう。申し訳ないけれど、今夜もう一晩だけハンナさんの家にお世話になろう。」
「ジル、明日も来るの？」
そんなに抜け出して、仕事は大丈夫なのだろうか？
「ああ。何か問題でも？」

「私はないけど・・・。」
「なら大丈夫だ。そろそろ戻ろうか。」
ジルはすっきりした顔になると、私の手をとって立たせた。

来たときと同じように、手を繋いで道を歩く。
ジルは長い足をゆっくりと動かして、私の歩く速度にあわせてくれていた。
ハンナの家に戻ると、家の前で遊んでいたエリーたちが駆け寄ってきた。
「おねえちゃん、お帰りなさい！」
その声が聞こえたのか、玄関からハンナが顔を出した。
「お帰りフィリス。ジル君も、中に入って？エリー、ロン、あなた達もそろそろ中に入りなさい。」
「「はーい！」」
二人は仲良く返事をすると、中に入って行った。

夕食をご馳走になった後、ジルは予想通りというか、やっぱりロンのいい遊び相手にされていた。
帰るときになると泣いてしまうくらいすっかり懐いてしまって、ジルも嬉しそうな、困ったような、複雑な顔をしていた。
「ごめんな、また明日遊びに来るから。」
「ほんと？やくそくだよ？」
別れ際に約束をして、やっと納得したようだった。
「では、彼女をお願いします。」
ハンナと仕事から帰ってきたグラッドにそう言ってから、ジルは私に顔を向けた。
「マーサにはちゃんと話しておくよ。じゃあフィリス、また明日。」
最後に私の頭をポンポンと叩いてから、ジルは帰っていった。

第19章　休息

次の日、私は迎えに来たジルと一緒にハンナの家を出た。
エリーとロンは寂しそうだったけれど、また遊びに来ると約束するとなんとか納得してくれたようだった。
「落ち着いたら、連絡ちょうだいね。困った事があったら、いつでも来てくれていいからね。」
ハンナは私の手を握ると、心配そうにそう言った。
「遠慮せずに、また遊びに来てくれ。待ってるよ。」
仕事から帰ったグラッドも、家の前まで見送りに出てくれた。
「本当に、ありがとうございました。エリー、ロン、きっとまた遊びに来るからね。」
たくさん元気をくれた小さな子供達にも別れを告げると、子供達は涙を浮かべながらも頷いてくれた。
「それじゃあ、また。お世話になりました。」
ジルはそう言って頭を下げると、私の手を引いて暗い道を歩き出した。
私は何度も後ろを振り返りながら、見送ってくれるハンナたちに手を振った。

「新しい生活が落ち着いたら、報告に行こうな。」
寂しいと思う私の気持ちを気遣ってくれたのか、ジルは私の頭を撫でてそう言った。
ジルと相談して、とりあえず一週間ほど近くの宿に滞在することになった。
いったい宿代がいくらになるのか気になるけれど、無一文で現在無職の私はとても恐ろしくて聞けなかった。
「もう一人、フィリスと一緒に宿に泊まる事になってる人がいるん

だ。当面は困った事があったら、その人を頼ればいいから。」
「もう一人？」
それは、今はじめて聞いた事だった。
「そうだ。事情も話さずに、色々と押し付けて悪いな。今度会う時には、ちゃんと説明できるようにするから。本当は、俺がずっとそばに居てやれたらいいんだけどな・・・。」
後半は独り言のように小さな声だったけれど、それだけにジルが本当にそう思ってくれていることが分かって嬉しかった。
「ジルもお仕事があるでしょう？私の事なら、大丈夫だから気にしないで？」
ジルはそれには何も答えず、繋いだ手に少しだけ力をこめた。

その宿は、ハンナの家から意外と近い所にあった。
3階建ての可愛らしい建物で、入り口近くにはたくさんの植木鉢が置かれていた。
「フィリス！」
ジルが扉を開けると、すぐに自分の名前を呼ぶ声が聞こえた。
「マーサ？」
聞きなれた声にもしかして、と名前を呟くと、ジルがそうだと言うように私を見下ろして微笑んだ。
そっと背中を押されて中に入ると、マーサが椅子から立ち上がってこちらに歩いてくる所だった。
「フィリス・・・。」
マーサは私の前まで来ると、目を潤ませた。それに驚いて私が口を開く前に、ジルが声をかけた。
「二人とも、とにかく中に入ろう。」
入り口をふさいでしまっていた事に気が付いて、私とマーサは急いで奥に入った。
テーブルにつくと、マーサは私達二人分のお茶を頼んでくれた。
「よかった、本当に。心配したのよ？あなたにもし何かあったらっ

て・・・。」
「心配かけて、ごめんなさい。でもマーサ、どうしてここに？」
会えたのはすごく嬉しいけれど、仕事はどうしたのだろうか？
「しばらくお休みをもらったのよ。」
「えっ？」
もしかして、今回の件が何か関係してるのだろうか？
「ああ、心配しないで！休暇もずいぶん溜まっていたしね。実は配置換えの話も出ていて、新しい部署に就く前に気分転換もしたいから。」
「はいちがえ？」
「働く場所が変わることだ。優秀な侍女を欲しがってる所があったから、マーサを薦めたんだ。マーサももう3年連続で花嫁候補の世話係をやっているし、そろそろ違う仕事についてもいいだろうと思ってね。」
聞きなれない単語に首を傾げる私に、ジルが詳しく説明してくれた。
「そうなんだ・・・。マーサ、すごいね！」
なんだかすごく急な話のようにも思えるけれど、ジルがそう言うのならそういうものなのだろう。
それに、マーサが優秀だという事は間違いない。それが認められたというのだから、私も嬉しかった。
「ありがとう。それでジルにフィリスの話を聞いて、どうせだったら一緒に休もうと思って。ジルに部屋を2部屋取っておいてくれるようにお願いしたの。」
「そうなんだ・・・。じゃあ、さっき話してたもう一人ってマーサの事だったの？」
ジルを見ると、いたずらが成功した子供のような笑顔を浮かべて頷いた。
「そういう事だ。それじゃあ、そろそろ行くよ。マーサ、後は頼む。」

ジルはカップに残ったお茶を飲み干すと、席を立った。
「できるだけ早く会いに来るから。」
「うん・・・。」
落ち込んだ顔の私に苦笑を返して、ジルは私の頭を少し乱暴に撫でると宿を出て行った。

「大丈夫よフィリス、ほんの何日かでまた会えるわよ。さあ、部屋に行って女同士でおしゃべりしましょ！」
マーサは3階の一番奥の部屋に入ると、私をうながして中に入れてくれた。
部屋の中はこじんまりとしていて、ベッドと小さな机がおいてあった。
「ここがフィリスの部屋ね。隣が私の部屋だから、何かあったらいつでも呼んでくれていいから。それと、これなんだけど・・・。」
そう言ってマーサは、ベッドの上に置かれた大きな袋を開けた。
「今日ここに来る途中で色々買ってきたの。毎日同じ服ってわけにもいかないしね。」
中には、何着かの服や寝間着が入っていた。
「こ、こんなに？」
「当面必要でしょ？お金ならジルから預かってるから大丈夫よ。」
「ジルに？」
「そう。・・・迷惑かけてるとか思ってる？」
どうして分かったのだろうか？
マーサは優しく微笑んで、私の背中を押してベッドに座らせた。
「場合によっては、迷惑をかけてくれない方が悲しい時もあるわ。親しい人が困っていたら、頼ってくれない方が嫌じゃない？」
頷くと、マーサは私の隣に腰掛けて息を吐いた。
「私もフィリスが困っていたら、頼って欲しい。自分の力でどうにもならない時は、助けてって言ってもいいのよ。」
「ありがとう、マーサ。」

「・・・ねえフィリス、聞いてもいいかしら？オリヴィア様と何があったの？オリヴィア様は、あなたの事を少し注意しただけだって・・・でも、私はどうしても信じられない。本当の事が知りたいのよ。」

真剣なマーサの声に、私は重い塊を吐き出すように息を吐いた。

マーサは今はもう違うようだけど、オリヴィア付きの侍女だったのだ。

そして、私を指導する立場にあった。

何があったかを知る権利はあるし、知りたいと思うのも当然だろう。

そして何より、心から私を心配してくれている。

「あの、ね・・・。」

思い出すと、胸が引き裂かれるように痛む。

頭の中に、オリヴィアの笑い声がよみがえって気分が悪くなった。

昨日ジルと話した時よりも、それは酷くなっている気がした。

「あの時、オリヴィアに、呼ばれて、それで・・・。」

話そうとするのに、声が震えてうまく話せない。

「フィリス！ごめんなさい、ジルに聞いていたのに。私、どうしても我慢できなくて・・・ごめんねフィリス。大丈夫だから・・・。」

マーサが私を包み込むように抱きしめて、何度も背中を撫でてくれた。

そこでようやく自分が声だけでなく体も震えていたことに気がついて、驚いた。

「本当にごめんなさい。でもこれだけは覚えていてね？私もジルも、フィリスが悪くないって事だけはちゃんと分かってるからね！」

「マーサ・・・。」

その後、マーサは自分の部屋から甘いお菓子を持ってきてくれた。

それを口に入れると、少しだけ気分がましになったような気がした。

「ねえ、今日は久しぶりに一緒に寝ましょうか？」

「いいの？」
正直一人になって色々と考えてしまう事が怖かったから、マーサの申し出はありがたかった。
「もちろん！」
二人で寝間着に着替えると、ベッドにもぐりこむ。
暖かな体温に、私はゆっくりと眠りに落ちていった。

朝起きて朝食を食べると、マーサと一緒に街を歩いた。
可愛い小物が置いてあるお店を見てまわったり、出店でおやつを買って食べたり。
公園を通ったときにはハンナ達を見かけて、みんなで走りまわって遊んだりすることもあった。
疲れたら宿に戻ってマーサに字や計算を教えてもらった。
毎日私に付き合って、マーサはちゃんと休めているのだろうか？心配になってそう聞いたけど、十分楽しいから大丈夫だと笑って答えてくれた。
穏やかな時間の中で、それでも私の中でオリヴィアの存在は大きく、少しも色あせる事がなかった。
金茶色の髪が人ごみで揺れるたび、真っ青な空を見上げるたびに、オリヴィアを思い出しては苦しくなる。立ち止まって、俯いてしまう。
それは憎しみであり、恐怖であり、悲しみだった。
マーサはそんな私に気づいているようだったけれど、何も言わずに明るく振舞ってくれた。
もう、いっそ忘れてしまいたかった。どんなに苦しい気持ちを持っていても、過去も事実も決して変わることはないのだから。

それは、約束の一週間よりも少し早い、5日目の夕方のことだった。

自分の部屋に戻っていたマーサが来て、外に誘った。
「こんな時間から、どこに行くの？」
マーサは少し緊張しているように見えた。
「少し先にある大きな公園まで。・・・私達の休暇も、もう終わりね。」
それ以上何も言わないマーサに何となく聞きづらくて、私は黙ってマーサの後を歩いた。
公園には散歩する人たちが行き交っていたけれど、奥の広場の入り口には兵士達が立っていて、立ち入り禁止になっているようだった。
「マーサ！」
けれど、マーサは物怖じすることなく兵士達の方へと近づいていった。
仕方なくついていくと、兵士達は私達を見て頷きあい、何故か何も言わずに道を開けた。
マーサは私を振り返ると広場のほうを指差した。
「向こうに、あなたを待っている人がいるわ。行ってらっしゃい。私はここで待っているから。」
背中を押されて、奥へと追いやられる。
何のことか分からず首を傾げるけれど、マーサはそれ以上説明する気はないようだった。

不安に思いながらも先に進むと、芝生の生えた広い敷地の真ん中に背の高い人影があった。
その人は、私に気がつくと遠くから手をあげた。
「ジル？」
逆光で見えにくいけれど、ジルを見間違えるはずはなかった。
私はほっとしてジルに駆け寄った。
「こんな所まで呼び出して、すまなかった。」
ジルは謝ると、じっと私の顔を見つめた。真剣な表情に、私もジ

ルを見つめ返した。
どれくらいそうしていたのか、ジルがゆっくりと口を開いた。
「フィリス、これから話す事をよく聞いて欲しい。そして、選べ。」
ジルの手が、ゆっくりと私に差し出された。

第２０章　本当の事１

「ダーナの村まで行って、色々調べてきたんだ。」
ジルは何を言っているのだろう？
村までは馬で急いでも3日はかかる距離だ。こんな短期間で、行って戻ってこれるはずがない。
ジルは私が不審に思っていることに気づいているだろうに、その事に関して説明はしてくれなかった。
「あの時オリヴィアに何を言われたのかは分からないけど、フィリスは自分の事で何か言われて怒るような事はしないだろう？だから、よほど親しい人の事で何か言われたんじゃないかと思ったんだ。村ではオリヴィア以外に親しい人はいないと聞いていたから、フィリスがそこまで怒るのは、亡くなったご両親か祖母の事である可能性が高い。マーサの事だと、後から本人の耳に入る危険もあるしな。」
驚く私に、ジルは少しだけ心配そうな顔をして、けれどすぐに無表情に近い真剣な顔に戻って話を続けた。
「何人かから話を聞けたよ。おそらく、オリヴィアも知らないだろう事も。」
心臓の鼓動が早くなって、おろした両手を握り締める。緊張からか、手の先は冷たくなっていた。
「聞きたいか？・・・事実は今よりももっとフィリスを傷つけるだろう。もしかしたら、立ち直れないほどの傷になるかも知れない。それでも、知りたいと思うか？」
「私、は・・・・・。」
小さくこぼれた声に、ジルは少しだけ表情を緩めた。
「もし怖ければ、無理に聞かなくてもいい。フィリスが望むなら、今俺と話した記憶は消す事もできる。そうして心が癒えるように、何も聞かなかった事にして新しい生活を送ればいい。」

それは、魅力的な提案だった。
これ以上傷つくと分かっているのなら。何も聞かなかったことにして、オリヴィアから受けた傷を上から綺麗に隠して、新しい生活を送る。
それで十分じゃないだろうか？
わざわざ自分から傷つく必要なんてない。
・・・でも、それで本当にいいの？
「フィリス、お前には事実を知る権利がある。けど権利は義務じゃない。どちらを選んでもいいんだ。どちらの選択肢も間違いじゃない。お前がこの先、望む方を選べばいい。」

傷つきたくないという思いと、真相を知りたいという思いが私の中でせめぎあった。
それは一瞬だったかもしれないし、長い時間だったかも知れない。
私の頭の中を、色んな人の顔が浮かんでは消えていった。
マーサや亡くなった祖母や、私の目を綺麗だと言ってくれたおばさん。それに、飴をくれたおじさんの顔も、何故だかはっきりと思い出せた。
他にも、私に優しくしてくれた人たちの顔が浮かんでは、心の中に暖かい何かを落として消えていった。
・・・どんなに綺麗に隠しても、心の奥深くに刻まれた傷はふとした時に痛み、その存在を私に思い知らせるだろう。
この先もずっと怯えて暮らすのは嫌だった。そんな自分の姿を、私を励ましてくれた人達に見せ続けるのは、酷く情けないと思った。
握り締めていた手から、力が抜ける。
「私、逃げたくない。ちゃんと向き合いたい。」
自然と出た言葉に、こわばっていた体の緊張が取れた気がした。
心にわきあがる強い気持ちが、その答えが自分にとって正解なのだと教えてくれた。
「みんなと一緒に、心から笑いたい。」

だからもう、過去から逃げるのは終わりにする。
「ジル。私、本当の事が知りたい。」
はっきりと口に出して、差し出された手に自分の手をのせた。
その瞬間、ジルは今まで見たこともないくらい、嬉しそうな顔で笑った。
「フィリスなら、真実を選ぶと思っていた。・・・約束しよう。俺はこれから先、フィリスには決して嘘はつかない。」
その笑顔に見とれていると、ジルの輪郭が淡くぼやけた。
瞬きの間に現れた姿に、私は自分の目を疑った。
全身を覆う黒い鱗。人一人くらい簡単に入ってしまいそうな大きな口からは、鋭い牙が少しだけ見えていた。
バサリと伸ばすように広げた翼が、あたり一面に大きな影を落とす。
その姿を見て、唐突に祖母が幼い頃によく読んでくれたおとぎ話の表紙の絵を思い出した。
「怖いか？」
聞こえる声は、ジルのものよりも少し低い。
「・・・・・ジル？」
恐る恐る問いかけると、はるか頭上にある金色の目が細められた。
「そうだ。どうして俺がこの短期間でダーナの村まで行って帰ってこられたか、これで分かっただろう？」
ジルは人間じゃなくて竜だったの？
「俺の本当の名はジークベルトだ。人の姿をとっているときは、ジルという名前を使っている。」
ジークベルト・・・。その名前は、この大陸に住んでいるのならば3歳の子供でも知っているだろう。
「竜王、様？」
パニックになる頭が、寂しそうな色をした金色の目に少しだけ冷静になった。

「確かに、俺は竜王だ。けど、ジルでもある。」
その声もどこか沈んでいて、私は宙ぶらりんになった手を上の方へと差し出した。
「・・・じゃあ、これからもジルって呼んでもいい？」
そう聞くと、彼は今度は嬉しそうに目を細めて、大きな頭を私の頬にすり寄せた。
口元に手を当てると、冷たいと思っていた鱗はとても温かかった。
「ああ、もちろんだ。・・・フィリス。」
両手を大きな頭に巻きつけて、目を閉じる。そうすると、言いようのない安心感が私を包んでくれた。
しばらくお互いに無言でそうしていたけれど、やがてジルが身じろぎしたので手を離した。
「暗くなってきた。場所を移動しよう。」
気がつくと、あたりは薄暗くなっていた。
「ちょっと待ってて？マーサに話してこないと。」
ずいぶん長い時間待たせてしまった事に気がついて、私は慌ててマーサが待つ場所に走り出した。
しかし、何歩か走った所で急に体が宙に浮いた。
「っ！？」
驚いて目を閉じるけど、すぐに何か温かくて硬いものの上に降ろされたのが分かって目を開いた。
「マーサなら大丈夫だ。ちゃんと兵士が送ってくれる。フィリス、しっかり掴まってろよ？」
「えっ！？」
降ろされた先は、ジルの首の根元辺りだった。ぐらりと動いた巨体に思わず首元にしがみつく。
次の瞬間、ジルの体は空へと飛び上がっていた。
村を出てから、何度も考えた。今、自分は夢を見ているだけなんじゃないかって。

けれど今ほど強くそう思った事もないだろう。
「大丈夫か？」
「・・・う、うん。なんとか・・・・。」
恐る恐る下を見ると、家がまるで玩具のように小さく見える。すごいスピードで飛んでいるような気がするけれど、不思議と振り落とされそうにはならなかった。
「・・・フィリスは、怖がらないんだな。」
「下を見ると、ちょっと怖いかな。」
正直に言うと、しばらくの無言の後、ジルが違うと呟いた。
「そうじゃなくて、俺が怖くはないのか？」
そういえば、さっきも同じ事を聞かれた気がする。
「何故？」
不思議に思って聞き返すと、ジルも不思議そうに言った。
「俺は竜だ。大きいし、強い。小さく弱い人間など、一瞬で殺す事もできる。」
ジルの言う事がおかしくて、私は思わず笑ってしまった。
「何がおかしい？」
「だって、想像できなくて。何故って聞かれると困るけど、怖いとは思わない。」
どんな姿だって、ジルであることに違いはない。
好きになった人を、見た目が変わっただけでどうして怖いと思えるだろうか？
そう考えて、あることに気付いた私は大きな溜息をついてしまった。
竜王は、花嫁候補から花嫁を選ばなければならない。ジルが竜王じゃなくても望みはなかったけれど、これで私の気持ちが報われる可能性は完全に失われてしまった。
「・・・どうした？」
心配そうな声に、私は慌てて頭を振った。それがジルには見えないことに気がついて、今度はちゃんと言葉で応えた。

「何でもない。ところで、どこまで行くの？」
「もう着くよ。」
ジルはそう言うと、ゆっくりと高度を下げていった。

ジルが降り立ったのは、城の屋上だった。
屋上は綺麗に手入れをされていて、まるで庭園のようにも見える。
乗った時と同じようにふわりと体が浮いて、下に降ろされた。降りたのはいいけれど、立ち上がろうとしたら体がふらふらと揺れて力が入らない。
「大丈夫か？」
近い場所から声が聞こえて振り返ると、人型に戻ったジルが・・・・・・いると思った場所には、予想外の人物が立っていた。
「次々と驚かせてすまないな。これは竜人の姿なんだ。フィリスが知ってるのは、母親からもらった人間の姿だ。人間の姿はほとんどの連中には秘密でね、こっちの姿でないと、自分の部屋に戻れないんだ。」
目の前で苦笑するのは、私にいつもお菓子をくれていた黒髪の彼だった。
驚いて目を見開いたままの私を困った顔で見て、ジルは手品のようにどこからか大きな布を出してきた。
「うわさ好きの奴らに見られたら、何を言われるか分からないからな。少しの間、我慢してくれるか？」
よく分からないまま頷くと、ジルは布を広げて私を頭から覆った。そしてくるくると巻くと、荷物のように肩に担ぎ上げた。
「ジル？」
体全体に伝わる体温に、心臓がうるさい音を立てる。こんなに密着していてはジルに聞こえてしまいそうで、私は焦った。
「じっとしてろよ？」
ジルはどこか楽しそうにそう言うと、どこかに向かって歩き出した。

体に伝わる動きから、階段を下りたのと何度か廊下を曲がったような感じがした。
「少し休みたいから、部屋には誰も入れないでくれ。」
「はいっ！」
動きが止まってジルの声が聞こえた後、すぐ近くで他の人の声が聞こえて私は思わずビクリとなってしまった。
ドアが開く音がして、また閉じられる。
ようやく下に降ろされて、布を取ってもらった。
「窮屈だっただろう？悪かったな。」
降ろされたのは、大人が5人は並んで寝れそうな大きなベッドの上だった。
「・・・ここが、ジルの部屋？」
天井の高い広い部屋は、きっとジルが竜の姿になってもくつろげるだろう。置かれた家具はどれも見たことないほど意匠を凝らしてあって、とても怖くて触れそうになかった。
キョロキョロと部屋を見回して、私はあることに気がついて慌ててベッドを降りようとした。
「ご、ごめんなさい！」
「うん？・・・ああ、靴か。」
靴が布団に触れないようになんとか降りようとしている私に気がついて、ジルは何でもないことのようにそう言うと、私の靴を脱がしてくれた。
「これでいいか？」
「・・・あ、ありがとう。」
竜王様に靴を脱がしてもらうなんて・・・・・・。
軽くショックを受けていると、ジルはベッドの脇においてあった水差しからコップに水を入れて、私に渡してくれた。
「どの姿がいい？この姿でも、人でも、竜でも、フィリスが話しやすい姿になるよ。」

私は少し考えて、笑った。
「どれでもいい。中身は変わらないでしょう？」
中まで別人になってしまったらそれは困るけれど、そうでないなら何も気にすることはなかった。
もちろん見慣れない姿には戸惑うけれど、きっとすぐに慣れるだろう。
ジルは嬉しそうに目を細めて頷くと、私の隣に腰を下ろした。
「さて、何から話そうか・・・。」
表情を引き締めたジルに、私も居住まいを正した。

第２１章　本当の事２

フィリスの母、フィオーネとオリヴィアの父ロディは、幼い頃からの友人だった。
大人になるにつれ、ロディはフィオーネの事を一人の女性として愛するようになったけれど、フィオーネは友人以上の感情をロディに持つことはなかった。
何度もロディのプロポーズを断っていたフィオーネは、しかしある日突然彼と結婚する事を承諾した。ロディは歓喜したが、フィオーネは喜んでいる様子ではなかった。
そのまま、誰もが二人は結婚するものだと思っていた。しかしそこで、予定外の事が起こる。
村娘の一人が、ロディの子供を宿したと言い出したのだ。
ロディは最初認めなかったが、彼女だけでなく複数の年頃の娘達の所に夜ごと通っていた事が明るみに出ると、当時の村長であったロディの父親は責任を取って身ごもった娘と結婚するように息子に命じた。
そうして生まれてきたのが、オリヴィアだった。
フィオーネを諦めきれなかったロディは何度もフィオーネに自分の愛妾にならないかと誘ったが、当然いい返事はもらえない。
そうこうしているうちに、ふらりと村にやってきた男にフィオーネはあっさりと恋に落ちてしまった。
二人はすぐに恋仲になり、フィオーネはフィリスを身ごもった。
フィオーネに子供が出来たことが分かってからは、ロディもフィオーネを諦めたようだった。
しかし自分の愛する人を奪った男を、ロディはいつまでも許すことはなかった。
結婚と同時に父親の後を継いだ彼は無理難題を言って困らせるの

はいつもの事だったし、貸す土地も痩せこけた一番不便な場所にある土地を貸した。
フィオーネやフィオーネの母も何度も村長に談判に行ったが、困らせているつもりはないといって取り合ってくれなかった。

「村長様はお母さんの事が好きだったのに、どうしてそんな事をしたの？」
痩せた土地を与えられれば、苦労するのは父だけではない。そんな事は当然分かっているだろうに。
まだ話の途中だったけど、どうしても納得できなくて話を遮った。
「人を愛するという事と、人を憎むという事は、正反対のようでいて実はとてもよく似ているんだ。自分のものにならなかったフィオーネを憎む気持ちになったとしても、おかしくはない。」
私がまだ納得できない顔でいると、ジルは手をあごに当てて少し考えてから、こう言った。
「例えばの話、フィリスが気にしていたその目の色の事を悪く言われたとして、マーサに言われるのと、見ず知らずの誰かに言われるのだったらどっちが悲しい？」
「マーサに言われたほうが、悲しいと思う。」
「そうだろう？同じ嫌なことでも、自分が好きだと思う人からされた方が悲しい気持ちは強いんだ。ロディは、フィオーネに裏切られたような気がしたんだろう。例えそれが八つ当たりだとしても、憎む気持ちを止められない時もある。」
なんとなく分かったような、分からないような・・・。
「そういう事もあるという事だ。それだけ分かっていればいい。」
ジルは私の頭をポンポンと叩くと、話を続けた。

男はなんとか家族を連れて村を出たいと考えていたが、先立つものもなく、老いたフィオーネの母と幼い娘を連れてはそれは叶わない事だった。

痩せた土地をどれだけ耕しても、得られる糧は日々なんとか生きていける程度。とても貯蓄できるほどではなかった。
そして、あの日がやってきた・・・。
それはオリヴィアの7歳の誕生日まで、あと数日という時だった。
オリヴィアはフィリスの父に、廃坑になった鉱山から宝石を採ってくるようにねだった。
彼女の我侭はいつもの事で、フィリスの父も最初は適当に誤魔化していた。
けれど、結局彼は鉱山に向かった。
ロディから、娘の頼みをきいて宝石を採って来られたら土地を増やしてやると言われたからだ。
もしかしたら、宝石が本当に見つかったら、その時はそれを持って家族で村を出るつもりだったかも知れない。
二日もあれば帰ってこれるはずの距離で、しかし彼は三日経っても帰ってはこなかった。
心配したフィオーネとフィオーネの母はロディに捜索隊を出す事を要請した。
しかし、ロディは捜索隊を出す事を拒否した。
不安と怒りで我慢できなくなったフィオーネは、幼いフィリスを母に預けて自らも山に登った。
それを知ったロディは今度こそ捜索隊を山に向かわせ自らも山に登ったが、見つけたのは岩の下敷きになって動かなくなったフィリスの父と、崖の下に落ちて息絶えたフィオーネだった。

いつの間にか流れていた涙を、暖かい手がぬぐっていく。
我侭なオリヴィアも、自分勝手すぎる村長も、それを受け入れてきた村も、何もかもが憎いとすら思う。
聞かされた事実に、胸が絞り込まれるように痛んだ。
もし村長がすぐに捜索隊を出してくれていれば、少なくとも母だけは生きていてくれただろうか。

「お母さんは、お父さんに会えなかったんだね・・・・。」
「・・・そうだな。」
「でも、オリヴィアは私の両親が二人で宝石を取りに行ったような事を言ってたけど・・・。」
ジルの手が一瞬止まって、またすぐに私の頬を撫でた。
「おそらく、後からそういう風に教えられたんだろう。すぐに捜索隊を出さなかったというのは、外聞のいい話じゃないからな。村の連中も口止めされてるだろう。」
だから、誰に聞いても知らないと言っていたのだろうか。
「結局二人が鉱山に登った詳しい経緯は村の連中には知らされなかった。それはそうだろうな。自分の娘が我侭を言ったせいで二人が死んだなんて、それこそ秘密にしておきたいだろう。ロディは、フィリスのお祖母さんにも口止めをした。お祖母さんが亡くなった後は、必ず自分の娘と同じように面倒を見ると言って。」
ジルは苦いものでも噛み潰したような顔でそう言った。
「実際はお祖母さんが亡くなったら知らん顔で通すつもりだったらしいが、オリヴィアの頼みもあって結局引き取ることにしたらしい。とても自分の娘と同じ扱いをしているようには見えなかったけどな。」
吐き捨てるような言い方をして、ジルは溜息をついた。
「これが、俺が聞いてきた話の全てだ。」
私の顔を心配そうに覗き込むジルに頷きを返すと、ジルは安心したように笑みを浮かべた。
「その話は、誰に聞いてきたの？」
祖母が亡くなって村長以外に知る人はいないだろうに、ジルは一体誰からそんな事を聞いてきたのだろう？
「地霊の何人かが教えてくれたんだ。」
「ちれい？」
そんな言葉は、はじめて聞いた。
「土地に住み着く精霊みたいな奴だ。その場所で起こったことなら、

何でも知っている。特にダーナみたいに人の手があまり入っていない場所に多くいて、帝都のように人工物で溢れかえってる所にはほとんどいない。彼らは静かな場所を好むんだ。」
「私、会った事ない。」
もちろん、会ったという話も聞いた事がなかった。
「普通の人間には見えないよ。ある程度の魔力がないとね。」
「そうなんだ・・・。」
ちょっと残念な気もする。

だんだん、頭がボーっとしてきた。
色々ありすぎて、体までぐったりと重い気がした。
「ジルは、どうして私に孤児院に行くのを待って欲しいって言ったの？」
話を聞くだけなら、どこに居ても聞けただろう。
「・・・俺は何日か会えないし、その間に孤児院に行ってすぐに仕事を見つけてしまったら、困るだろう？」
「どうして？」
早く仕事が見つかったら、それにこしたことはないと思うけど。
「戻ってきたら、フィリスにお願いしたい事があったんだ。だから、待ってもらった。」
「お願いしたい事？私でもできる？」
もっと色々気になることや聞きたいことがあるのに、もう自分が何を言ってるのかもよく分からなくなってきた。
「それは、明日話そう。」
体がそっと横たえられて、体の上に柔らかな布がかけられるのを感じた。
「今日は疲れただろう。ゆっくり眠るといい。」
優しい声に、私はすぐに意識を手放した。

目が覚めてすぐに視界に入った顔に、私は驚いて飛び起きた。

「おはよう、フィリス。昨日はよく眠れたみたいだな。」
「・・・ジル？」
確認するように、小さく呼びかけてみる。
すると、黒髪黒目の恐ろしく整った顔立ちの男は、クスリと笑って頷いた。
「気分はどうだ？」
「えっと・・・。」
やっぱり、昨日の事は夢じゃなかったみたいだ。
「ちょっと待っててくれ。」
ジルはそう言ってベッドから立ち上がると、部屋の扉を開けて外にいる誰かに声をかけた。
同じ部屋にいるのに、部屋が大きすぎて小声で話されると何を言ってるのかも聞こえなかった。
ジルはベッドに戻ってくると、さっきと同じように私の近くに腰を下ろした。
「もしかして、ジルのベッド私が取っちゃった？ジルは寝てないの？」
窓の外はもうすっかり明るい。
ジルは、昨日の夜あれからずっと起きていたのだろうか？
「竜っていう生き物は、人間のように毎日睡眠を必要としないんだ。その気になれば2、3ヶ月は平気でずっと起きていられる。」
「そうなんだ。すごいんだね。」
2ヶ月も3ヶ月も寝ないでずっと起きているなんて、想像もできない。
「もし寝ようと思ったとしても、このベッドなら俺があと3人は余裕で横になれるだろ？だから心配しなくていい。」
「・・・そうだね。」
確かにこんなに大きなベッドなら、私一人が横になっていても大して困らないだろう。
改めて部屋を見回していると、コンコンとノックの音がした。

「失礼します。朝食をお持ちしました。」
台車と一緒に入ってきたその人に、私は思わず大きな声をあげそうになる。
その口をジルが急いで手でふさいだ。
扉が閉まると、ジルはすぐに手を離してくれた。
「マーサ？」
入ってきたのは、侍女の服を着たマーサだった。
「黙っててごめんね、フィリス。・・・朝食の前に、顔を洗ってさっぱりしましょう？陛下、フィリスをお借りしますね？」
ジルが頷くと、マーサは私を隣室に連れていった。
隣室には洗面台が備え付けられていて、他に姿見などが置いてあった。
「マーサ、どうして？」
ひどく曖昧な言葉だったけど、マーサは気にすることなく答えてくれた。
「フィリスが城を追い出されたあの日に、ジルが竜王様付きの侍女にならないかって。きっとあの事がなければ、ずっと知らないままだったと思うわ。フィリスも驚いたでしょ？私も驚いたわ。っていうか腰抜かしそうになっちゃった。ジルが竜王様だったなんて・・・。話すと少し長くなるから、それはまた後でね！」
そう言ってマーサは、桶に水を溜めてくれた。
マーサが待っているので取りあえず急いで顔を洗うと、マーサはさっとタオルを出して渡してくれた。
「ありがとう。」
涙で強張っていた顔を洗うと、幾分か気持ちもすっきりした気がする。
「マーサは、昨日あれからどうしたの？」
「私？私はあれから宿を引き払って、城の兵士と一緒にこっちに戻ってきたの。」

マーサにタオルを返して、ジルのいる部屋に戻る。
「でも、ホッとした・・・。」
独り言のような言葉にマーサを振り返ると、マーサは優しい表情で笑みを浮かべていた。

第２２章　本当の事（ＳＩＤＥジル）

不必要なほどに大きなベッドの端に横たわるフィリスは、本当に疲れていたのかぐっすりと眠っていた。
それも無理はない。俺が竜王だったという事でも相当なショックだっただろうに、その後すぐに両親の死の真相を聞かされたのだ。
例え体は疲れていなくても、心にかかる負担は計り知れない。
フィリスの小さな体を見て、俺は少し反省した。
いきなり全ての事を教えるのは、早急だっただろうか？
不自然にならないようあと何日か時間を空けて、ただのジルとして話をした方が良かっただろうか？
そう考えて、俺はすぐにその考えを打ち消した。

フィリスはこれまでずっと嘘にまみれた世界で生きてきた。両親の事についてもそうだし、オリヴィアの事も・・・。
本当は嫌いな人間に優しくして、手なずけて、信頼させて、そして最後に手酷く裏切る。
それがどれほど残酷なことか、フィリスの様子を見れば一目瞭然だった。
事実はフィリスにとって、あまりにも辛すぎる。
だからもうこれ以上傷つきたくないというのなら、それでも良いと思った。
現実から目をそらして、自分の都合のいい世界で生きている人間は山ほどいる。
むしろ、全ての現実にきちんと向き合って生きている人間の方が少ないだろう。
それは一種の防衛本能であって、非難する気はもうとうない。
だがもしフィリスが事実を受け入れる覚悟があるのなら・・・そ

の時は、俺が竜王だということも伝えようと思った。
真実を伝える者が、隠し事をしていては誠意があるとは言えないだろう。
もちろん色んな事情があるのだから、どの場合にでも当てはまるとは思えない。
それでも俺はフィリスに対してだけは、誰よりも誠実でいたいと思った。
例えそれでフィリスに恐れられても、距離を置かれても、すべてをさらけ出して俺を信じて欲しかった。

フィリスは事実を受け入れる事を選んだ。
自分がさらに傷つくことに対する怖れを飲み込んで、ありのままの過去を受け入れる事を、その上で先に進む事を望んだ。
その瞳の強さに、俺は畏敬の念すら抱いた。
この子はこんなにも小さく、傷つきやすく、壊れやすいのに、その芯は頑強で決して折られる事はないのだ。
どれほど傷つき俯いてしまっていても、また顔を上げることができる。前を向く勇気を、ちゃんと持っていた。
俺の中に強い歓喜が湧き上がった。心のどこかでは、フィリスが真実を選ぶ事が分かっていたような気がした。
この子を好きになって良かったと思えた。だから、俺も覚悟を決めた。
小さな針のように刺さる不安を押し込めて、俺は竜の姿に戻った。
綺麗な緑色の目が、驚きに見開かれた。

二百年以上生きてきた中で、あの瞬間が一番緊張したのではないかと思う。
けれど戸惑うように俺に向かって伸ばされた手に、まだジルと呼んでくれる事に、俺は泣きたくなるほど安堵した。
小さな頬に顔を寄せても、フィリスは嫌がらなかった。

その事が本当に嬉しかったのだと伝えたら、フィリスは大げさだと笑うだろうか。
本来の竜の姿を見せれば、誰もがまず恐怖を顔に浮かべる。
あのガントやコンラートでさえも、初めて俺が竜の姿に戻って見せた時は言葉もなく固まっていた。
それなのに、フィリスは恐れなかった。触れた手からは、少しの震えも感じなかった。
自惚れてもいいのだろうか。自分の事を、少しは好きでいてくれているのだと。
竜の姿を見せても態度を変えないでいてくれるくらい、信頼してくれているのだと。

目が覚めたら、フィリスに頼んでみよう。
孤児院などに行かず、自分のそばに居て欲しいと。
城にだって、フィリスができる仕事はいくらでもある。マーサも一緒だと言えば、少しは前向きに考えてくれるだろうか。
そんな事を考えながら、俺はただずっとフィリスの寝顔を見つめていた。

結構早い時間に寝たにも関わらず、フィリスは朝になってもまだ起きなかった。結局起きたのは昼前で、それまで何度もうるさく俺を呼びに来ていたコンラートは最後は完全に怒っていた。
フィリスが城を追い出されてからほとんど仕事らしい仕事をしていないのに、さらに5日間も留守にしたあげく、戻ってきたと思ったら部屋に閉じこもって出てこない。
これでは怒ってしまっても仕方がないだろう。
悪いと思いながらも、どうしてもフィリスのそばを離れがたかった。

ようやく目が覚めたフィリスはどうして自分がここに居るのか分

からないような顔をしていたが、すぐに思い出した様子だった。
「フィリス、これからの事なんだけど・・・もう一度城で働いてみないか？」
少し遅い朝食を取ってマーサが退室した後、俺は考えていたことをフィリスに伝えた。
「城は広い。東の離宮には近づく事ももうないだろう。だから、その事に関しては心配しなくていいんだ。」
表情に陰りを見せたフィリスに、慌てて言い繕った。
「それが、昨日言っていたお願いしたい事？」
「そうだ。・・・俺は、フィリスにここにいて欲しい。駄目だろうか？」
答えを待ってじっと見つめると、フィリスは少し頬を赤くして、それからじっと考え込んだ。
シンとした時間が、やけに長く感じる。握り締めた手が汗ばんでいるのに気付いて、自分で自分に呆れた。
「私にもできる仕事？」
「もちろん。マーサと一緒に働いてもらうつもりだから、不安になる事はない。」
マーサも一緒にと言うとフィリスは安心した顔を見せたが、すぐには返事をせずにまた考え込んだ。
「・・・でも、どうしてそこまで私の面倒を見てくれるの？」
不思議そうに俺を見るフィリスに、俺は両手を握り締めた。
ここで、伝えるか？フィリスの事を、一人の女性として好きなのだと。
そうすれば、話は単純になる。
好きな人にそばに居て欲しい。ただそれだけの事なんだと。
「・・・フィリスと一緒にいると楽しいし、安心するんだ。だから、どうせ働くなら俺の近くで働いてくれると嬉しい。」
結局、口から出てきたのは誤魔化すような言葉だった。

今はまだ早い。俺の気持ちを伝えても、フィリスにはただの負担になってしまうだろう。
せめてもう少し、フィリスが自分の中で過去を昇華させることができたら・・・それからでも、きっと遅くはない。
「私も、ジルと一緒にいたい。」
表情をほころばせて嬉しそうに応えてくれたフィリスを、思わず抱きしめたくなる。
それを咳払いでなんとか誤魔化して、俺は最後の確認をした。
「じゃあ、俺のお願いは聞いてもらえるかな？」
フィリスは今度は考え込む事もなく、すぐに頷きを返してくれた。
「ありがとう、フィリス。」
柔らかな髪を撫でると、少しだけ恥ずかしそうに、けれど嬉しそうな笑みを浮かべてくれる。その表情に胸と顔が熱くなって、俺はすぐに顔をそむけた。
「仕事は明日からでいいから。・・・そろそろ部屋を出ようか。」
俺は昨晩と同じようにフィリスを布でくるむと、荷物のように肩にのせた。
不審に思われるだろうが、この部屋にまだ子供のような少女を連れ込んで、一晩明かしたと思われるよりははるかにましだ。
「動くなよ。」
声をかけると、フィリスが小さく頷いたのが分かった。

フィリスを担ぎ上げたまま執務室に入ると、俺を見て不機嫌そうに顔をゆがめたコンラートはすぐに訝しげに眉を潜めた。
「その荷物はなんです？」
俺は後ろでしっかりと扉が閉められたのを確認して、フィリスを降ろした。
そっと布を剥がすと、驚いた顔のコンラートとフィリスの視線がばっちり合った。
「・・・陛下、とうとう犯罪を・・・。」

「犯してない。フィリス、彼はコンラートだ。一応この国の宰相をやってる。」
「一応は余計ですが。そうですか、あなたが・・・私はコンラートと申します。以後、お見知りおきを。」
「は、はじめまして、フィリスです。」
緊張なのか裏返った声に、つい笑ってしまった。
恥ずかしそうに頬を染めたフィリスににらまれても全く怖くないが、機嫌を損ねないように急いで笑いを引っ込める。
「侍女の服を用意してくれ。マーサに預ける。」
「わかりました。」
コンラートは返事を返すと、席を立って部屋を出た。
「マーサを呼ぶから、目立たないように着替えて一緒に部屋を出るといい。」
フィリスは頷くと、もの珍しそうに部屋を見回した。
「ここは？」
「執務室だ。仕事部屋みたいなもんだな。」
あちこちをさまよっていたフィリスの視線が、ふとある一点で止まった。
俺が壊した机はすぐに真新しいものと取り替えられ、机上にはコンラートが置いたのであろう大量の書類がつまれていた。
机の端のペン立てに、明らかにこの部屋には不似合いなシンプルな万年筆が立てられている。
高級そうなペン立てに立てられていると、ひどく違和感があった。
その隣には少しだけ減った飴が入った小瓶が置かれていた。
どちらも、フィリスにもらった宝物だ。
「これ、使ってくれてるんだね。」
少しはにかみながら万年筆を手に取ったフィリスは、隣の小瓶をじっと見て黙り込んだ。
「フィリス？」
声を掛けても、返事は返ってこなかった。

「陛下、よろしいですか？」
もう一度問いかけようとしたとき、ちょうどコンラートがマーサを連れて戻ってきた。
「ああ。何度も呼びつけて悪いな、マーサ。フィリスを目立たないようにここから出してやってくれ。」
マーサはフィリスをチラリと見ると、安心させるように笑みを見せて、すぐに俺に視線を戻した。
マーサはフィリスの事を本当に妹のように可愛がっている。そういう意味では、フィリスを預けるのに一番信頼できる人間だ。
「どちらにお連れしましょうか？」
「そうだな、取り合えずまたマーサの部屋に連れて行ってやってくれ。明日までにはフィリスの部屋も用意しておくよ。」
マーサは頷くと、フィリスを促して隣の部屋に着替えに行った。

「これでしばらくは、政務に集中していただけるでしょうね？」
「・・・悪かったよ。」
いつも城を留守にするときは、極力仕事は前倒しで片付けてしまってから出かけていた。
今度の事は突発的だった事もあって、仕事の方はコンラートにまる投げにしてしまった。
「そこに積み上げてあるのが急ぎの案件です。まず、それを片付けていただきましょうか。」
「あ、ああ。分かった。」
怒っているときのコンラートには、とにかく逆らわない方がいい。
俺は机に積み上げられた書類の山に、溜息を付きたくなった。

閑話１（ＳＩＤＥマーサ）

私が城に侍女として雇われたのは、今から４年ほど前のことだ。
最初は雑用しかやらせてもらえなかったが、１年経つ頃には真面目な勤務態度が認められて、毎年各地から来る竜王様の花嫁候補達の世話係を任せられるようになった。
身分を問わず、とはいえ、やはり選ばれてやってくるのは大抵高い身分か金持ちのお嬢様で、今回のオリヴィアのように本当になんの後ろ盾もない女性が選ばれる事はめったにない。
妖艶な美女から人形のように愛らしい少女まで、その容姿はみな飛びぬけていたが、正直な感想として中身はみんな似たり寄ったりだった。
彼女達は自分達を選ばれた特別な人間だと思っていた。そして竜王の愛を得る事は、自分が世界で最も素晴らしい女性だと世界に認められることだと考えている。
もちろん彼女達が自分でそんな事を言うはずはないが、そう思っている事は言葉の端々から感じられるのだ。
その点、オリヴィアは素晴らしい女性だと思っていた。
謙虚で奥ゆかしく、周囲への気遣いを怠らずいつも優しく微笑んでいる。
辺境の村で生まれ育ったというのに粗野な感じは全く感じられず、初めて会った時は本当にオリヴィアを眩しく感じたのだ。
漠然と、この人を竜王様の元へ連れて行けば、もしかしたら来年から自分の仕事はなくなるのかも知れないと思った。
これまでどんな美女にも振り向きもしなかった竜王様も、こんな人なら目を向けるかも知れないと。
同郷のはずのフィリスと仲が悪いのが気になったけど、それは一

時的なものだと思っていた。
フィリスは誰から見ても一途にオリヴィアを慕っていたし、思春期の少女が揃えば時にはすれ違って関係がぎこちなくなることも珍しくない。
あくまでも一時的なことで、時間が解決してくれるだろうと思っていた。
けれど、私は何も分かっていなかった。

フィリスが城を追い出されたあの日、私はオリヴィアに問い詰めた。
ただ言葉の使い方を注意をしただけで、フィリスがオリヴィアを叩くとはとても思えなかった。
フィリスはジルが村から連れてきた子供だった。
最初は無知で作法も何も知らないような子が城にあがるなんて、無謀すぎると思っていた。
けれどフィリスはとにかく努力家で、仕事もすぐに覚えていった。
自分に自信がなく、いつもどこかオドオドとして大人しい彼女だが、その分周囲の者に寄せる好意や信頼には目を見張るものがあった。
オリヴィアが青いバラの花を探してくるように頼んだ時も、彼女はそれが庭園のどこかにあることを欠片ほども疑っていないようだった。
少し考えれば、フィリスを自分の近くから遠ざけるための嘘だと誰でも気付くはずなのに。
そんな彼女が、注意されたなんてくだらない理由で怒るはずがない。

私が問い詰めても、オリヴィアはただ悲しそうな、どこか気丈に振舞った様子で微笑むだけだった。
とても嘘をついているようには見えなくて、私のかわりに付いて

いてくれた侍女もしきりにオリヴィアに同情していた。
けれど、私は見てしまった。
部屋の端の倒れたくず入れから、どこかで見たことのある便箋が顔を覗かせていた。
それは一度も封を切られることなく、いびつに捻じ曲げられている。
フィリスが初めてもらったお給料で、オリヴィアのために買ってきたものだった。
怒りがこみ上げてくるのと同時に、理解した。
オリヴィアは、天使でもなんでもない。今まで見てきた他の花嫁候補と同じ、間違いなく表も裏もあるただの『人間』だった。
フィリスとどんな確執があるのかは知らないが、オリヴィアに好意しか持っていなかったフィリスに対して、この仕打ちはあまりにも酷い。
今までオリヴィアに仕えてきた自分が急に愚かしくなった。
オリヴィアという人物を正しく捉えきれていなかった自分の見る目のなさが、ただ情けなかった。
そしてここまで完璧に猫の皮を被れるオリヴィアが、心底怖いと思った。

私はオリヴィアに話を聞くことを諦め、離宮を警備している警備兵に話を聞きに行った。
昼の番を終えて詰め所に戻っていた彼女達のところまで行って、最初は冷静に話していた。
けれどお互い主張を受け入れられない事にヒートアップしてきて、それが収まったのは近衛隊隊長のガント様が詰め所に入ってきて私達を一喝したからだった。
騒ぎを見かねて、誰かが呼んできたらしい。
おかげで冷静になった私は、ようやくあることに気付いて蒼白になった。

もう日が暮れる。
フィリスは何ももたず、身一つで城を出されたという。
お金の使い方一つ知らなかったあの子が、夜の街をフラフラとさ迷っていたら一体どんな目に会うか・・・。
本来なら気軽に声をかけることなど許されないが、私はとっさにガント様に助けを求めた。

それから起こった事は、私の人生の中でも一番強烈だった。
竜王様と直接言葉を交わし、分厚い木の机が手で叩き壊されるというあり得ない光景を見て、極め付けに今まで軽口を叩き合っていたジルが竜王その人だったと知らされた。
頭が真っ白になってこれは夢だと思いたくなったが、フィリスの事を思い出してなんとか現実に戻ってきた。

オルグと一緒に真夜中までフィリスを探してまわったけれど、結局フィリスは見つからなかった。
不安なまま夜を過ごして、朝を迎えた。
これだけ大規模な捜索を行っても見つからないというのは、何かあったとしか考えられなかった。
フィリスの無事を知ったのは、お昼少し前くらいだった。
安心してオルグの前で泣き出してしまった事は、誰にも内緒だ。

夜になって竜王様に呼び出された私は、フィリスの居場所と状態を教えてもらった。
顔にはわずかに疲労の色が見られたが、無事を確認できたからか落ち着いているようだった。
「こんな事があった後だし、もうオリヴィアに仕えるのは難しいだろう。離宮を離れて本館の方で働くといい。」
確かに、あれだけ騒いだ後で離宮で働くのは気が引けた。
何よりも私自身が、もうオリヴィアの事を信用できなくなってい

る。
オリヴィアにしても、フィリスの味方ばかりする私がそばに居るのは気に入らないだろう。
「ご配慮に感謝します、陛下。」
深く頭を下げると、大きな溜息を付かれた。
「いまさら畏まらないでくれ、やりにくい。せめてガントやコンラートしかいない時は、今までと同じ様に話してくれないか？」
「それは出来ません、陛下。・・・ですがせっかくのお言葉ですので、フィリスの事に関してはこれまで通り遠慮なくご相談させて頂きますね。」
床についていた膝を立てて顔を上げると、ジルはそれでいいというように頷いた。
これまで通り、と言われても、竜王陛下に対してこれまでのような軽い態度はとても取れない。
今まで口にしてきたあれこれを思い出すだけで、眩暈すら覚えるというのに。
けれどそれを変えることで彼が傷つくというのであれば、その言葉に甘えて少し態度を崩すくらいはかまわないだろう。
「率直にお聞きしますが、あの子をこれからどうなさるおつもりですか？」
少し差し出がましいかと思ったけれど、どうしても気になって聞いてしまった。
彼がフィリスに好意を持っている事は、見ていれば分かる。
フィリスを見る時の彼の目は慈愛に満ちているが、時折それが眩しいものを見るかのように細められる事を私は知っていた。
城に着くまでの旅の間も、彼は絶対にフィリスを他の者の馬には乗せなかった。
それが独占欲であることに気付いていないのは、当事者である二人だけ。
ましてフィリスがいなくなったと知った時の彼のあの様子を見れ

ば、もう疑いようがないだろう。
「・・・できれば、また城で働いてもらいたいと思っている。まだフィリスの意思を確認していないんだ。その前に調べたい事もあるしな。」
そう言って、彼は宰相閣下の方をチラリと見た。
「・・・また出かけられますか？」
「悪いな。遅くても一週間くらいで戻ってくると思う。」
「分かりました。調整しておきます。」
「お前がそうあっさり納得してくれると、何かあるのかと思ってしまうよ。」
訝しげに眉をひそめる彼に、宰相閣下は苦笑を返した。
「優先順位というものがありますので。」
宰相閣下は、優雅に礼をして執務室を出て行った。ジルは不思議そうにそれを見送っていた。

竜王の花嫁となる者は、竜王が選んだ者。
そして、その者は既に選ばれた。
竜という生き物は、人間や他の動物のように簡単に恋をしたりやめたりする事はない。
生涯にただ一人だけのつがいを持ち、愛し続ける。
愛が実らなければ、死ぬまで独身という竜も珍しくない。
ジルが選んだのはフィリスだ。
あの子と結ばれなければ、ジルはおそらくもう花嫁を選ばないだろう。
竜王に人間の花嫁を与える事ができなければ、盟約は破られる。
エストアは、王を失ってしまう。
それだけは、何をおいても防がなくてはならない。
核となる存在を失ったこの大陸がどうなるのか。恐ろしくて想像もしたくなかった。
エストアの宰相である彼は、誰よりも強くそう思っているのだろ

う。

フィリス自身はどうだろう？ジルの事が好きなのは知っているけれど、彼が竜王だと知ってもまだ好きでいられるだろうか。

中身は一緒でも彼には他に2つも違う姿があるし、さらにそのうちの1つは人間ですらないのだ。

「マーサには、俺が留守の間フィリスの面倒を見てやって欲しいんだ。かなりまいってるみたいだから、気分転換させてやってくれ。」

「おまかせ下さい。」

フィリスを大切に思っているのは、私も同じだ。

再会したフィリスは、ずいぶんとやつれているように見えた。

私とおしゃべりをしたり散歩している時は元気そうに見えるけど、時折溜息をついたりじっと何かを考え込んだり。

そんな時は辛そうに唇をかみ締めている時もあって、いたたまれなかった。

城の使いが来た時は、正直肩の荷が降りた気がした。

フィリスを心から元気付けてあげられるのは、結局ジルしかいないと思ったからだ。

ジルの待つ公園の奥へと連れて行き、そっと背中を押してやる。

ジルを見つけたフィリスは、引き寄せられるようにジルに向かって走っていった。

その時に見た光景を、私はきっと一生忘れないだろう。

鮮やかな夕焼けのオレンジ色の光の中、漆黒の竜が姿を現す。

その大きな姿に向かって、少女の細く小さな手が伸ばされた。

万物の長であり、全てを知り全てを統べる者。

その存在が一人の少女に頭をたれるその瞬間を、その場にいたすべての者が言葉もなく見入っていた。

第２３章　迷子

再び城で働くようになって数日が経ち、私は今まで遭遇したことのない問題に直面していた。
洗濯の終わったシーツを、来客用の部屋に持っていく途中だった。
「えっと・・・確か突き当たりを右に曲がった奥の階段を上った所だったよね・・・。」
何度か通ったことのあるはずの道だし、来る前にもちゃんと場所を説明してもらってきたのに・・・。
右に曲がった奥は、行き止まりだった。
しばらく考えて、もと来た道を戻ってみる。少し遅くなるけど、仕方がない。
最初の場所に戻って、もう一度教えられた通りに行ってみよう。
「あれ？こんな所あったっけ？」
戻ったはずなのに、見たことのない気がする廊下に出てしまった。
それに、こんなに歩いた記憶もない。
「どうしよう・・・。」
迷子という2文字が、脳裏をかすめていった。
竜王の住むこの城は、とにかく広い。ここに比べれば、東の離宮など猫の額のような広さしかなかったと思う。
ジルが以前言っていた通り、本当に村ほどの大きさがあるのだ。
しかも城はいくつもの分かれた建物で構成されていて、似たような造りになっているから慣れないと区別もつかない。
中も入りくんでいて、まるで迷路のようだった。
こうなったら、誰かに道を聞いて戻るしかない。
私はシーツを持ったままあたりを見回した。けれど廊下には似たような扉が並んでいるだけで、人影もなければ足音一つ聞こえない。
しばらくウロウロと歩き回って、ようやくほかの侍女とすれ違った。

「あ、あの、すいません！」
振り返った彼女は、私を見て首をかしげた。
「あの、客間に行きたいんですけど、道が分からなくなってしまって・・・。」
「あなた、最近城にあがったのかしら？」
頷くと、彼女は納得したようにうんうんと頷いた。
「似たような廊下ばっかりだから、なかなか覚えるの大変なのよね。客間は南側の棟にあるのよ。一緒に行きましょう？」
「すいません、ありがとうございます。」
行き方を聞いてもまた迷ってしまいそうで、私は素直に彼女に連れて行ってもらうことにした。
「ちょうど私もあっちに行く所だし、気にしないで？」
もう一度お礼を言おうと口を開いた所で、目の前の背中が急停止した。
「陛下がお通りになるわ。」
小声でそう言って、彼女はすばやく廊下の端に身を寄せた。
それにならって、私も同じように彼女の隣に並んだ。
彼女の視線を辿ると、ちょうどジルが宰相様と一緒に廊下を曲がってくるところだった。
姿を見れたのは一瞬で、隣で彼女が深く頭を下げたので慌てて私も頭を下げた。
二人の足音はすぐ近くで一度やんだけれど、すぐにまた歩き出して目の前を通り過ぎていった。
十分足音が小さくなったのを確認して、顔を上げる。
二人の姿は、もう見えなくなっていた。
「ラッキーだったわね！陛下とすれ違うことなんて、めったにないのよ？」
興奮気味の言葉に曖昧に笑って、せっかく会えたのに一言も言葉を交わせなかった落胆を隠した。
けれど、これが本来の距離なのだ。そう自分を納得させて、歩き

出した彼女についていった。

「先に客間に行ったはずなのになかなか来ないから心配していたの。メイ、連れてきてくれてありがとうね。」

客間に着くと、中にいたマーサが迎えてくれた。

「どういたしまして！マーサ、せっかくこっちの仕事に戻ってきたんだもの。今度また一緒に食事でもどう？」

どうやら、彼女はマーサの知り合いのようだった。

「ええ、もちろん！」

「じゃあ、またね。」

「あの、ありがとうございました。」

部屋を出て行くメイさんに慌ててお礼を言うと、彼女は笑って手を振ってくれた。

「彼女は私と同期なの。」

「ドウキ？」

「同じ時期に同じ職場に入った仲間ってこと。フィリス、そっちを持って？」

私が持ってきたシーツを一枚取って、ベッドの上に広げた。

ベッドメイキングが終わると、マーサが持ってきた掃除用具と残ったシーツを持って、また隣の客間に移る。

「私達は基本的にはこの棟での仕事しかしないから、渡り廊下を渡っちゃだめなのよ。確実に迷子になるわよ？」

渡り廊下なんて渡っただろうか？思い返してみるが、よく分からなかった。

「まあ、そのうち慣れるでしょう。」

私が分かっていないことが分かったのか、マーサは苦笑してそう言った。

以前と同じように、私の部屋はマーサの隣に用意された。

一日の仕事を終えるとマーサと一緒に部屋に戻って、着替えるとすぐに眠ってしまう。
今日も同じようにマーサとお休みの挨拶をかわして部屋に入った。
「お疲れ様。」
誰もいないはずの部屋から突然声が聞こえて、思わず悲鳴を上げそうになった。
大きく開けた口を、顔全体を覆えるほど大きな手にふさがれて心臓が止まりそうなる。
「フィリス、俺だよ。」
目の前に現れた顔に、強張っていた体から一気に力が抜けた。
「ごめん、大きな声を出されるとまずいと思って・・・。」
私が落ち着いたのを確認して、口をふさいでいた手をそっとはなされる。
「ジル？」
名前を呼ぶと、薄茶色の目が嬉しそうに細められた。
ジルは私の後ろの扉がしっかりと閉じられたのを確認して、私を部屋の奥に入れた。
「今日、すれ違っただろ？どうしてあんな所に？」
「えっと・・・。」
少し恥ずかしく思いながらも、私は建物の中で迷ってしまった事を話した。
「なるほどな。確かに、慣れない者にはこの城は歩きにくいだろうな・・・。」
そう言って、ジルは何か考え込むようにしばらく黙り込んだ。
もしかして、それで心配してわざわざ部屋まで来てくれたのだろうか？
「仕事の方はやっていけそうか？」
「うん。マーサも一緒だし、仕事もジルが言ったとおり難しくないし、全然大丈夫！」
そう言うと、ジルは満足そうに頷いた。

「もうすぐ夏至祭が始まるから、しばらく俺もフィリスも忙しくなるだろう。でも、出来るだけ時間を取って会えるようにするから。」
スッと頬を撫でられて、心臓が大きく音を立てた。
熱くなった顔を隠すように俯いて、頬を押さえる。
「また部屋に会いに来てもいいか？」
まだ顔を上げれないまま頷くと、ジルの大きな手が私の頭を撫でていった。
「・・・もう少し、ここにいてもいいかな？」
「うん・・・。」
もちろん、断る理由は何もなかった。

それから二人でベッドに腰掛けて、しばらくたわいのない話をした。
今こうしていても、本当なら私なんて、ジルに話しかけるどころか顔をまともに見ることすらできない存在なのだ。
「ジル、聞いてもいい？」
ものすごく今更なことだけど、聞いてみたい。
ジルはどうぞというように、黙って先を促した。
「私、こんな風にジルと話してるけど、いいのかな？」
「こんな風に？」
「だって、ジルは竜王さまで私は一般庶民でしょう？本当はこんな風に話しかけたりしたらいけないんだよね？」
前はジルは自分が竜王だという事を隠していたけれど、今は私はそれを知っている。知っているのに態度を変えないということは、不敬にはならないのだろうか？
「・・・今更な気もするけど、かまわないよ。外では仕方がないとしても、二人のときに態度を変えられたらその方が傷つく。」
本当に傷ついたような顔をするジルに、慌てて手を振った。
「ごめんね？一応聞いてみたかっただけなの。」
そう言うと、ジルは安心したように微笑んだ。

「さっき言ってた夏至祭って、どんなお祭りなの？」
話題を変えたくて、さっき聞き流してしまっていた夏至祭の話を持ち出した。
「夏至を挟んで前後3日間、城で開かれるんだ。各国から要人が集まるから、迎えるための準備が大変なんだ。」
「3日も？大きなお祭りなんだね。」
ジルは少し目を見開くと、おかしそうにクスリと笑った。
「まあ、そうだな。・・・少し長居をしすぎたな。そろそろ休んだ方がいい。」
そう言って立ち上がったジルに寂しさを覚えたけれど、忙しいジルを引き止めることはできない。
「お休みフィリス、また来るよ。」
「ジル、お休みなさい。」
挨拶をかわすと、ジルはドアではなく窓のほうに足を向けた。
「ジル？」
「この階は侍女しかいないからな。男が出入りしているのが見つかったら、まずいだろ？」
いたずらっぽい顔でそう言って、ジルは窓から外に出た。
あまりにも自然に出て行ったから思わず見送ってしまったけれど、すぐにここが3階だという事を思い出して慌てて窓から下をのぞいた。
ジルはなんともない顔で私を見上げると、手を上げてその場を歩き去った。

その翌日の夜、ジルは再び私の部屋を訪れた。
「お守りだ。」
そう言って渡されたのは、先端に小さな黒い石が飾られたシンプルな首飾りだった。
「お守り？」
「そう。もしまた迷子になったり、自分では対処できないような困

った事があったら、この石にお願いしてみるといい。」
ジルは一度受け取った私の手からそれを取って、私につけてくれた。
「お願いするの？石に？」
「こうして、握り締めるんだ。」
私の手を取って石に触れさせると、そのまま私の手の上からギュッと石を握り締めた。
「こうすると、どうなるの？」
その問いには答えず、しばらく真剣な表情で私の手を包み込んでいたジルは、ふっと表情をゆるめて微笑んだ。
「気休め程度のものだけど、もしよかったらずっと付けていてくれないか？こうしておけば、仕事中付けていても分からないだろう。」
そう言って、ジルは石を私の首もとにすべりこませた。確かに、こうしていれば付けていても外からは見えない。
「ありがとう、ジル。」
昨日迷子になった話をしたから、わざわざこんなものを用意してくれたのだろうか？
ちょっと心配性すぎる気もするけど、その気持ちは私の胸をじんわりと暖めてくれた。
心からお礼を言うと、ジルも嬉しそうに微笑んだ。
その後、またしばらく話をしてからジルは部屋を出て行った。

もらった首飾りをよく見たくて外そうとした時、私はある事に気付いた。
「・・・どうやって外すのかな・・・」
こんなものを付けた事のない私には、外し方が分からなかった。
しばらくチェーンをなぞっていたけれど、どこで止めているのかさっぱり分からない。
私は外すのを諦めて、寝間着に着替えてベッドに横になった。
外し方は、明日マーサに教えてもらおう。

そんな事を考えながら、私はゆっくりと目を閉じた。

第２４章　お守り１

ジルに首飾りをもらった次の日、私は仕事を終えて部屋に戻るマーサを引き止めた。
「マーサ、教えて欲しい事があるんだけど、少しだけいい？」
疲れている所申し訳ないとは思ったけれど、今以外に聞く時間がなかった。
朝は起きたらすぐに仕事に行かなければならないし、日中は人の目も気になった。
「もちろん。こっちに来る？」
「うん。ありがとう、マーサ。」
開かれたドアから中に入ると、すぐに灯りがつけられた。
「座って待ってて？今お茶をいれるわね。」
「あ、でもすぐ済むと思うから・・・。」
「久しぶりなんだから、少しくらいゆっくりしていっても構わないでしょう？」
そう言われれば、断る理由もなかった。
「えっと、じゃあ、お邪魔します。」
マーサが置いてくれたクッションの上に座り、部屋を見回した。
部屋の形こそ違うものの、カーテンや絨毯は離宮で使っていたものと同じもののようだった。

「それで、教えて欲しい事って？」
受け取ったお茶をこぼさないように隣に置いて、服の中から首飾りを取り出した。
「これなんだけど・・・」
首飾りを見て驚いた顔になったマーサは、ジルにもらった経緯を伝えると納得したようだった。
「会う暇がないって言っても、女性の寝室に忍び込むのはどうかし

らね。見せてもらってもいい？」
苦笑したマーサは、手を伸ばして黒い石を手に取った。
「何の石かしらね？すごく綺麗だけど・・・。」
「これ、どうやって外せばいいの？」
本題を口にすると、マーサは首を傾げた。
「外したいの？」
「今はいいんだけど、外したくなった時に困ると思って。」
「確かに、いざっていう時困るもんね。私も初めて首飾りを付けた時は、外すのに一苦労したわ。」
マーサは首の周りでチェーンをクルクル回した。
すぐに止まると思っていたその手はなかなか止まらず、チェーンが首の周りを5周ほどした所でようやく止まった。
「・・・フィリス、これをあなたに付けたのはジル？その時、お守りだって事以外に何か言ってた？」
眉を寄せるマーサに、何かまずいことでもあるのだろうかと昨日のやり取りを思い出す。
「他には特に・・・ずっと付けてて欲しいってことくらいかな？」
「ずっと、ねぇ・・・・・・それで、フィリスはそれでいいって言ったの？」
頷くと、マーサは首飾りから手を離して自分のお茶を手に取った。
「それ、留め金がないのよ。多分魔術か何かでとめたんだと思うわ。もし外したくなったら、ジルに直接頼むしかないわね。」
「・・・そうなんだ。」
それなら、仕方がない。外したくなるようないざという時なんてそう簡単にこないと思うし、特に問題ないだろう。
「ジルは本当にあなたの事が大切なのね。」
しみじみと呟かれた言葉に、一気に頬が熱くなった。
「た、たぶん妹みたいに思ってくれてるのかな？」
動揺を隠し切れない声でそう言うと、マーサはポカン口を開けた。
竜王様に対して、図々しすぎただろうか？そう考えて、私は慌て

て言葉を継ぎ足した。
「あ、あの、ここに連れて来た責任とか、感じてたりするのかも！」
ジルは優しいから、責任を感じていても不思議ではない。
さっきよりは当たり障りのない事を言えたはずなのに、マーサはの目と口はさらに大きく開いてしまった。
今の言葉のどこがまずかったのか分からず、私も黙り込んでしまう。
「それ、本気でそう思ってるの？」
「えっと、一緒にいると楽しいって言ってくれたし・・・妹くらいには好意を持ってくれてるんじゃないかなって・・・ごめんなさい。」
最後の方は消え入るような声で言うと、マーサは大きく溜め息をついた。
呆れられてしまっただろうか。
「バカね、なんで謝るのよ。フィリスって、本当に鈍感なのね。それとも経験不足なせいかしら・・・フィリス、あなたって今いくつだっけ？今まで誰かを好きになった事は？」
何を鈍感だと言われているのか分からないまま、質問に答える。
「１４。好きな人とかは今まで特にいなかったけど・・・。」
「若い！っていうか子供？じゃあ、ジルが初恋なんだ？」
改めて言われると恥ずかしい。少しぬるくなったお茶を飲んで、そのまま俯いた。

「・・・フィリスは、変わらないのね。」
独り言のような呟きに顔を上げると、マーサが複雑そうな顔で私を見ていた。
「ジルが竜の姿になるのを見て、ショックじゃなかった？」
「それは、確かに驚いたけど・・・」
「けど？」
「でも、竜の姿もかっこいいし・・・」

思い切って口に出すと、マーサは一瞬驚いた顔をして、それから声を出して笑った。
「それなら良かった。何も問題ないわね。」
「何の問題？」
たずねると、マーサは視線をさ迷わせた。
「まあ、気にしないで？それより、告白とかしないの？」
誤魔化すように早口で言われた言葉の意味を理解するのに、しばらく時間が必要だった。
「私がジルにってことだよね？」
うんうんと頷くマーサの目は、何故か期待に満ちていた。楽しそうなマーサには申し訳ないと思いながら、私は頭を振った。
確かに、城を追い出されたあの時、告白しておけば良かったとすごく後悔した。
けれどそれは今になってみれば、後がなくなったからこそそう思えたのだと思う。たまにでも会って会話をすることができる今、関係を壊してまで気持ちを伝えたいとはとても思えない。
ジルは優しいから、もしかしたら告白してもあからさまに避けたりすることはしないかも知れない。
けれど、これまでの気安い関係のままではいられなくなってしまう。
私は、ジルとの穏やかな時間をどうしても手放したくなかった。それが例え、彼が花嫁を選ぶまでの間だけだとしても・・・。
「何か悩んでる事があるなら、いつでも相談にのるわよ？」
暗い顔になった私を見て、マーサは心配そうにそう言った。
「ありがとう、マーサ。でも今はとにかく、早く一人前の仕事ができるようになりたいの。せっかくジルが仕事を紹介してくれたんだから、頑張らなきゃね。」
「・・・そうね。それじゃあ、そろそろ休みましょうか。フィリス、久しぶりに一緒に寝る？」
マーサの誘いに、私は大きく頷いた。

数日後、城のそれぞれの棟で侍女達の集会が行われた。
２週間後に迫った夏至祭の準備のために、何チームかに分かれて役割を分担するのだそうだ。
もちろん私はマーサと同じチームでマーサはチームのリーダーに選ばれた。
他にも城を警護する近衛隊や、料理人達の中でも同じようにチーム分けされ、夏至祭の準備を行うのだそうだ。
毎朝チームごとに朝会が行われ、一日の仕事をリーダーから割り振られる。
夏至祭というのはとても大きなイベントらしく、日が経つにつれてみんなが神経を尖らせていくのが肌で感じられるほどだった。
「フィリス、あなたまだまだ元気そうね？やっぱり若さのせいかしら。」
同じチームになった侍女にそう言われて、私は笑みを返した。
「みんなでひとつの事に向かって頑張るのって、なんか楽しいから。」
そう言うと、彼女は少し驚いた顔をして黙り込んだ。不謹慎だっただろうかと不安になったけど、すぐに彼女は表情をゆるめてくれた。
「そうね。・・・ありがと、フィリス。」
何に対するお礼なのか分からずに首を傾げると、彼女は小さく笑って仕事に戻っていった。
私たちのチームは、客間と客間のある棟全体の清掃が主な仕事だった。通常とちがってほぼすべての客間が埋まるので、仕事量はかなりのものだった。
エストアを中心とする６カ国の王達もこの棟に滞在するということで、少しの手違いも許されなかった。
その小さな事件は、そんなある日に起こった。

「お嬢ちゃん、中央の棟に行きたいんだけど、どう行けばいいのかな？」
ちょうど廊下に飾られた花瓶の水を交換していた私は、突然かけられた声に驚いて手を離してしまった。
「おっと！」
瞬間、後ろから手が伸びてきて倒れそうになった花瓶を支えた。
安堵の溜息をついて振り返ると、身分の高そうな青年が立っていた。赤茶色の短い髪の、青い目をした人だった。
その人は私の顔を見ると、驚いたように目を大きく開いて無遠慮な視線を送ってきた。
彼の手はまだ花瓶に添えられていて、自然と距離が近くなる。
「へえ、珍しい色の目をしているね。出身はどこ？」
細められた目が何だか怖くて後ろに下がるけれど、すぐ後ろは花瓶を置いてある台でそれ以上後ろには行けない。
それを見たその人は、にやりと口の端をあげた。
「もしよかったら、どこかでゆっくり話しでもどうかな？」
「あ、あの、仕事中なので、ごめんなさい。中央の棟に行く道は、私も知らないんです、ごめんなさい。」
早口でそう言うと、からかうような顔がまた少し近づいた。
「ほんの少しなら、抜けてもばれないさ。」
私はとっさに、服の上からお守りの石を握り締めた。頭の中がパニックになって、とにかく心の中で助けてくださいと繰り返した。
「今時こんな初心な子も珍しい。気に入った！名前は？なんて言うんだ？」
教えてしまったらまずい気がして、意味もなく頭を振る。
けれど彼は私が断るたびに面白そうな顔をして、矢継ぎ早に質問を浴びせてきた。
お守りの効果は、いつ出てくれるんだろう？そう思いながらも必死で石を握り締めた。

男のしつこさと顔の近さにいい加減泣きそうになって来たとき、とうとうお守りの効果が現れてくれた。
階段を走るように登ってくる慌しい足音に私達が顔をそちらに向けると、何度も見たことのある人が息を切らせてこちらに向かってくるところだった。
「エルフリード王子！ここは下町ではありません、女性に対してそのような振る舞いは今後一切許しませんぞ。」
カツカツと足音荒く近づくと、控えめな声ながらもはっきりとそう言った。
「あなたは・・・ああ、確か竜王陛下といつもご一緒の近衛隊長殿。勘違いをなされては困る。ただ私は彼女と友好を深めていただけでして・・・。」
「あなたが友好を深めなければいけない人物は、他にたくさんおられましょう。」
「はあ、それはまあそうですが。しかし、あなたは何故こちらに？」
明らかに急いで来た様子でいきなり注意されれば、確かに戸惑うだろう。
「・・・こちらにはこちらの事情がありましてな、お気になさらず。・・・ちょうどよかった、こっちに来て手伝ってくれ。人手が足りなくてな。ではエルフリード王子、失礼いたします。」
私に顔を向けてそう言うと、腕を掴んで男の下からひっぱり出してくれた。
キョトンとする男を置いて、彼はゆっくりとした足取りで歩き出した。

後ろを早足で付いていきながら、私は彼を見上げた。
いつもジルと一緒に離宮に来ていた人だ。
「あの、ありがとうございました。」
お礼を言うと、彼は振り返って笑みを浮かべた。
「何もなくて良かった。あの男はマレイラ国の王子で、王位の第一

継承者だ。それがあのような放蕩者では、マレイラの将来が心配だ。」

あの男が一国の王子だとは、驚きだった。

エストアの民は、王といえば竜王しか知らない。賢王しか知らない私達にとって、彼のような人物が王になる事など正直想像もつかないものだった。

「何かお急ぎだったんでしょう？私はもう大丈夫なので、気にせず行ってください。」

「いや、まあ、急ぎは急ぎなんだが・・・そうだな、せっかくだからやっぱり手伝ってもらおうか。」

どこか父親を思わせる笑顔に、私も笑顔で頷いた。

第２５章　お守り２

途中、マーサに少しの間持ち場を離れることを伝えると、マーサは快く許可を出してくれた。
「忙しい所、人手を割いてしまって申し訳ない。」
「とんでもありません、もし必要であればあと何人か都合をつけますので、どうぞ遠慮なくおっしゃってください。」
マーサの言葉に、彼は申し訳なさそうに頷いた。
「ありがとう。その時はまた声を掛けさせてもらおう。」
私はマーサと目だけで挨拶をかわして、また歩き出した彼の後に続いた。
南の棟を出て、外にある回廊を彼はためらいもなく歩き続ける。
一体どこまで行くのだろうか？仕事を手伝った後、ちゃんと元の場所まで戻ってこられるだろうか。
不安になってキョロキョロとあたりを見回すが、目印になりそうなものは何もない。
見る限り、似たような風景が広がるばかりだ。
どこまで行くのか聞いてみようと思って口を開きかけて、慌てて閉じる。
身分の高い人には、気安く話しかけてはいけないのだ。
彼は時折私の方を振り返って付いてきているのを確かめたり、歩くのが早いのに気付いて歩調を緩めてくれたりした。
連れて来られたのは、前に一度だけ来たことのある所だった。中央の棟の最上階。ジルの執務室がある場所だ。
彼は執務室の手前まで来ると、部屋の前に立つ兵士に話しかけた。
「陛下はまだお戻りではないのか？」
「はい、まだ戻っておられません。」

「そうか。・・・少しここで待っていてくれるか？」
短い沈黙の後、彼は私のほうを振り返ってすまなそうな顔でそうたずねた。
結局私は何を手伝えばいいのだろうか？
不審に思いながらも頷いたとき、彼はふと顔を廊下の奥に向けて表情を緩めた。
「やれやれ、ちょうどいいタイミングだったな。呼ぶまで下がっていなさい。」
後半は部屋の前に立つ兵士に向けられたものだった。
兵士は敬礼をすると、何も言葉を発する事無く早足で廊下の向こうに消えていった。
それを何となく目で追っていると、後ろから突然名前を呼ばれた。
「フィリスっ！」
聞きなれた声はどこか焦っている様子で、声の主の姿を確かめようと振り返ると、いつの間にかすぐ目の前にジルが立っていた。
「マレイラのエルフリード王子に絡まれていました。声を掛けられただけで何もされてはいません。」
「・・・そうか。感謝する、ガント。」
ジルの言葉に、ようやく彼の名前が判明した。
言われてみれば、聞いたことがあるような気もする名前だった。
「礼には及びません。当然の事をしたまでです。」
頭上で交わされる会話に口を挟むこともできず、身の置き所がなくて取りあえず後ろに下がろうと体を動かすと、恐ろしく綺麗な顔が頭上から私を見下ろした。
「不愉快な思いをさせてしまったようだな。すまなかった。大丈夫か？」
どうしてジルが謝るのだろう？不思議に思いながらも何ともない事を伝えるために頷いた。
「宰相殿はまだ謁見の間ですか？」
「ああ。二人とも外すわけにもいかないからな。」

「では、私のほうから話しておきましょう。少し休憩されては？」
「・・・すまないな。屋上にいるから、呼びに来てくれ。」
ガントさんは腰を深く折って礼をすると、私に手を振って行ってしまった。
手伝ってもらうと言いながら内容も告げずに行ってしまったガントさんに、残された私は首を傾げるしかない。
「フィリス。」
名前を呼ばれて振り返ると、ジルは私に向けて手を差し出していた。
一応周りに誰もいないか確認して手を伸ばすと、ジルは柔らかな笑みを浮かべて私の手を取った。

ジルが私を連れて来たのは、あの日ジルが竜の姿で降り立った城の屋上庭園だった。
あの時はゆっくり見る余裕もなかったけれど、こうして明るい中で改めて見ると本当に綺麗な庭園だった。
様々な種類の花が植えられ、休憩用なのかベンチまで配置されている。
ジルは入り口に一番近いベンチに私を座らせると、自分も隣に腰を下ろした。
「ねえジル、私ガントさんのお手伝いに来たんだけど、私までジルと一緒に来ちゃって良かったのかな？」
「手伝い？・・・ああ、多分大丈夫だろう。それより、マレイラの王子に何を言われたんだ？」
気にかかっていた事をたずねると、ジルはさらっと流して話題を変えてしまった。
納得できないような気もするけれど、考えても仕方がない。次にガントさんに会った時にちゃんと聞いてみよう。
「えっと、最初は道を聞かれただけなんだけど・・・。」
覚えている限りの事を話すと、ジルは珍しく舌打ちをして苛立っ

たような表情をした。
寛容なジルが、何かに対してこんな風にあからさまに嫌悪の感情を見せるのは、私が知る限り初めての事で、思わずまじまじとジルの顔を見てしまった。
ジルはそんな私に気付いて、困ったように眉を下げた。
「軽薄な奴はどこにでもいるものだな。本当に、何もなくてよかったよ。」
「お守りに、助けてってお願いしたの。このお守り、すごいね！本当に効いたよ？」
そう言うと、ジルは少しだけ目を見開いて、それからとても嬉しそうに頷いた。
「これって、なんていう名前の石なの？」
胸元から取り出してたずねると、ジルはクスリと笑って言った。
「鱗だ。」
「うろこ？」
うろこなんて名前の石があるのだろうか？
「それは、俺の鱗だ。何枚か取って結晶化してるから、石みたいな形になってるんだ。」
その意味を理解するのに、数秒はかかったと思う。
バカみたいに口を開けて固まる私を、ジルは楽しそうな表情でじっと見ていた。
「ジルっ！」
ようやく意味を理解した私は、叫ぶと同時に椅子から立ち上がった。
「鱗って、鱗って、取っても大丈夫なの！？あんなに硬いもの体から剥がして、痛かったでしょう？」
一度だけ触れたことのある鱗は、すごく硬くて皮膚にしっかりと張り付いているように見えた。
人間の体で言えば爪のような感じがした。
それを剥がすなんて、想像しただけで血の気が引く。

「フィリス・・・大丈夫だ。痛いって言っても、髪の毛一本抜くのとそう変わらないよ。それに、剥がしたってすぐ生えてくる。」
「ほ、本当に？」
「約束しただろ？フィリスには絶対、嘘は付かないって。」
そこまで言われて、ようやく私は安堵の息を吐いた。
「・・・よかった。でも竜の鱗って、お守りの効果があるの？」
竜族は人間にとっては神様みたいなものだから、そんな事があっても不思議ではないような気もした。
「鱗自体にはそんな効果はない。お守りになるように、俺が魔力をこめておいた。」
「そうなんだ・・・。」
あらためて石を見ると、確かにその深い黒はジルの鱗とそっくりな色だった。
「ありがとう。私、絶対大切にするね。」
お礼を言うと、ジルは嬉しそうに頷いた。

「ところで、夏至祭の事なんだが・・・。」
ジルは椅子に座り直した私を見ると、表情を引き締めた。
「当日の夜はオリヴィア達も宴に参加することになってる。会わないように裏方を手伝ってもらうつもりだけど、もし不安ならその日は部屋で休んでいてもいい。」
久しぶりに聞くその名前に、胸がズキズキと痛んだ。
表情を曇らせた私に、ジルは気遣う様に私の顔をのぞき込んだ。
「・・・私なら大丈夫だから。いつまでも、怯えていたくないもの・・・大丈夫、もうあの人は、私には関係ない。」
自分に言い聞かせるようにはっきりとそう言って、ぎゅっと手を握りしめた。
「私、皆と一緒に働きたい。あの人のために、もう何も我慢したくない。」
家族も、できたかも知れない友達も、何もかも奪われてきた。

過去の事はもうどうしようもないけれど、これからは違う。
強い決意を込めてジルを見ると、ジルは目を細めて頷いた。
「望む通りに、フィリス・・・。」
ささやく様にそう言って、ジルは私の握りしめた手を持ち上げた。
ジルの唇が私の荒れた手にそっと触れたその瞬間、まるで世界が音を消したような気がした。

耳に音が戻って来るのと、顔が火傷でもしたのかと思うくらい熱くなるのは同時だった。心臓が痛いほどバクバクと騒ぎ立てる。
「・・・大丈夫か？」
全然大丈夫じゃなかったけど、とにかく落ち着こうと何度も頷いた。
急に握られたままの手が恥ずかしくなって、急いで手を抜き取って背中に隠した。
「すまない、嫌だったか？」
今度は勢いよく頭を振った。
ジルは安心したように息を吐くと、入ってきた入り口の方に顔を向けた。
「もう時間切れのようだ。フィリス、また変な奴に絡まれたらすぐに逃げろよ？襲われそうになったらとにかく大声で叫べ。いいな？」
「う、うん。そうする。」
返事を返したところで、入り口の扉が遠慮がちに開かれた。
「陛下。申し訳ありませんが、そろそろ・・・。」
ガントさんは私たちを見つけると、申し訳なさそうにそう言った。
「わかった。フィリス、今日は会えて良かった。また時間を作って会いにいくよ。」
ジルは私の頭をポンポンと撫でると、ガントさんと小さな声で何かを話してから屋上を後にした。
「それじゃあ、南の棟まで送ろう。」
「あ、あのっ、待ってください。」

きびすを返すガントさんを、私は慌てて引き止めた。
「あの、私は何をすればいいんでしょうか？」
もしかして、ここでジルと話している間にもう終わってしまったのだろうか？
そう思って落ち込んでいると、ガントさんは突然豪快な笑い声を上げた。
びっくりして目を丸くする私を見て焦ったように笑いを収めると、咳払いをして真面目な表情を作った。
「失礼した。いや、私が悪かった。陛下の気分転換になるよう、話し相手をしてもらいたかったのだ。ここの所謁見ばかりでお疲れのご様子だったのでな。ありがとう、もう十分手伝ってもらった。」
どちらかと言えば相手をしてもらったのは私の方だと思うけど・・・。
「さあ、行こう。」
「はい・・・。」
なんとなく釈然としないものを感じながらも、ガントさんの後に付いて南の棟へと戻った。

第２６章　祭りの前

「一体なにが不満なんだ？」
後ろから聞こえる声に歩く足を止めずに振り返ると、エルフリード王子が不機嫌な顔で私の後ろを付いてきた。
私は手に持った洗濯物のかごを抱えなおして、彼を振り切るために足を速めた。
王子はあれ以来、私を見かけると玩具を見つけた子供のような顔をして話しかけてくる。
私は少しでも視線が合ったり話しかけられたりしたら、とにかくその場から離れるようにしていた。
「別にとって食うわけじゃあるまいし、逃げなくたっていいだろう？」
その言葉に少しだけ罪悪感を感じて、スピードを落としてまた振り返った。
すると彼はニヤリと口の端を上げて笑った。
その目が獲物をいたぶる獣のように見えて、私は慌ててすぐにまた前を向いて小走りになった。
「そろそろ名前くらい教えてくれよ。お前は俺の名前を知ってるのに、俺はお前の名前を知らない。不公平だと思わないか？」
その言葉も無視して無言のまま目的の場所に着くと、同じように洗濯物のかごを手に抱えた侍女が立っていた。
彼女は私とエルフリード王子を見ると驚いたようだったが、苦笑すると私を庇うように前に出た。
「ここから先はお客様をお通しできる場所ではありません。どうぞお戻りください。」
「俺は別に気にしない。」
「私達が叱られてしまいます。ご理解ください。」
そう言って二人で頭を下げると、エルフリード王子は興ざめした

ように冷たい表情で来た道を戻って行った。

「ありがとう、リリィナ。」

お礼を言うと、彼女はにっこり笑った。

リリィナは最近仲良くなった同じチームの仲間で、一緒に行動する機会が多いため、私がエルフリード王子に目をつけられて困っていることもよく知っていた。

「どういたしまして。さあ、行きましょう。」

洗濯場は客室から見えないよう、建物から少し離れた場所にあった。

「フィリスは彼のどういう所が苦手なの？軽薄そうなのは別として、それなりにかっこいいと思うけど？しかも王族だし。」

リリィナの言う通り、エルフリード王子はかっこいい部類に入るのだと思う。

背は高く、鍛え上げられた体はがっしりとしていて無駄がない。顔もそれぞれのパーツは整っていて、綺麗ではないが野生的な魅力がある。

王子という肩書きもあるけれど、あの容姿だけでも惹かれる女性は多いだろう。

加えて物怖じしない堂々とした態度に、男としての彼の魅力が出ている。

けれど私は、どうしてもあの人を好きになれなかった。

どこか人を人とも思っていないような気がして、あの目で見られると萎縮してしまう。

「・・・あの人、何か怖い。私の目の色が珍しいから、面白がってるだけだと思う。」

「そうかなぁ？そうとも言い切れないと思うけど。そりゃあ確かにフィリスの目の色は珍しいけど、それだけで毎回こりもせず話しかけてくるかしら？」

「リリィナ・・・。」

「ごめんごめん、好きでもない人に言い寄られても、迷惑よね。」
言い寄られているというより、からかわれてるだけだと思うけど。
「大丈夫よ。私達もついてるし、城の中の警護も強化されてるみたいだし。」
「・・・うん。そうだね。」
エルフリード王子が話しかけてくるようになった頃から、南の棟の警備兵の数は多くなっていた。
数えてみたわけではないけれど、外を巡回している者だけでなく、廊下でもよくすれ違うようになったから多分増えているのだと思う。
昨年よりも厳重な警護に何かあったのかと不安を声にする者もいたけれど、どうも来客の方から要望があったしい。
身分の高い人は、普通の人よりも自分の身に危険を感じる事が多いのだそうだ。
「それに夏至祭は明後日からだし、王子ももうあなたに構う暇もないでしょう。」
リリィナの言葉に、私は頷きを返した。
夏至祭が終われば、エルフリード王子は自分の国に帰る。あともう少しの我慢だ。
「明日は私達は会場の準備を手伝うから、朝から目が回るくらい忙しいわよ？」
「楽しみだね。」
そう返すと、リリィナは苦笑した。
「フィリスって、ちょっと変わってるよね。どうせ私達はどんなに頑張ったって裏方で、祭りって言っても楽しめるわけじゃないのよ？」
「みんなと一緒に働くのが、楽しいの！」
村の小さな祭りでは、準備すら手伝わせてもらえなかった。
大げさなのかもしれないけれど、こうして邪険にもされず戦力として仲間に入れてもらえて、本当に嬉しい。
「マーサがあなたを可愛がる気持ちがよく分かるわ。フィリスみた

いな妹、私も欲しいもの。」
そう言われて嬉しいような恥ずかしいような気持ちで俯くと、リリィナは楽しそうに笑った。

その夜自室に戻ろうとした私とマーサは、建物の入り口に見知らぬ女性が立っているのを見て足を止めた。
その女性はずっときょろきょろしていたが、私達を見ると驚いたように一瞬口を開いて、そしてほっとしたように表情をゆるめた。
「よかった、やっと会えました！」
女性は手に大きな箱を持っていた。さらにその箱の上には、小さな箱が2つのっている。
女性が近づいてくると、マーサはさっと私の前に立った。
「失礼ですが、どちら様でしょうか？」
「ごめんなさい、待ち伏せするような形になってしまって・・・。エルフリード様よりお届けものを預かってまいりました。」
女性の言葉に、私とマーサは思わず顔を合わせた。
「緑の目をした少女に届けるようにと言われたのですが、名前も分からないということでしたので・・・何人かの方におたずねしたんですが、皆さんご存知なくて。それで、侍女の方々のお部屋がある場所を聞いてここで待っていたんです。」
私がマーサと南の棟で働くようになってから、日も浅い。一緒に働いている数名を除いて、私の名前まで知っている人は少ないだろう。
それは私も一緒で、顔はよく知っていても名前までは分からないという人がほとんどだった。
「お部屋はどちらでしょうか？お運びします。」
ずっと箱を持ったままここで立っていたのなら、相当疲れただろう。彼女はとにかく早く箱を渡してしまいたいようだった。
「失礼ですが、その中身はなんでしょうか？」
「ドレスと靴と、あと装飾品がいくつか・・・。夏至祭の日はこれ

を身につけて、部屋で待っているようにとのことです。」
マーサは息を呑むと、厳しい顔で彼女を睨んだ。
「この子はこの城で働く者です。夏至祭には当然仕事がありますので、その申し出はお断りいたします。ドレスも靴も受け取ることはできません。申し訳ありませんが、それはそのままエルフリード王子にお返しください。」
マーサははっきりとそう言うと、私を連れて建物に入ろうとした。
その前を、箱を持ったままの彼女が立ちふさがった。
「あなたには関係ありません！私が話したいのはそちらの子供です！」
「私はこの子の上司です！仕事を休ませることは許可できません！」
しばらく睨み合ったあと、彼女はマーサの後ろにいたわたしを覗き込んだ。
「あなたはどうなの？あなただって、綺麗なドレスを着て王子と大広間を歩けたら、嬉しいと思うでしょう？こんなチャンス、滅多にないわよ？」
彼女とマーサ二人に厳しい視線を向けられて、私は大きく息を吸った。
「ごめんなさい、それはいりません。あの人に返してください。」
大きな声で言ってしまってから、もう少しましな言い方があったんじゃないかと思ったけど、口から出てしまったものは仕方がない。
マーサは得意げに彼女を見て、彼女は信じられないというように目を丸くした。
「で、でも、これはあなたのために用意されたものなのよ？返されたところでどうしようもないし、エルフリード様が何とおっしゃられるか・・・。」
「勝手に押し付けてきて、その言い分はないんじゃないですか？」
マーサの言ってる事は正しいと思うけど、彼女の事を考えるとさすがにかわいそうになってしまった。
「あの、じゃあ、私がそれを返しに行きます。」

受け取ってもらえなかったとは言いにくいだろうと思ってそう言うと、彼女は救われたような顔になった。
けれど、その案はすぐにマーサに反対された。
「駄目よそんなの！こっちから会いに行ったりしたら、どんな無理難題をふっかけられるか分からないわよ？」
そう言われて彼女の方を見ると、彼女は助けを求めるように私を凝視している。
「じゃあ、せめてもらうだけもらって？私を助けると思って！」
「受け取ったら後で絶対面倒な事になるの。受け取ったら駄目よ。」
言い合いを続ける私達を、部屋に戻っていく侍女達が遠巻きに眺めていた。
しかし連日の忙しさで疲れているのか、いつまでも見ていたり、仲裁に入ろうとする者はいなかった。
二人はお互いにゆずらないし、妥協案もこれ以上は思いつかない。
私は無意識に胸の辺りを握り締めた。
小さな硬い石の感触を確かめながら、なんとかいい案が浮かばないかと思考を巡らせた。

途中でとりあえずどこかに箱を置いてゆっくり話し合おうと提案したけれど、この場で追い返したいマーサと、この場で箱を手元から手放したい彼女は納得せず、平行線の会話が続いていた。
原因が自分にあるとはいえ疲れてきた私は、申し訳ないと思いながらもついぼんやりと月を眺めたりなんかしてしまう。
「口をあけてると虫が入るぞ。」
のんびりとした声で話しかけられると同時に、ポンと肩を叩かれた。
慌てて口を閉じて後ろを見ると、ジルがおもしろそうに私の顔をのぞいていた。
「ジル！？どうしてここに？」
マーサはジルに気付くと、言い合いを中断してそう聞いた。

彼女も、訝しげにジルを見ている。
「こんな夜更けに、何を口論してるんだ？」
ジルはその問いには答えず、マーサに逆にそうたずねた。
「それが・・・」
ジルの突然の登場で一気に落ち着いたマーサが簡単に状況を説明すると、ジルは彼女からヒョイと箱を取り上げた。
「あ、あのっ？」
「ご苦労様。これは俺が預かる。エルフリード王子には、この子の知り合いに預けたと伝えておけばいい。さあ、行きなさい。」
彼女は戸惑っていたが、これ以上は仕方がないと思ったのか素直に頭を下げて戻っていった。
「仕事で疲れているだろうに、二人とも災難だったな。この件は俺に任せてくれ。もう部屋に戻って休むといい。」
「・・・ありがとう、ジル。でも、どうしてここに？」
マーサがたずねた事をもう一度聞いてみると、ジルはクスリと笑って答えた。
「それは、秘密だ。」
首を傾げる私の頭をポンポンと撫でて、ジルは後ろ手に手を振って去っていった。

「・・・なんだったのかな？」
私の呟きに、マーサも分からないと言うように頭を振った。
「とにかく、これで解決ってことにしましょ？私もいい加減ベッドが恋しいわ。」
「マーサ、ありがとう。ごめんね？」
もっと自分でしっかりと断らなければいけなかったのに、マーサに全部任せてしまった挙句、飽きてぼんやりしてしまった。
さすがに罪悪感を感じてしまう。
「私が好きでしてるんだから、いいのよ。それに王子のような傲慢で狡猾なタイプを相手にするのは、まだまだフィリスには早すぎる

と思う。とにかく今は逃げまくるのよ！」
握りこぶしを作って力説するマーサに、私も勢いに押されるように大きく頷いた。

第２７章　祭りの前（ＳＩＤＥジル）

脇に抱えた箱を無造作に床に放り投げて、俺はモヤモヤした気持ちを吐き出すように大きく息を吐いた。
箱を開けると、中には淡い黄緑色の可愛らしいドレスが入っていた。
別の箱にはドレスに合わせた靴や装飾品が入っている。
これを、どう処分するべきだろうか？
エルフリードに送り返せば、あの侍女の立場がないだろう。そうかといって、俺がこのまま持っていても仕方のないものだ。

考え込んでいると、ノックの音がしてコンラートが部屋に入ってきた。
「陛下、こちらにお戻りでしたか。・・・その衣装は？陛下が用意されたものではないようですが。」
「何故そう思う？」
当たり前のようにそう言ったコンラートを不思議に思って問いかけると、コンラートは口の端を上げて床に広がったそれらを見下ろした。
「そのような靴は、陛下はお選びにならないでしょう。相手がフィリス殿ならなおさらです。」
そう言われて靴を手に取ると、やけにヒールが高い事に気がついた。
身分の高い者が集まる社交の場では、背の低い女性はヒールの高い靴をはいて、エスコートする男性と並んでもおかしくないようにする事が多い。
「なるほど。」
フィリスはまだ子供ということもあるが、育ってきた環境のせいか発育が悪く平均よりも背が低い。

エルフリードは自分の隣にフィリスが並ぶことを考えてこの靴を用意したのだろうが、これではフィリスは一歩もまともに歩けないだろう。
立てるかどうかも怪しいものだ。
「どうせエルフリード王子あたりが押し付けてきたものでしょう？知らぬ事とはいえ、陛下の想い人に手を出すとは許しがたいですね。」
冷たい笑みを浮かべるコンラートに、俺は苦笑を返した。
「いいから、放っておけ。」
「しかし陛下・・・よろしいのですか？」
「本気なら国に帰る前になんらかの行動を起こすだろう。その時は俺が直接相手をする。気まぐれでかまっているだけなら、あと数日やり過ごせば穏便に済む。」
不満そうなコンラートに、俺は言葉を続けた。
「心配するな、大丈夫だ。・・・そうだ、これは売り払って、孤児院への寄付金にでもしてくれ。身につける者がいない以上、その方がものの役に立つだろう。」
ドレスや靴を箱に丁寧に直して、コンラートに押し付けた。ふとした思い付きだったが、なかなかいい案だ。
「わかりました。念のために、見張りを立てておきましょう。何かあってからでは遅いですからね。」
「すまない、頼む。」
「残りの仕事は、明日に回されますか？」
そう言われて、仕事の途中で抜け出していたことを思い出した。
俺は少し考えて、頷いた。
今日はもう、仕事をするような気分にはなれそうにない。
「では、私はこれで失礼致します。」
コンラートは押し付けられた箱をかかえなおすと、部屋を出ていった。
それを見届けて、大きすぎるベッドに仰向けになる。

目を閉じて自然と思い浮かぶのは、フィリスの笑顔だった。
頭の中は彼女の事でいっぱいで、フィリスと出会うまでの自分は何を考えて生きていたのかと不思議になる。
彼女の事を考えない時など、もう一瞬だってなかった。
コンラートには心配するなと言ったけれど、本当は心配しているのは自分の方だった。
ただ、それはエルフリードの事ではない。
百歩ゆずってエルフリードが遊びではなく本気だったとしても、フィリスがあんな奴の気持ちに応えるとは思えない。
けれど、他の奴だったらどうだろうか？
誠実で、優しくて、彼女の事を心から愛する者が現れたら？
あり得ない話ではない。フィリスはまだ子供の域をでないけれど、これからどんどん女性らしくなっていくだろう。
元々整った顔立ちだし、大人になれば見た目だけでも十分魅力的な女性になることは間違いない。
加えてあの素直さと芯の強さがあれば、惹かれる男は多いだろう。
どんなに俺が彼女を愛していても、相手は人間で、俺は竜だ。
同族の方を好きになるのが自然じゃないだろうか？
そこまで考えて、俺は自嘲的な笑みを浮かべるしかなかった。
来るか来ないか分からないような未来に怯えて、俺はこんなに情けない奴だっただろうか？

「・・・まあ、仕方がないさ。」
自分に言い聞かせるように呟くと、少しだけ気分が浮上した。
好きになってしまったんだから、愛してしまったんだから、仕方がない。
竜族は簡単に誰かを好きになったりしない。親愛の情は元々深い方だが、恋愛となると難しい。
寿命が長い分、もしかしたら頭で色々と考えすぎるのかも知れな

いが・・・。
その代わり、恋に落ちると落ちたまま上がってくることもない。
人間のように長く付き合うと恋愛感情が家族愛に変わるということもない。
そういう生き物なのだ。
だからこそ、怖いくらいに不安になる。
自分の事を、相手が好きになってくれるのか。好きになってくれたとして、ずっと好きでいてくれるのか。
相手が同じ竜族であれば、心変わりをされる心配だけはしなくて済むのだが・・・。
「・・・だから、か。」
普段あまり話さない祖父が、ふともらした言葉を思い出した。

『私は別に、人間のためだけに盟約の話をもちかけたわけではないさ。お前にもいつか分かるだろう。』

その時は、何を言っているのか分からなかった。盟約は人間が望んだものだ。
祖父は頼まれて仕方なく人間の王となった。ただ世界の秩序を乱さないために、人間の花嫁を迎える事を条件とした。
人間が妻となれば、夫である祖父は妻のために人間に干渉する権利を持つ。
そうすることで、無理やり体裁を整えた。
とはいえ、不自然な形であることには違いない。それが祖父にとってどんな利益があるというのか・・・。
祖父は俺の疑問には答えてくれなかったが、ただ愛おしそうに祖母を見ていたのを覚えている。

今なら、あの言葉の意味が分かるような気がする。祖父と同じように、人間を愛してしまった今なら・・・。

祖父はきっと、祖母を妻にするための正当な理由が欲しかったのだ。
そして、自分から離れていかないための絶対的な何かを求めた。
盟約は、人間の王に竜族を求めた祖母と、祖母という存在そのものを求めた祖父の、互いの願いを叶えるためのものだったに違いない。
そしてそれを、俺も利用しようとしている。祖父や、おそらく父もそうしたように・・・。
それを情けない事だとは思うが、否定しようとは思わない。
愛する者がいてその者が自分の傍らにいないというのは、竜族にとっては生きながら死んでいるのも同然だからだ。
死なないためにあがくのは、本能であって当然のことだ。

目を閉じて意識を集中すると、フィリスに渡したお守りを通してトクントクンと規則正しい心音が聞こえてくる。
あれはもちろん、ただのお守りではなかった。
フィリスのいる場所を確認できるようになっていたり、強い感情の波が俺に伝わるように作ってあった。
だからといって常にそれが伝わってくるわけではなく、俺が読み取ろうとするかフィリスが石を強く握り締めた時だけ、効力が発揮されるようになっている。
覗き見をするようで気がとがめたが、別に考えている内容まで分かるわけじゃないからかまわないだろう。
あれがあればフィリスが迷子になってもすぐに迎えにいけるし、何かあっても助けに行くことができる。
外れないように留め金をあえてつけなかったのは、万が一あれが他の人間の手に渡ると面倒だと思ったからだ。
魔術に秀でた者であれば、あの石に込められた強い魔力を引き出すこともできるだろう。
竜族が持つ魔力は人間のそれに比べて、純度が高く比べようもな

いほど強力だ。悪用されないとも限らない。

初めてあの石が効力を発揮したのは、フィリスがエルフリードに声を掛けられたときだった。

石から伝えられたのは、戸惑いと不安の感情だった。

感じる強さから大事ではないだろうと判断した俺は、傍に控えていたガントに代わりに行ってもらった。

本当は俺自身が行きたかったが、謁見の途中で席を外せなかったのだ。

ガントがフィリスを連れてきたのには驚いたが、あの時は顔を見れてホッとした。

とにかくこんなに忙しいのも、あと数日で終わる。

夏至祭さえ終われば、フィリスとゆっくり話すための時間も取れるだろう。

オリヴィアの事が心配といえば心配だが、宴には大勢の人間がいるし、マーサも付いている。

もしオリヴィアがフィリスに気付いたとしても、その場で何か行動を起こしたりはしないだろう。

エルフリードの件もあるが、プライドの高いあの男が社交の場で一介の侍女を追いかけ回したりするとは思えない。

そんな考えがあまりにも楽観的だったことを知るのは、祭りの一日目のことだった。

第２８章　夏至祭１

夏至祭１日目は、雲ひとつない晴天となった。
会場となる大広間には多くの侍女や下働きの男達が集まり、テーブルを運び込んだり花を飾ったりしていた。
「フィリス、大丈夫？朝から全然休んでないでしょう。まだまだ先は長いんだから、適度に休憩とりなさいよ？」
男達が並べた机を順に拭いていた私は、マーサにそう声をかけられて手を止めた。
「ありがとう、マーサ。マーサこそ大丈夫？」
私と同じように、マーサも休憩を取らずに働き詰めだった。お昼に食事を取ったときを除いて、ずっと動き回っている。
「大丈夫よ毎年のことだもの。私はペース配分が分かっているから。」
「私も平気。まだ疲れてないよ？」
そう言うと、マーサは呆れたように肩をすくめた。
「フィリスって見た目によらずパワフルよね。そんな細い体のどこにそんな体力があるのかしら？」
そんな不思議そうにされても、私も首を傾げるしかない。
「新しく入った子は大抵この夏至祭でへばるんだけど、フィリスは大丈夫そうね。」
「元気そうなら、二人とも厨房の方に回ってくれ。手が足りてないらしいぞ。」
聞いた事のある声が聞こえて二人で振り返ると、そこには懐かしい人が立っていた。
「オルグさん！お久しぶりです。」
オルグは両手に大きな花瓶を抱えて、私達に笑顔を向けていた。
彼と顔を会わせるのは、オリヴィアについてこの城に入った日以

来だった。
「久しぶりだな。マーサには聞いていたが、元気そうでなによりだ。お前も色々大変みたいだけど、まあ頑張れよ。広間の方はこれだけ人数がいれば、なんとかなるだろ。」
最後の言葉はマーサに向けたものだった。
「分かった。じゃあ、ちょっと厨房のぞいてくるね。」
私とマーサは、オルグに手を振って広間を後にした。

「マーサは、オルグさんとよく会うの？」
マーサと私は大抵いつも一緒に行動しているのに、いつオルグと会っているのだろうか？
「えっ？・・・そうね、たまにだけど。」
珍しくそれ以上は何も言わないマーサに、私もそれ以上は聞かなかった。
マーサにはマーサの付き合いがあるのだろうし、あまり詮索しては悪いだろう。

厨房の中をのぞくと、白い服を着た料理人達が厳しい表情で料理を作っていた。
数人の侍女が、野菜を洗ったり切ったりするのを手伝っている。
「すいません、お手伝いに来たんですが。」
マーサが声を掛けると、大柄な男が扉の方を振り返った。
「ああ、頼むよ。そこの野菜の皮むいてくれるか？」
男が指差した場所には、たまねぎやジャガイモが山のように積まれていた。
「わかりました。」
マーサが返事を返すと、男は小振りの包丁二つを手渡して自分の作業に戻って行った。
厨房は人がいっぱいなので、私とマーサは野菜を入れたかごをも

って外に出た。
廊下に並んで腰を下ろすと、マーサは包丁とかごから無造作に手にとったジャガイモを私に手渡した。
「皮はこっちの袋に入れてね。」
そう言って、自分もジャガイモを手に取ると包丁で器用に皮をむき始めた。
その様子を、私は包丁を握り締めたままじっと見つめた。
実は、私はこれまで料理というものをしたことがない。
オリヴィアの家では、台所には入らせてもらえなかったからだ。
私が食べものを盗み食いしないか、へんなものを料理に混ぜたりしないか、オリヴィアの母はいつも心配しているようだった。
そういうわけで、刃物といえば草狩用の鎌か、薪を作るための斧くらいしか持った事がない。
しばらくマーサの手つきを見てから、私は思い切ってジャガイモに刃を立てた。
想像していたより深く刺さったそれは、今度はなかなか抜けなくなってしまった。焦って思いっきり手を引くと、勢いあまって後ろの壁に手をぶつけてしまった。
「フィリス、大丈夫？・・・もしかして、こういうのは初めて？」
頷くと、マーサは手を止めて私の手からジャガイモと包丁を取り上げた。
「言ってくれたらよかったのに。これは私がやるから、フィリスはたまねぎの方をお願い。こうやって、外側の茶色い部分を剥がすの。分かった？」
そう言って、マーサは私に見本を見せてくれた。
「じゃあ、せめてこれは私が全部やるね？」
なんだか申し訳なくてそう言うと、マーサはクスリと笑って自分の作業に戻った。
「そんなに気を張らなくてもいいわよ。こういう時は、できる人ができる事をすればいいの。・・・ああ、でもやっぱりいつか出来る

様になってた方がいいわね？」
「皮むきを？」
「それもそうだけど、料理よ。フィリスだっていつか結婚したら、旦那や子供に自分の手料理食べさせたいでしょう？」
「私が、結婚したら？」
そんな日が、いつか来るのだろうか？
自分がハンナの家族のように、暖かな家庭を持つ日などあるのだろうか？そうなった時の自分の姿が全く想像できない。
「そうよ。フィリスだって、いつかは結婚したいでしょう？」
「私・・・結婚とか考えた事なかったから。でも・・・うん、いつかは結婚したいかな？」
父も母も、結婚したことで苦しい生活を強いられることになった。それどころか、命すら奪われた。
けれど、それで不幸だったとは思わないし、思いたくない。
記憶にかすかに残る母の笑顔が、幸せだったと私に教えてくれるから・・・。
だから、もしいつかがあるなら、私も母のように愛する人と結婚して、家族を持ちたい。
そして母が私にしてくれたことを、生きていれば私が母にして欲しかったことを、自分の子供にしてあげたい。
そんな気持ちが自然にわきあがってきて、そんな自分に少し驚いた。
こんな風に考えられるのは、やっぱり気持ちに余裕が出てきたからだろうか。
「マーサは？結婚したい？」
「それは・・・いつかはね。その前に相手もいないし。」
「そっか。でもマーサみたいに美人で気立てがよくて優しかったら、結婚したいって言ったらいっぱい求婚者が出てきて大変かも知れないね。」
マーサは手を止めて驚いたように私を見た。

「それって、冗談じゃなくて？」
「冗談？」
もちろん、冗談なんて言ったつもりはない。
マーサのような素晴らしい女性なら、もしダーナの村なら年頃の成人男性全てが立候補してもおかしくはないだろう。
「そうよね、フィリスがそんな気の利いた冗談言うはずないわよね。ありがと、フィリス。」
珍しくはにかんだ笑みを浮かべるマーサに、私も笑顔を返した。

鮮やかなオレンジ色の空が薄闇に変わり始めた頃、城中に響き渡ったのではないかというほど大きな甲高い笛の音が聞こえた。
続いて、上空に合図を送るような鮮やかな花火が数発打ちあがる。
それが、夏至祭のはじまりだった。

その光景に、私はしばらく圧倒されていた。
開放された大広間の扉から、吸い込まれるように着飾った男女が入ってくる。
女達は競うように豪奢なドレスを身にまとい、男達は背筋をピンと伸ばして、思い思いの正装に身を包んでいた。
その光景はまるで夢の世界のようで、祖母が話してくれた寝物語ですら想像もできなかった光景だった。
広間の両端に並べられたテーブルには、隙間もないほど見事な盛り付けをされた料理の数々や、葡萄酒などのビンが並んでいる。
「すごいでしょう？」
マーサの言葉に、私は声もなく頷いた。
「私たちの仕事は、このテーブルの後ろを回って汚れた食器を回収すること。回収した食器は綺麗に洗っていったん厨房に戻すの。それからまた厨房で受け取った食器や料理なんかをこっちに運んでくるのよ。厨房はもういっぱいだから、洗う場所は近くの部屋を何部

屋か専用に開放しているから、また教えるわね。」
ぼーっとした頭を必死に働かせて、マーサの言葉を頭に叩き込んだ。
ここ数日の忙しさは、すべてこの日のためだったのだ。ここで足を引っ張るわけにはいかなかった。
「陛下が出て来られてから始まるから、それまでは楽にしててていいわよ？ほら、ここに立って後ろにもたれているといいわ。」
マーサは私の手を引っ張って、テーブルの後ろのスペースの壁際に連れて行ってくれた。
「ありがとう、マーサ。」
お礼を言って背中を壁に預けると、確かにそれだけでも体が少し休まるようだった。

見るともなく入り口から入ってくる人たちを眺めていた私は、その人が視界に入った瞬間、頭で考えるよりもまえに体がビクリと反応した。
花嫁候補達が、順に並んで中に入ってきた。彼女達をエスコートしているのは、正装をした兵士達だ。
みな花嫁候補という立場からか、質素で清廉なイメージのドレスを身につけていたが、その中でもやはり一番目を引くのはオリヴィアだった。
淡い水色のドレスを着て、髪は自然に流して所々に花をあしらっている。
いつ見ても、妖精のように可憐で美しかった。
オリヴィアの姿を見るのは、あの時以来だ。
覚悟していたはずなのに、どうしても平静な気持ちではいられなかった。
怒り、憎しみ、そして悲しみが入り混じった大きな負の感情に、それまで聞こえていたはずの音すら遠のいた気がした。
「・・・フィリス、大丈夫？あなた、顔が真っ青よ？」

肩を揺さぶられて我に返った私は、強く頭を振って深呼吸した。
あの人と、私はもう何の関係もない。私は、私のやるべきことに集中しなければいけない。
「大丈夫！ごめんなさい、心配かけて・・・何ともないの。本当よ？」
「そんな風には見えないけど・・・。もし辛かったら、ちゃんと言うのよ？無理したら駄目だからね？」
心配そうに眉を潜めたマーサは、何を、とは言わなかったけれど、多分私がオリヴィアに反応したことは分かっているんだと思う。
それでも深く追求してこないのは、彼女なりの配慮なのだろう。
「ありがとう。本当に無理だったら、ちゃんと言うね？」
しばらく私の顔を覗き込んでいたマーサは、納得してくれたのか私の頭を撫でて正面に視線を戻した。
意識しないでいようと思うのに、私の目は勝手にオリヴィアの姿を追いかけていた。
これは、怖いもの見たさというものだろうか？
オリヴィアを含めた花嫁候補達は、他の来客たちとにこやかに挨拶をかわしていた。
優雅な動作で一礼するオリヴィアは、そういう教育をいつの間に受けていたのだろうか？

自分の気持ちとオリヴィアの事に必死になっていた私は気がつかなかった。
いつの間にか大広間に来ていたエルフリード王子が、遠くから不機嫌な目で私をじっと見つめていた事を・・・。

第２９章　夏至祭２

大広間が人であふれかえり、入り口から新たに入ってくる人も途絶えた頃。
中央奥にある少しだけ高くなった台の上に人影が立った。
それに気付いた客達が一人、また一人と会話を止めて奥のほうに目を向けた。
すべての話し声がやむまで、そう時間はかからなかった。
「これより、陛下がご臨席されます。」
静まり返った広間を見回して、コンラートが声を張り上げた。
その言葉にあちこちから息を呑むような音がして、肌で感じられるくらいの緊張が広間を覆った。
「陛下はあの扉から入ってこられるのよ。」
マーサが私の耳元にそう囁くのと、コンラートが踵を返して奥の扉に近づくのはほぼ同時だった。
コンラートが扉の脇に控えると、いつの間にか扉の前に立っていた二人の兵士がゆっくりと扉を左右に開放した。
それまで無言で扉の方を注視していた客達は、いっせいに扉の方を向いたままその場で深く頭を下げた。
マーサが頭を下げたのを見て、私も慌てて同じようにした。

しんとした無音の中に、コツコツと足音だけが響いた。
「顔を上げよ。」
威厳に満ちたその声は、それほど大声を張り上げたわけでもないのに何故かはっきりと聞こえた。
つんつんと肩をつつかれて顔を上げると、既にみんな竜王の言葉に頭を上げていた。
シンプルな黒い衣装に身を包んだ彼は、集まった人々をひとしきり見渡すと口元に軽い笑みを浮かべた。

他を圧倒するような強烈な存在感といい、およそ人が持ち得ないだろう神がかったその容姿は、見るもの全てを魅了するようだった。
「みなよく集まってくれた。今宵はゆっくりと楽しんでくれ。・・・さあ、はじめよう。」
その手が軽くあがると、準備していた楽団員がゆっくりと演奏を始めた。
彼はそのままゆったりとした動作で中央の台から降りていった。
王の歩く先は人垣が自然に別れ、誰も行く道を妨げる者はいなかった。
分かっていたはずだけど、こうして竜王としての姿を見てしまうと、ジルがとてつもなく遠い存在になってしまったように思えた。

「ほら、仕事するわよ！」
マーサに勢いよく背中を叩かれて、ようやくずっとジルを目で追いかけていた事に気付いた。
空になったグラスが並んだ盆を持った侍女が、早く受け取れというように手を差し出していた。
慌ててそれを受け取って台車に乗せる。
「特にグラスが足りなくなりやすいから、優先的に片付けてね。」
マーサの言葉通り、台車はすぐにグラスと空になったビンでいっぱいになった。
料理の取り皿も消費が激しく、あっという間に洗い物がたまっていった。
それにしても同じお皿を使ってもいいだろうに、何故使い捨てのような使い方をするのだろう。
「そういうのがマナーってやつなのよ、多分。私も高尚なマナーはよく知らないから、分からないわ。」
何度目かになる厨房と大広間の往復の時にマーサに聞いてみたけれど、マーサも疲れたようにそう言うだけだった。

大広間では歓談の時間が終わり、中央でダンスが行われていた。
きらびやかなドレスがクルクルと宙に舞う様子は幻想的で、つい足を止めて見てしまう。
「フィリス、大丈夫？疲れてない？」
足を止めた私をどう思ったのか、マーサが手を止めて私のところに戻ってきた。
「うん。まだ大丈夫。ごめんなさい、つい見てしまって・・・」
マーサは私の視線を辿るとクスリと笑った。
「確かに普通に生活してたら、一般庶民の私達はこういうの見る事ないものね。気持ちは分かるわ。」
マーサがそう言った時だった。

突然、服の袖を強く引っ張られて振り返ると、見覚えのある侍女が目を吊り上げて立っていた。
「あなた！何故こんな所にいるの？一体どうやって入り込んだの？」
彼女は、あの日マーサの代わりとしてオリヴィアに付いた侍女だった。
まさかこんな所で再会するとは思いもよらなかった私は、突然の事に返す言葉が見つからなかった。
「エマ、落ち着いて！この子はもうオリヴィア様とは関係ないの。正式に侍女としてこの城に雇われたのよ。」
「何ですって！？マーサ、この子がオリヴィア様に何をしたのか、あなただって知ってるでしょう？それを・・・」
高くなった声に、周りも何事かと手を止めてこちらを見た。
「声が大きいわ。とにかく、外に出ましょう。ここはまずいわ。」
「・・・分かったわ。あんたも来なさい。」
袖を力任せに引っ張られて、体制を崩してしまう。
ぐらついた体に台車が当たって、グラスが床に落ちて大きな音を立ててしまった。
「ちょっと、乱暴しないで！」

言い争う声に、とうとう招待客までが騒ぎに目を向けた。
焦った私は、急いで体制を立て直すと外に出るために一番近い裏口に目を向けた。
けれど結局、私達はその場を離れる事はできなかった。

「フィリス・・・。」
鈴を転がしたようなその声に、体中の血が一気に下がった気がした。
「またあなたに会うとは、思わなかったわ・・・。」
悲しみを帯びたその声に、どんどん指先が冷たくなっていく。
「オリヴィア様・・・。」
「エマ、いいのよ。ありがとう。」
冷たくなった指先をぎゅっとにぎりしめて、ゆっくりと振り返る。
そこには、儚げな様子で目に涙を浮かべたオリヴィアが立っていた。
「フィリス、何故あなたがここにいるのかは分からないけれど。また、顔が見れて嬉しいわ。」
オリヴィアは涙を堪えるように笑みを浮かべた。
「ねえ、あの時・・・何故、あんな事をしたの？あなたは本当はいい子なのに、どうして・・・。」
そこまで言って、オリヴィアは耐え切れなくなったように泣き崩れた。
それまで傍観していた客達が、その姿に打たれたように駆け寄り彼女を支えた。
憐憫の視線がオリヴィアに集まり、そして不審そうな、敵意のある視線が私へと向けられる。
ざわざわとした声は次第に大きくなり、気がつけば大きな人盛りができていた。
その事実に、私は口元を覆った。

・・・なんて、ばかなことをしてしまったんだろうか。
これが、自分の気持ちばかりを優先してしまった結果だというのなら、なんていう取り返しの付かないことをしてしまったのか。
自分で責任を取れないほど事が大きくなってしまったことに、吐き気すら覚えた。
「込み入った事情があるようだが、向こうで話を聞かせてもらおうか。」
冷たい声と共に、大きな手に肩を掴まれる。
「エルフリード王子・・・。」
マーサの戸惑った声に、肩に置かれた手の主を知った。
「助けてやるから、大人しくついて来いよ。俺が贈ったものについても聞かせてもらいたいしな。」
耳元で囁かれて、嫌悪感に耐え切れず力いっぱい肩に乗った手を振り払った。
その事に、人盛りからどよめきが起きる。
「あ・・・・」
自分がしてしまった事に、呆然となる。震えるばかりの私を、マーサがそっと引き寄せてくれた。
エルフリードは一瞬ポカンとした表情になったが、何をされたのか分かると顔を真っ赤にして怒った。
「侍女ふぜいが、自分が何をしたのか分かっているのか。」

その時、人垣が割れるように二つに分かれた。
そこから現れた人物に、まるで時が止まったようにその場にいた誰もが固まった。
「陛下・・・」
そう呟いたのは、一体誰だったのか。

「・・・彼女を連れて帰ってやりなさい。」
ジルはエマにそう告げると、私の前に立った。

「もう大丈夫だ。おいで。」
そう言って、ジルは私の強張ったままの手を上から握ってくれた。
「少し席を外させてもらうが、みなはこのまま楽しんでくれ。」
水を打ったように静かになった人々に向かってそう言って、ジルは私の手を引いて裏口へと歩いた。
まるで、二人で街を歩く時と同じように・・・。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6963w/

盟約の花嫁

2012年1月15日01時52分発行